ISSN 0289-8772

コミュニティ

The Community

82

ササニシキの村に生きて

—宮城県米作地帯の人々—

1988　財団法人　地域社会研究所

コミュニティ

The Community

82

ササニシキの村に生きて

—宮城県米作地帯の人々—

財団法人　地域社会研究所

1988

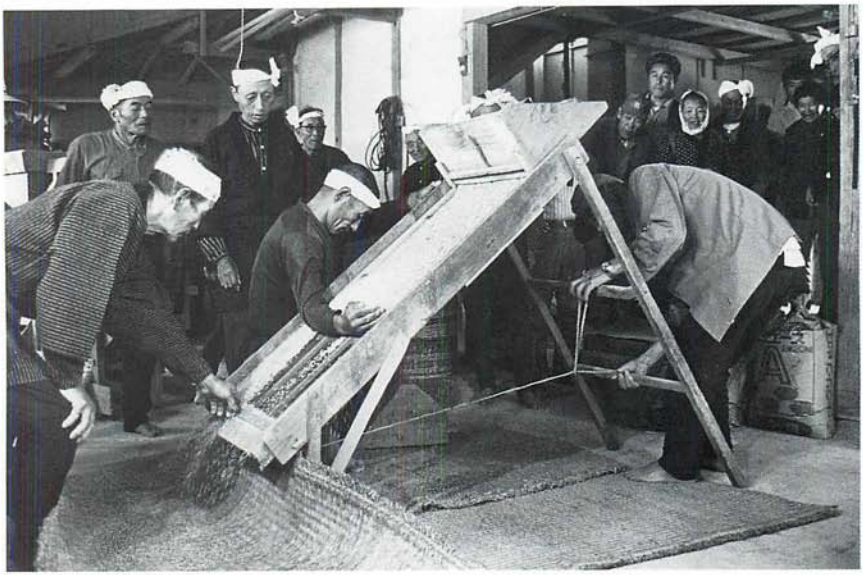
東北の穀倉地帯

調査に向かう学生たち

（写真提供　時事通信社）

農業委員さんとのインタビュー

（撮影　菅谷よし子）



30年前の籾摺り作業

機械化された直播田植え

（写真提供　宮城県農業共済組合連合会）

発刊のことば

（創刊号から）

人間は，ひとりでは生きてゆかれない。つねに多数の他人とともに，助け合って生きてゆく。その生活，職業，学問，趣味などにおいて，なにごとによらず志を同じくする人間の集団はこれをコミュニティと呼ぶ。人間は今日まで，あらゆる工夫を凝らして，いろいろな形のコミュニティをつくって，その中に生きてきた。これからさきも，人間のあるかぎりその努力はつづけられるであろう。

日本人もまた，古来いろいろなタイプの集団生活を経験してきた。しかし，その大部分は，封建的な社会制度を土台としたコミュニティであって，個々の自由な人間を平等に扱ったものではなかった。さいきん新しい日本になって，初めて民主的なコミュニティを形成すべき責任を負ったわけであるが，まだ，旧来の慣習と惰性にも力強いものが残っているし，新しい観念もいまだしの感が強い。

そのために，形のうえにおいて民主的社会となったわが国も，その実においては，いまだ空虚な状態であるといわざるをえない。いかにして良い民主的なコミュニティをつくるかということこそ，今日，日本人が直面している緊急課題である。

財団法人地域社会研究所は，この問題と取り組む目的で創立されたのであるが，国民全般にコミュニティの観念とその意欲がはなはだ薄いことが，もっとも基本的な問題であることに着目して，まず活動の第一歩として，平易で通俗的な叢書の刊行を計画した次第である。

叢書の名称を「コミュニティ」と定め，今後，各分野にわたる基礎的な知識の普及を目指して，つぎつぎとこれを取り上げて刊行をつづける予定であるが，われわれの念願のごとく，この叢書が広く国民の間に多少なりともコミュニティの概念を植えつけていくことに役だつならば，誠に本懐の至りである。

昭和39年（1964）春

財団法人　地域社会研究所
理事長　矢　野　一　郎

発刊のことば

（創刊号から）

[illegible]かれない。つねに多数の他人とともに、助[illegible]の中で、職業、学問、趣味などにおいて、な[illegible]の集団はこれを[illegible]コミュニティと呼ぶ。人間[illegible]ることを離れて、いろいろなかたちのコミュニティを[illegible]これからさきも、人間のあるかぎり[illegible]

[illegible]なタイプの集団生活を経験してきて[illegible]目的的な社会制度を十分に[illegible]と学に恵まれもつ[illegible]なコミュニティを形成すべき気[illegible]に特性に乏しいものが[illegible]

[illegible]民主的な[illegible]ば実は[illegible]であるといえる[illegible]日本人[illegible]

[illegible]この問題と取り組む目的で[illegible]ティの概念とその[illegible]本的な問題であることに着目して[illegible]の刊行を計画した次第である。

[illegible]と定め、今後、各分野にわたる[illegible]を目指して、つぎつぎとこれを取り上げて刊行[illegible]の全般のごとく、この叢書が広く国民の間に[illegible]の新しい姿を[illegible]ことに役だつならば[illegible]である。

[illegible]年

財団法人　[illegible]研究所

[illegible]

目　　次

報　告

ササニシキの村に生きて……1
——農業・家族・女性——

菅谷　よし子

第Ⅰ部　志波姫(しわひめ)の暮らし今昔……1

1.　ササニシキの村の地理と歴史……1

2.　町の人口と産業の変化……6

3.　明治生まれの子ども時代——小作の苦しさ——……11

4.　タバコの御馳走——女衆(おなごしゅ)の仕事——……14

5.　戦中・戦後の混乱の中で——戦地と銃後——……16

6.　子守りっことエンツコ(嬰児篭)——子育ての移り変わり——……20

第Ⅱ部　農村生活の変化と諸問題……23

1.　機械化貧乏——手作業と機械——……24

2.　豊かさの中の貧困……27

3.　農外収入——親と子の差異——……29

4.　お嫁においで——嫁不足の解消——……32

5.　旦那殿(だなどの)譲り——後継者——……35

6.　経済力と勢力関係……39

7.　女の仕事の変化……41

第Ⅲ部　女の暮らし ──結婚から老後まで── ……45
1.　嫁の姿　今昔 ……46
(1)嫁の指定席 ……46
(2)昔の嫁 ──耐える女── ……48
(3)嫁姑の逆転劇 ……51
(4)農村の『おしん』たち ……55
2.　結婚の世代的変化 ……56
3.　人生の順調度 ……61
4.　サンドイッチ世代 ──ひどい生まれの人々── ……65
5.　世代間の差異と調和 ──こういう世の中だもの── ……69
6.　家族意識と同居生活 ……74
7.　家娘(いむすめ)さん ──娘同居── ……80
8.　安心な老後の生活 ──オラ，今は幸福だぁ── ……83

第Ⅳ部　インタビューの記録から ……87
第1話　おっぴさんの昔語り ……88
第2話　明治生まれのおじいさん ……91
第3話　サンドイッチ世代の嘆き ……95
第4話　若い嫁たちの言い分 ──アンケートの回答から── ……99

あとがき ──3年間の思い出── ……105

座談会

村人のくらしとつながり……109

出席者　菅谷　よし子　　並木　正吉

司　会　湯沢　雍彦

なぜ志波姫を選んだか……110

東北型同居家族の典型……111

つらいサンドイッチ世代……114

村から出なかったお年寄り……116

ダナドノとカドク……118

娘と嫁の呼び名……121

知らん顔する夫……122

嫁と婿と姑……124

世代による意識の違い……126

家族大事の中の個人的生活……129

ありがたい時代の到来……132

実習学生の感想……137

報　告

ササニシキの村に生きて

――農業・家族・女性――

菅谷　よし子
（宮城学院女子大学助教授）

第Ⅰ部　志波姫（しわひめ）の暮らし今昔

1．ササニシキの村の地理と歴史

志波姫（しわひめ）は，宮城県北部中央に位置しており，仙台市から北上すること68km，「仙北（せんぼく）の米どころ」ササニシキの本場と呼ぶにふさわしい農村である。町の総面積30.57km²，そのうち水田が19.15km²，平野部の平均標高15ｍで，平坦地率70％といった数字に示されるように，東北の大崎平野に広々とひろがる水田が，志波姫町のなりわいを支えてきた。水田に必要な豊かな水は，当町の北方に流れる迫川と，一迫町から続く伊豆野堰の整備とによって，村に生きる人々に

常にもたらされるようになった。かつて人々を苦しめた伊豆野堰の氾濫と，異常な渇水は，今では老人の思い出の中にだけ存在するものとなった。

東北の米どころにとって恐ろしい天のしわざは，冷夏である。稲の改良は寒さとの戦いの歴史であり，昭和38年，大崎地方の古川農業試験場で誕生したササニシキは，宮城県農民の期待にこたえうる東北の大地に適した品種であった。それまでも，そしてササニシキ誕生後も，村の歴史をひもとけば，凶作の文字が何度も出てくる。明治38年の凶作，昭和９年の歴史に残る，数年来の不況に続く冷害による凶作，昭和57年から４年連続の異常低温による不作，これらが農村の経済を幾度となく窮地に陥れた。

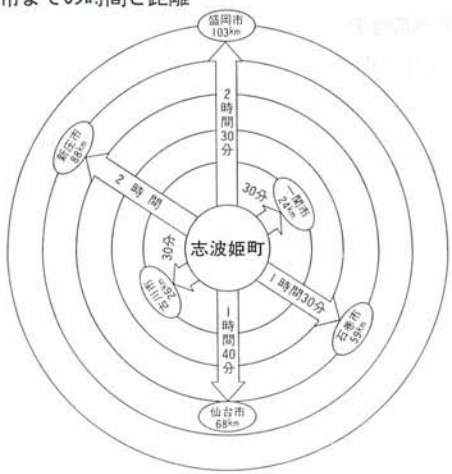
冷害だけではない。台風や川の洪水による被害も大きい。ほんの

図Ⅰ－１　志波姫町位置図

わずかの異常気象でさえ，稲の倒伏を引き起こして，豊作の予想をくつがえす。昭和62年の秋も，水田には波をうって倒れた稲が黄金色に輝いている。田植えに始まる努力のすべてが水の泡となる。お天気相手の農業は，バイオテクノロジーの時代にあっても，基本的には変化していないかのようだ。

図Ⅰ－2　志波姫町と周辺の町

図Ⅰ－3　主要都市までの時間と距離



しかし，町の様子は大きく変わった。国道や新幹線の時代の到来だ。畦道も農幹道という名のアスファルト道路に姿を変えて，人々は水田の間を車で走り抜ける。

東北縦貫自動車道が開通したのは昭和53年12月，そして待望の東北新幹線が営業を開始したのは昭和57年６月のことである。これらの交通手段が整って，仙台が近くなり，近隣の町々にできた工場への勤務も容易となった。志波姫町内にある工場は，弱電，縫製中心の中小企業であるため，雇用者は女子中心となる。したがって男子労働者は，近くの古川市や仙台市の企業や運送業に就業することも珍しくはない。

<表Ⅰ－１>に示したように，志波姫町は昭和40年に誕生した。それ以前は，村の統合が繰り返され，岩手と宮城の県境にあるために，県名さえも，明治９年に宮城県と決定されるに至るまで，いくたびかの変遷を重ねた。人々の言葉のなまりや風習は，岩手県の方にやや近いように思われるのも，このような村の歴史の故なのであ

表Ⅰ－１　村から町への歴史

1868	1869～1870	1871～1874	1875	1876～1888	1889～1964	1965～
明治元年	明治２年	明治４年	明治８年	明治９年	明治22年	昭和40年
宇都宮藩	栗原県 胆沢県	一の関県 水沢県	磐井県	宮城県		

堀口村	姫郷村	志波姫村	志波姫町 （町制施行）
八樟村			
沼崎村	白幡村		
刈敷村			
伊豆野新町			
梅崎村北郷	梅崎村		
梅崎村南郷			

（資料：志波姫町史）

ろうか。志波姫には志波姫神社がある。町のはずれにある，この小さな神社が町名となっているのだ。水田の中にある集落は，一つの町とはいえ，広すぎて歩けない。今も，町は17の区に分かれていて，人々の生活は区が中心単位となっている。

大正12年，小学校が統合された。60年も前のその落成式を，タキばあちゃん（明治33年生まれ）はよく覚えている。これまでの村の暮らしの中で，一番派手なお祭りだったと思うからだ。

「あの時のような派手なお祭りはなかったね。家は姫郷村だったけど，各区から出て，まき餅ね，お米１斗ついて，餅まいたの。各区から仮装行列してね。17区ござりすから，大したお祭りでござりしたね」

尋常高等小学校創立の２年前，大正10年，村に初めて電灯がともった。しかし，人々の生活は，昭和20年代になってもランプが多かった。戦後になって，志波姫村農協設立認可（昭和23年），診療所と公民館の建設着工（26年），ＮＨＫ宮城テレビ放送開始（30年），志波姫村有線放送開始（32年）と，施設も整備され，各家庭にも電化製品が購入されるようになる。昭和40年頃から，農業の機械化とともに家庭生活が便利になっていき，そのような日常生活の変化は老人の目をみはらせる。

「東京オリンピック，昭和39年すか，オリンピック見たくてテレビ買ったの。この辺で２，３軒しか入ってなかったころね」（大正15年生まれの男性）

「昔は，ランプ。それから，ここさ20Wの電気ひとつつけたばりだったの。今は何でも電気ですぺ。電気料も何万円だものね。昔は

月60円くらいだったから。風呂だって温水器ね。ここ15年くらい前からでねか，流行ってね」(明治43年生まれの男性)

生活は変わっていくが，しかし自然は変わらない。山や川は校歌に唱われている通りである。

「志波姫の　名をこそ惜しめ　栗駒は　気高く澄みて　迫川きよく　永遠なり」

(志波姫中学校校歌より)

2．町の人口と産業の変化

人口は，昭和30年に10,424人と最大の値を示すが，20年後の昭和50年には7,728人にまで減少した。昭和55年の人口総数は7,811人(男3,791，女4,020)，世帯数1,756，1世帯当たりの人員数4.4人である。

ここで，平均世帯人員数について考えてみれば，当町が全国の農耕世帯に典型的にみられる世帯の小規模化の過程を経ていることが確認されるであろう。全国の農耕世帯は，昭和30年の6.32人から，55年の4.67人へと急激な世帯人員の減少を示す。志波姫町でも同様に，昭和30年代までの6.6～6.7人から，55年の4.46人まで，約2人もの減少を示しており，志波姫町の世帯の少人数化は大きな特徴の一つである。

農耕世帯のもう一つの特徴は，60歳以上の高齢者を含む割合が高い点にある。農耕世帯の約7割には60歳以上のお年寄りが含まれているのである。

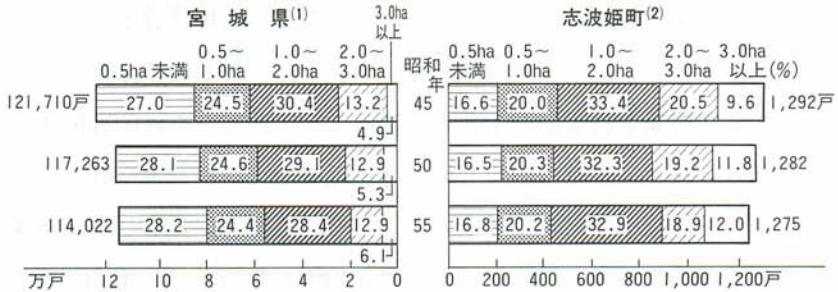
「私，嫁に来たとき，昭和21年で，13人家族だったの。おっぴさ

ん（曽祖母），しゅうと夫婦，小姑だの，舎弟（夫の弟たち）がいて。今は私たち夫婦だけ，２人だけ」（大正６年生まれ，女）

現在までの４世代家族でも８人家族程度で，10人を超す世帯は見当たらない。子どもの数が減少したうえ，進学や就職で町へ出て，そのまま結婚する子どもが多いからだ。志波姫中学校の全校生徒数は，昭和38年の886人をピークにその後減少を続け，現在では300人を割っている（昭和59年には271人）。

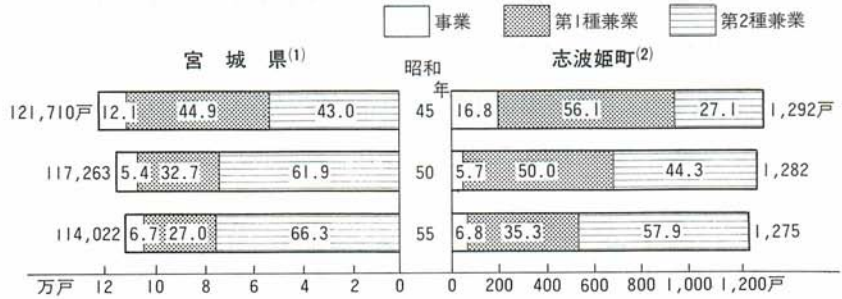
志波姫町の主要産業である農業については，どのような変化が生

図Ⅰ－４　専業農別農家の構成　（宮城県および志波姫町）



（注）1.宮城県については「宮城の農業」宮城県農政部　昭和58年４月より作製
2.志波姫町については，昭和57年度「農用地利用改善事業モデル地区指導事業結果報告書」昭和58年３月，宮城県農政部より作製

図Ⅰ－５　耕地規模別農業の構成　（宮城県および志波姫町）



（注）1.宮城県については「宮城の農業」宮城県農政部昭和58年４月より作製
2.志波姫町については「しわひめ」1981　宮城県志波姫町，参照。

じているか，<図Ⅰ－4><図Ⅰ－5>から要約すれば，以下の6点にまとめられる。

①農家1戸あたりの耕地面積は1.55haで，ほぼ一定の値を示しており，宮城県内においても当町の大規模農家の占める割合は高いと言える。

②専業農家，第1種兼業農家が減少して，それらの農家が第2種兼業農家に転化したために，第2種兼業農家が増加している。しかし，一方では，専業農家数はここ5年間ほど変化しておらず，これら全体の7％ほどを占める専業農家は安定した経営を営むに足る耕地面積を保持している。すなわち，ここでは，大規模農家と農外収入を主とする小規模農家との二極分解が生じているのである。

③第2種兼業農家が過半数を占めるようになったのは昭和54年のことであって，宮城県内でも最も遅い地域の一つに数えられる。

④農家数はほぼ一定であるのに対して，農家人口および農業就業人口は大幅な減少を示している（昭和45年から55年の10年間で，農家人口は10.9％，農業就業人口は39.6％の減少を示す）。

⑤年齢別の農業就業人口の推移からは，50歳以上の高齢層においては就業者数に減少傾向が見られない。すなわち，農業従事者の高齢化が当町でも生じてきているのである。

⑥各種製造工場の進出に伴い，恒常的勤務者や，日雇い・臨時雇いの男女就業者が増加しており，それと同時に，農業専従者が大幅に減少している（専従者のいる農家数は，ここ10年間で796戸から211戸に減少している）。

志波姫町は，農業，とくに水稲を中心とした典型的な東北農村で

ある。老人を含む3世代同居が家族の伝統型をなしており，イエ意識が強く残存していることは，厚生省人口問題研究所が昭和54年度に実施した『人口の高齢化に伴う生活構造の変化に関する調査』の調査結果によってもよく示されている。

しかし，伝統的東北農村の産業や，親子同居を規範とする東北型家族の生活にも，近代化と変化の波はいやおうなく押し寄せてくる。第1次産業から1.5次産業への移行をはかり，若者が居住できる環境を作らんがために，農業の効率化と収入安定策を練ると同時に，大崎栗原地方モデル定住圏計画に基づく地域産業の活性化が急務となっている。

「町内では，よい大学や働き口がないから，外に出て，自分のレベルも上げて，理想のお嫁さんを探したいっていうのが，若い者の考えだと思うね」(ある農業委員さんの話から)

さらに，当町では，ここ数年来，東北新幹線の古川と一ノ関との間に新駅を誘致しようという働きがあり，「おらが町にも新幹線駅を」の掛け声も大きい。しかし，この誘致計画は志波姫町単独のものではなく，近くの市町村との共同計画であることも手伝って，なかなか実現をみないのが町の悩みの種となっている。

「ここも変わったから。新幹線の駅できたら，もっとよくなるね。“音やかましくて何だべ”っていう人もあっけど，苦になるほどでもないしね。乗ったこと，さっぱりないの。音っこばり聞いてハァ」(大正15年生まれ，女)

若者に後を託す親世代は，農業経営を安定させて，後継者にもお嫁さんにも長く住んでもらえる豊かな町づくりを願っている。町の行政努力，それぞれの家族の努力はあちこちで見聞するものの，中

高年の人々の心配の種は尽きない。農業委員さんたちの話を聞こう。

「町内に，働く施設をどんどん作って，男女とも町で働いてほしい。このまんまでは，若い者は減っているし，土地はすさんで，ますます荒れるんではないかね。今は，農家の2割は，今後，田んぼを売るか，大きくやっている家に頼むか，迷っている状態にあると，私は見ている。5年後には深刻な問題となってくんでないべか」

「農家もよ，昭和50年ごろまでは景気も上り調子であったの。どこの家でも車など買えたのハァ。機械化が進んだっても，共同購入はあまりしねぇの。自分の機械は5年くらいかけて，まあ月賦だな，買うんだね。だから，農閑期は，その払いのために土建業とか建設業だとかに働きにはしるようになったんでがす。ここ数年は，景気が悪くてとくに苦しくなってきたと思われんの」

家族生活も変わっている。農業委員さんは，町の農業が変化すると共に，家族の人間関係さえも変わってきていることを肌で感じている。昔は，一つの家に，老夫婦，若夫婦，子どもたちが皆一緒に暮らしていた。今は，若夫婦のために部屋を増築しても，若夫婦から別棟を要求されて，また離れを作り直すことさえある。家の中がもめないように，円満にいくように，かつて強者であった姑が嫁に一歩譲って暮らしている。

そんな村から町への生活の変化を，本書では，インタビューの記録を生かしながら書きつづっていきたい。

3．明治生まれの子ども時代
――小作の苦しさ――

明治37年生まれの長男じいちゃんは，その名の通り，８人兄弟の長男である。先祖伝来の土地を守って農業を営んできた。村には大きな地主があった。その家は，代々，地主の家柄だった。その地主の家を除けば，村中ほとんど全部が小作人だった。年貢を納めるのが苦しかった。父親を大正元年に亡くした長男じいちゃんの思い出は，子どもの頃も，家の跡を継いだ頃も，小作人の苦しさに満ちている。

「その頃はね，ほとんど農業でば（か）り暮らしたの，この地方の人は。ところが，１反歩が地主さんのものだからね，小作料っつの払わねなくてね。皆，全部，小作人だったな。年貢米ちゅうの納めなきゃなんねがら，皆，苦しいんです。秋まで食いつがねくてないがらね。出稼ぎするとか，他の家の手伝いに行くとかね。手間取りって言ったね，稼ぐの」

両親の時代も，自分の代になっても，米と養蚕が中心だった。大正時代を知るお年寄りは，米とお蚕さんの割合は７対３くらいだったと記憶している。春蚕，夏蚕，晩秋蚕の３回取ったころが，養蚕の最盛期であった。当時は，家中をお蚕さんに占領されて，人は土間で食事をしていた。皆，それで当たり前だと思っていた。不思議に思う人などいなかった。

昔は兼業という言葉はなかった。言葉はなかったが，手間取りもしたし，養蚕もした。いぐさも織った。縄もなった。すぐ近くの築館町へ野菜を売りにも行った。これが兼業でなくて，一体何であろ

う。

子どもも働いた。長男じいちゃんには，子どもの時の楽しかった思い出なんて何もない。

「その頃は，皆，苦しいからね。子どもたちも，学校さ行く途中，木の枝だの切れっ端だの拾ってきて。空手で帰っては来ねがった」

お手伝いなんて生やさしいものではない。拾った木も葉も，すべては燃料にする。お金のかからない薪だ。竹馬も独楽も自分で作った。遊びながら，男の子も女の子も子守りをしていた。子守りは男でもやったんだ，と当時を思い返す目をする。

明治33年に生まれたタキばあちゃんは，子どもの頃，凶作に見舞われたことを覚えている。白いご飯なんて食べたことねぇの。麦ご飯は年中食べたの。そんな状況の中で不作に遭えば，食糧事情はもっと悪くなる。

「なんぼの時だったべなぁ，やっぱり不作で。麦ご飯，かで御飯——かでって，イモね。イモばすって，干して，ご飯に混ぜて食べるの。秋になって大根できっちゃ，大根の細(こま)あいやつ，切って，ざっと煮て，干して，これもまたご飯に混ぜて食べたり。じゃがいもの細あいやつ入れたり。どっこの家も食べたからぁ」

小学校へあがる年齢になっても，よほどの家柄の家庭でなければ，上級学校への進学は考えられなかった。そういう時代だったから，下の兄弟を背負って小学校へ行った。小学校へ入った7歳の時には，兄と馬3頭とで田んぼへ入った。代かきをした。淡々と話すおじいさんも明治35年生まれである。

齢80を超えた老人の子ども時代の思い出は，乏しかった食べ物

と，田んぼの手伝いと，子守りの間の読み書き珠算，この三つに話が集中するのが常だった。

明治39年生まれのおじいさんは，「私たちが一番苦労している」と言って，若い夫婦や孫の自由をうらやむ。子どもの頃，10歳にならないのに，明け方3時から田の代かきに連れていかれた。馬に鼻棹をつけて水の中を引きまわす。馬っこを後ろからたたいて歩かせる。少年の体はびしょ濡れになる。それが嫌で，馬小屋に隠れたこともあった。

「白いご飯，銀めしなんて，昔はめったに食えなかった。大根だのジャガイモ入れた，かで飯食ったんだ。銭はないの，昔の人はどの人も銭はないのだから」

戦争に征って，マラリアにもかかった。でも，おじいさんは，自分の時代が一番よいと思う。

「私たちの生まれた世代が一番よい世代だったんじゃないでしょうかね。苦しい思いもする。戦争にも遭って苦しかった。今，老人医療費はタダだし。私たちは，一番よいとき生まれて，よいとき死ぬようになっているんですね」

明治時代を知る人は，80歳を過ぎて90歳に手が届こうとしている。そのお年寄りの語る村の生活は，小作人の暮らしと地主の暮らしとでは全く異なる。そして，村の人々の大多数は小作人であった。80歳代の人々の語る子ども時代は，東北農村の貧しい生活の歴史そのものである。

女衆（おなごしゅ）の仕事は，農作業だけに限らない。農作業の合間に食べるお

やつの用意も，かなりの重労働であった。その記憶は，明治から大正生まれのおばあさんたちの頭を片時も離れないから鮮烈である。その思い出を次に語ってもらおう。

4．タバコの御馳走――女衆（おなごしゅ）の仕事――

志波姫の合宿も2年目の8月，泊まっている公民館に，村のお嫁さんから電話が入った。

「今晩，ずんだ餅持ってってやっから」

初めて聞くお餅の名前ではあった。学生に伝えると，ワーッ，ずんだ，おいしいのよ，先生知らないの，急に元気になっていく。

「おばんでーす」の声に出ていくと，お嫁さんは，風呂敷からボウルに入ったつきたてのツルツルしたお餅と，薄緑色のあんとを別々に取り出す。

「ずんだはね，枝豆ばゆでて，すり鉢でよーくするの。それに砂糖ば入れて甘くすんの」

うぐいすあん，と見えるものは枝豆のあんだ。ビールの泡と塩ゆでの枝豆，あの枝豆が魔法にでもかかったように，美しい黄緑色のあんに生まれ変わっている。

ずんだは「豆打（ずだ）」がなまった言葉で，宮城県の七夕やお盆には欠かせない大切な郷土料理なのである。そして，ここで私はハタと思い当たった。これが，農業委員さんたち，50代，60代の男性が，「良（い）がったぞう」となつかしむ，タバコの時のご馳走なのだと。彼らの話すタバコには煙がない。タバコは餅であったり，五目飯であったりした。重箱に詰まっている，農繁期のおやつがタバコ

なのである。

このタバコ作りを，女たちは農作業と共に思い出す。苦労だった仕事だったと回想する。

「人頼んで田植えすれば，タバコこしらえ，おやつね，午前中と午後からね。隣組の人たち，助けられだり助けたりしてっしょ。んだから，まんず，田植えする時のおやつは，飲み物，漬物，餅だ，だんごだ，ほれ混ぜご飯だ，赤飯だって，みーんな作るんだもの」（大正９年生まれ）

信じられないほどのご馳走だ。子どもも楽しみにしていた。今の食べ物なんて，インスタントでうまくねぇ。今よ，子どもの体力ねぇべ，あれも食い物が偏っているからだっちゃ。男たちの言葉だ。男たちは，妻や母，祖母たちの辛さを知らない。

タバコ作りの時期は同時に農繁期である。女は明け方３時には起きる。10人分のおにぎりやお餅を重箱に詰めて，日中は農作業に出る。手作りにかけた女の手間と時間のなんと大きかったこと。タバコ作りの後に続く日中の重労働を，女たちは黙ってこなした。男衆より先へ先へと，体を動かさなければならなかった。男たちは，その女の働きを当然だと思っていたのではないか。

大正３年生まれの夫は，４歳年下の妻の働きよりも，タバコを食べた頃の休憩の様子や，戦前，時計を持たなかった時代，いかにして時を知ったか，そういったことをよく覚えている。

「おなごたち，はんこモモヒキってモンペはいて，朝早くから起きてぇ，朝なんぼでも働いできて，ご飯食って，またすぐ出はって。腹すいだから，まず10時になるとタバコ，間食だな，間置いて食うがら。田んぼから40分くらいあがって，食べて。サイレンもな

かった，時計も10軒のうち1軒ぐらいかな，昭和7，8年頃すか，人の影が短くなってくると昼。お昼なってくっと，それまでは人より大きかった影が小さくなってくんの」

女はひと足先に田んぼからあがって，ご飯を炊いている。母もそうしていたから，妻もそうするのが当然だと思っている。

地主の家に18歳で嫁入りした，大正末期に生まれた人も，タバコ作りが何より大変だったと言う。しかも，婚家先には作男と作女がいて，10人分のご飯炊きはいつものことだった。

「ご飯炊きもむずかしかったの。ノリを取るのがむずかしくて」

ノリを取る？　障子張り用かしら。そうではなく，ご飯の上の方にノリをうまく作って，牛の飼料にしたのである。そして，タバコ作り，これがもっと大変だった。

「それより，忙しい時，隣近所にも手伝い頼むの。そん時のタバコって，おかあさんに教わったって，餅だの，だんごだのって，朝2時，3時に起きなげなくて。朝，昼，夜にタバコ，食べることに気遣って大変だった」

今ならパンと牛乳で済ませられる。しかし，40年前の若い花嫁は，タバコ作りの苦労が頭にしみこんでいて今も忘れられない。

5．戦中・戦後の混乱の中で

――戦地と銃後――

現在のお年寄りが，戦前派・戦中派と呼ばれて，戦争が世の中を変えたのを目のあたりにしてきた世代であることは疑いもない事実である。その当時の村の様子はどのようなものであったのか。

宮城県の歴史に残る仙台空襲は，昭和20年７月９日夜半から10日未明にかけて発生した。現在，仙台一繁華な商店街である東一番丁あたりは，その夜，まっ暗な空を火が赤く染めて，サイレンが鳴り響いた。防空壕の中で人が蒸し焼きになって死んだ。罹災者の数，57,321人にものぼる大きな戦災である。

しかし，仙台から約70㎞離れた志波姫村では，防空壕と呼べるほどの壕も掘らず，引き揚げてくる者の数も少なかった。

「防空壕っていうのはなかったんだ。木，けやきの木の根が，根っこが穴なったとこね，その穴に３人か４人入って寝だね。夜なるつど，毛布持って，その穴さ入って」（明治33年生まれのおばあさんの話）

恐いとは思わなかった。食べ物も昔からもともと粗末なものばかりだった。だから，ひもじいとも思わなかった。それでも，凶作の時でさえ食べなかった豆ご飯まで食べさせられて辛かった。飯米まで供出させられて，農村も食糧難ではあった。

一方，大正生まれの70歳代の男たちは，生まれ故郷の戦争中の生活を知らない。彼らの多くは戦地に赴いた。南方が主であった。

「高等科２年やって，今度は，もう戦争になってるからね。青年訓練所さ入って，訓練受けて，昭和15年に召集されて出征したの。弟はもっと前に戦地に征ったね」

男たちの舌は，連隊名や南方のカタカナの地名をすんなり発音する。どんな訓練を受けたか，銃弾の下をいかにくぐり抜けたか，マラリアからどう抜け出したか。彼らの思い出は，青春期に出遭った戦争体験で埋めつくされている。

彼ら，若い男手を欠いた農村では，どのようにして農業を続けた

のか。

「当時は，戦争，戦争でね。猛烈に訓練受けたもんでがす。だからね，農家の仕事，養蚕もあったでしょう。ほれをね，稼ぎ手（労働の担い手）が無ぇからね，家族がなんぼ一生懸命稼いでも，手がまわらねのっしゃ。田んぼ，相当作っておったから，他家の人にも手伝ってもらってね，なんとかかんとかやり続けたのしゃ」

戦地でも，スマトラでは，米は1日1回，あとはカボチャとサツマイモだけ食べていた。病弱な人から先に倒れていくのを見た。全員がマラリアにかかった。寒い寒いと震えた後に高熱がやってくる。しかし，マラリアでは死なない。恐いのは，コレラ，チフスだった。

長男が終戦後も音信不通になったままだったので，次男が本家の家督になった。その後に長男が復員してきた例もある。

「私は長男だが，別家（分家）したの。戦争に征って，音信が途絶えたためにね。私が戦死したと思ってね。ほして，次男にお嫁さんもらってね，本家守ってもらったの。その時，私がひょっこり帰ってきたからね」

生還して，再び生き直した男の生涯も，戦争という波に翻弄された人生であった。

大正の初めに生まれた60歳代の女たちも，夫が戦死する不安におびえ，ある者は夫の，そして他の者は弟の戦死に泣いた。長男の夫が戦死して，次男と再婚した人さえいる。家を守り，跡継ぎを産み育てるためであった。

「昭和13年にここに嫁にきて，14年に長男が出（来）たわけな

の。それが，戦(いくさ)当時だから，父ちゃんが3回も召集されたの。でも，仙台だの福島だのにいたから，昭和21年には召集から帰ってこれた。当時のことだから，召集，召集って，私と，死んだおじいちゃん，おばんつぁん（夫の両親）で，うんと農家のことやったの。子どもさ食(か)せなきゃねえて，みんな苦労したの」

夫は生きていてくれた。夫に戦死された女はもっと辛かった。

遠くを見る目をして，大正6年生まれのおばあさんは，「父ちゃんは戦へ行ってて（人）手がないのが辛かった，子どもたち小(ちい)こくて，まず働くのに一番辛かった」と繰り返す。

彼女は，戦前，結婚した。そして，3人目の子どもがお腹にいたとき，夫が召集された。子どもが生まれても，米がなかった。ミルクがわりにご飯のノリを飲ませた。その子が生まれたことも知らずに，夫は戦死した。

「戦死した後，その弟，私と同じ年な人いでしゃ。死んだって公報入って，お葬式してから，親たちに弟と一緒にさせられたの」

最初の夫との結婚も，お見合いも何もしなかった。親と仲人とで決めたのだ。

「親の言うこと聞いて，“いけ”って言われれば，いかねばならねと思って。今みたいに，あの人ヤンダ，この人ヤンダって言われねぇしね」

夫の戦死したあと，弟との再婚は，婚家の両親に従った。その両親には子育てもしてもらった。本当によくしてもらった。若い嫁だった自分は，田んぼで稼いだ。男手のない分，まわりの人に助けられながら稼いだ。戦争があって，その間に何人もの子どもを産んだ。親に従って戦争の波を越えているうちに，いつの間にか，農婦

としての一生ができあがっていった。

6．子守りっことエンツコ（嬰児篭）

――子育ての移り変わり――

70歳になるおばあさんは，同じ村から嫁にきた。6人きょうだいの2番目に生まれたこの人の思い出話は，自分の下に次々生まれた子どもたち，わが弟や妹をおんぶした子守りの記憶から始まる。

「小学校へはね，1週間のうち2日も行ったかね。子どもおぶって，子守りしながら学校したんでがんす」

子守りをしながら学校へ行って，たった2日しか休まなかった頑張り屋の女性にも出会った。

「小学校5年くらいになると，女の子は奉公にやらされて，あんまり学校へ来なぐなった。ひどいとこの子は，たいてい東京の方に子守りっこにやらされだぁ。そういう時代だったの」

おばあさん自身は，結婚して7人の子を産んだ。3人はすぐ死んだ。そのうち，双子だった女の子は2,300gで，「オギャー」と泣いて，どこも悪くなかったのに1週間しか生きられなかった。多分，栄養状態が悪かったのだと思っている。

子育ては，だれが，どのようにしたのか。

「子育てって，年寄りがみでてくれた。若い嫁っこは農家するので忙しくて，子どものことはかまわれねぇ。そのうち，年寄りも亡くなって，子守りしてくれる人いなくなったれば，下の方の子どもはよ，エンツコ（えじこ）さ入れて，中さ入れて放っておいた。エンツコさ入れで，まんず，今の人から見れば鬼みでぇなもんだ。そ

んでも丈夫に育ったの」

エンツコとは，子どもを入れる編みかごのようなもので，それに赤ちゃんを入れたまま，田んぼにも連れていけた。便利だった。東北地方の「動かない揺りかご」だ。こけし屋さんには，エンツコに入った童子こけしが並んでいる。おっぴばあさん（大姑）は，曽孫が泣くと，抱き上げるよりも，「エンツコさ入れどけばよいのに」と言って，エンツコを使わない現代をかえって不便に思っている。

大正初期に生まれたおじいさんは，自分の子どもが生まれるたび，エンツコを作った。

「俺，エンツコ作り，盛んにやったんだよ」

昭和10年代から，そして30年代に入ってさえも，エンツコは活躍した。子育てには欠かせない道具であった。大正４年生まれのおばあさんは，８人子どもを産んで，そのうち７人は丈夫に育てた。

「小さいうちはエンツコさ入れたの。もう少し大きくなると，ちょっと（じっと）してねぇから，おばんつぁんがね，子守りっこしてやったのしゃ」

子育ては，エンツコと，祖母や曽祖母の共同作業だ。おしめは母親が自分で洗った。それも，川や，家の前の堀で洗った。井戸水の質が悪かったのである。

「今は水道だからね。子どもいたころは，おしめだって，田さ持っていって，洗って，干してねぇ。そうして，タバコ（休憩）のときに洗って，お昼にご飯食べに戻る時，乾いたおしめ持って帰ってくるような，そういうのだもの」

今，若い嫁は工場や会社に働きに出る。やはり労働力なのだ。日

中，子どもの面倒をみるのは，おばあさんだ。昔も今も，子育てに専念できる母親の数は限られていた。よほど裕福な家の嫁だけが子育てに専念できた。農村では，孫育てはあるが，子育てはないと言ってよいくらいだ。そして，不思議なことに，現代では，ミルクだ薬だと，育児に手間ひまかけているのに，今の子どもはよく熱を出す。かつて，エンツコの中でも丈夫に育ったのに，どうしてなのか。おばあさんは，過保護だとそっと思う。

このおばあさんを見ていると，弟や妹の子守りに始まって，自分の子，そして孫や曽孫にいたるまで，村の女の一生は，ミルクとおしめのにおいと縁の切れない人生だったのではないかと思えてきた。いつも女のかたわらに，そして家族の中に，子どもがいたのである。

村の産業の移り変わりと共に女の仕事も変わり，子育ても変わる。だれが育児をするのか，どのように育てるか，80歳代から20歳代の女たちに話を聞くたび，子育ての変わらない部分と変わった部分とが交叉して見えた。

第II部　農村生活の変化と諸問題

雨ニモマケズ　風ニモマケズ
雪ニモ夏ノ暑サニモ負ケヌ
丈夫ナカラダヲモチ……
ヒデリノトキハ　ナミダヲナガシ
サムサノナツハ　オロオロアルキ……
（宮沢賢治　『手帳から　11月3日』）

志波姫町の生活も変化した。村から町へと名称も変わった。人々のなりわいである農業も，機械が人手に取って代わり，新たなる貧困――機械化貧乏が生まれた。機械の借金を返すためには農外収入を得なければならない。若き後継者たちは，長男でありながら，農業は片手間仕事と割り切って，工場や会社に勤める。そうしなければ嫁の来手もない。親たちも，旦那殿（だなどの）として君臨した時代は遠くなりにけり，と思い定めて，家族の上下関係をなくして，ひたすら平等な家族関係を築かんとして努力する。

こうして，志波姫町では，機械化貧乏，後継者不足，嫁不足，農外就労の増加が，顕著な問題として町の人々の話題の中心をなしていたのである。

1．機械化貧乏
——手作業と機械——

「耕すは手返(たがや)すである」——山形県生まれの詩人，真壁仁の言葉である。土をたがやす，苗を植える，稲を刈る，昔はすべて手仕事であった。

「田植えするったって手でやるすぺ。みな手でやんの。ほんとに話になんねぇの」

農業の主役は，長い間，人間の手であり，力であった。それは手間のかかる重労働なのだ。昔は，女も男もなく田んぼへ出るのが当たり前だった。

なかでも，戦時中，男手がなかった時代に，女手一つで田んぼを切りまわした話からは，辛い，苦しい，こわい，といった心の底からの叫び声が聞こえてくるようだ。

「何がこわいってよ，昔は女だって，牛や馬ばしょっ引いて，田んぼん中はいずりまわって。女は力がないしゃ。馬に引きずられて，なんぼかこわかったか」

時は変わり，今や「機械化貧乏」の時代が叫ばれるようになって久しい。

「機械化ビンボー，そのものす」

農家の旦那さんが，共同格納庫の機械を見せてくれた。大きくて複雑な機械だ。何に使うものなのか，どう操作するのか，見ているだけではわからない。しかも，高価な機械を共同購入している地区は数えるほどで，ほとんどの農家は個人所有である。どんなに田畑が狭かろうとも，年に数回しか使わなかろうとも，年にたった数回

使うために，農協から100万円単位の借金をしてでも購入する。なんとも不思議な現象だ。

昭和40年代の高度成長期に，若い人は近くに勤めに出て，出稼ぎは減っていった。通勤可能なところに工場や会社ができ始めたのだ。それにつれて，農業は専念すべき仕事ではなくなり，ササニシキの本場の当町でさえ，専業農家は数えるほどとなった。勤めが本業となり，それにつれて，農業は「日曜農業」や「朝晩農業」と呼ばれるものとなった。さらには，農繁期にだけ従事するものと考えられ始めたのだ。時間をかけずに仕事をするには，人間の手よりも機械の方が役に立つ。

昭和30年代に耕運機が入り，45年頃からはトラクター，もみすり機，バインダーと，アメリカの大農場風景にでも出てきそうな，大きくて複雑な機械が出まわり始めたのだ。

体は確かに楽になった。でも，借金に追われているうちに，田んぼの見まわりの回数は減り，苗をかわいがる人が少なくなって，寂しげな老人だけが増えた。お年寄りや女は機械が使えないために，自分たちの出番がほとんどなくなってしまったのだ。

機械化で農作業は合理化され，効率的な生産が実現されるはずであった。まさか機械の借金に首がまわらなくなるなんて，だれも予想だにしなかった。

そんな町の中でも，お年寄りは野菜作りや草取りに早朝から働きに出る。機械とは縁がなくとも，小さな作物を育てる喜びが，そこにはある。あるおじいさんの生活を紹介しよう。

今も早寝早起きのおじいさん（大正３年出生）は，農家台帳で

は，年間100日だけ農業に従事する補助者となっている。しかし，実際には，野菜作りに毎日精を出している現役だ。妻も，長男の嫁もしかり。妻は野菜を出荷する役，嫁は田んぼの主人公，きちんと分担が決まっている。長男だけは常勤という典型的な兼業農家である。

おじいさんは，夏，朝4時半には起きる。朝食までたっぷり2時間以上かけてキュウリをもぐ。妻がバイクで築館町まで，もぎたてのキュウリを60kgぐらい売りに行く。7時に朝食をとると，草取りやら植えつけが待っている。午後からも昼寝などしていられない。キュウリの出荷と草取りをして，ふと気がつくともう夕方だ。夜は7時半にご飯を食べて，お風呂に入り，テレビを見ているうちに寝てしまう。いつも8時半ごろだ。

機械を入れてから，農業も変わったと思う。

「機械は，たちまちのうちにやってしまうの。田んぼは嫁ひとりでやる。今は，あんまり多く作んねぇからね。合間に，その辺に行ってパートだのして。なんぼ多く作っている家だって，出て稼いでるね。そうでねぇと，とてもやりきれねんだもの」

おじいさんが，初めて田んぼに出たのは小学校5年生だった。それからずっと田と畑を見つめてきた。あのころは重労働だった。田の草取りが最大の難問だった。――今のような農薬はなかったんですよね――学生が念を押す。

「ないのないの。ほだから，朝から晩まで，草取って歩ぐの。これ，全部手だものね。これが1回で終わるんであればよいけど，1番草取り，2番草取り，3番草取りとあるのね。その3番草取りが，ちょうど真夏ね。稲がたけって（繁って大きくなって），暑い

て暑いて。ほでも，皆やってるから，何でもやり通したけどもしゃ」

今は機械と農薬で何も困ることなどない，おじいさんの顔にはそう書いてある。

2．豊かさの中の貧困

農村の生活は豊かになった。便利になって，農作業も機械がやってくれる世の中になった。病気も少なくなって，小さな子どもが流行病で死ぬこともない。昔，働いて働き抜いた一生を送ったうえ，過労が死を招いた時代は，はるかに遠くのことになった。小作人は消え，皆が豊かになった。

その豊かな暮らしを支えるために，家の外に稼ぎに出る。田畑を慈しむ暇もない。それだけではない。人間が楽に生きるために借金がふくらむ。どうも妙な世の中だ。70歳を超えたばかりのおじいさんは，あれこれ首を傾げて考える。

第1，機械が金を食う。田んぼの整備が終わってみると，むやみに広い。人の手では追いつかないだけではなく，機械がなければ，人間の労働では嫌気がさしてくるほどなのだ。それほど田んぼが大きくなった。

「機械で楽はできる。楽して，金がかかる。まぁ，そんな世の中になってきたんだな」

第2に，必要以上に便利な物がはびこっている。自動車もそうだ。あんなに1軒に何台も必要なのだろうか。

「こうやって歩ってみな。1軒の家に，まず少なくて，自動車2台だ。あと，4台から5台もある，自動車がだぞう。経費がかさむ

わけさ。世の中，逆さまになっちまって」

お金があるから買うのではなく，必要以上の物を買って，その代金を支払うために皆が働きに出る。それを「逆さま」だと言うのだ。

第3に，金がなくても家が建つ。肥料も消毒液も農協の借金で事足りる。いや，足らせる。

もっとある。旅行だ，会社の仲間の祝儀だ，不幸だ，そんな経費がかかり過ぎる。おじいさんの話を聞いているこちらまで，変な世の中になったものだと腹立たしくなってくる。金がなくては生きていけない世の中が悪いのか。文化的生活とは，こんなに借金がかさむものなのか。

「米売ったって，金は家にないの。家ば建て増すって借金すれば，それ毎年払って返していかねならね。ほれ，農家やるったって，肥料代だ，消毒代だ，その経費払えば，所得にはならねんだもの」

機械化は，息子や嫁を農外就労に駆り出す。どの家でも，留守番役はおばあさんだ。嫁が外に出て働かなければ，今の生活を維持できない。それがわかるから，おばあさんは家事に精を出す。だれも，嫁に家庭に戻れなどとは言わない。

「まぁずね，今はね，農家だって日曜百姓だからね。嫁に家にいてもらいたいなぁと思ったって仕方ないの」（大正4年出生）

夕食のテーブルには，肉，魚，冷凍食品が並ぶ。若い嫁は，家にあるはずの野菜まで買ってくる。おばあさんたちは，お茶飲みに集まっては，お互いに，煮物や漬物を皿いっぱいに盛りつける。ほめあって，おいしい，おいしいと箸を出しては，作り方を伝授する。

嫁は煮物を作らない。孫も振り向かない。おばあさんたちだけに通じる喜びであり，大切な文化の伝承なのだ。

3．農外収入
——親と子の差異——

志波姫でも，米だけに頼っていてはだめだと考える，そんな農業関係のリーダーに何人も出会う。本当は，全員がササニシキだけに依存する時代が終わったことを感じているのかもしれない。米価は安いし，機械だ，肥料だと費用はかさむ。米だけでは生きていけないと，複合経営に乗り出す農家もある。しかし，簡単に畜産農家への転換ははかれない。何百頭もの豚を飼うための資本，豚舎を建てられる環境，そして何年もかかる技術の習得，これらすべての条件が整わなければ，複合経営は可能にはならないのだ。

親から子へ，世代交代の時も近い。しかし，親は息子たちを見ていても，そして，現在の農家所得の状況を考えても，不安ばかりが先に立つ。自分たちも年とってきて，いつまでも働いてはいられない。けれども，息子にすぐに譲るとは言えないのだ。

「息子には農業技術がまだ備わっていないっていうか，水の管理などの技術，生育状況の判断，そういう細(こま)い能力とか技術に熟達していないんだな。それと，天候相手だから，でき具合も毎年同じってわけにはいかねぇし」

専業農家を育成する働きも盛んだ。小さな農家は専業農家に農業を委託する。田の貸借を斡旋する。しかし，他人に田を貸すなんてできない，そう思う人が多い。

「昔と違って，みんな機械でやっからね。朝晩農業で十分なのっしゃ。町の平均耕作面積が1町5反，もっと専業農家を増やして，大きく作ってほしんだ。だけど，なかなか田をひとに貸そうとはしなくてな」

そして，親と子の間に見られる大きな差異は，農外収入の有り無しだ。若者が町へ働きに行く現象を，あるリーダーは次のように説明する。

「農家も今は辛い仕事はないの。昔から，もともと収入はないわけさ。機械化になって，機械を使わざるをえないし，文化的な生活に慣れれば，人っつうはやめられなくて，収入ないから町へ行く。町へ行っても働き場は少ないのよ」

農業委員さんは，農家のよいところを，たちどころに三つ四つ挙げてみせる。

「勤め人はよ，毎日働かなくてはなんねぇべ。農家やってれば，食うには困らねぇよ。家屋敷，不動産があって安定してる。若い者の給料だけではなく，農家の収入があるから，病気したって心強いってもんだ。自分が倒れたって，家族の者が何人もいるから協力してくれるべし」

けれども，若い女性にしてみれば，長所として挙げられた点は短所にもつながりかねない。各地区を自転車で訪問して歩いた女子学生の目は鋭い。

農家が楽になったっていっても，大変なのは変わらないんじゃない？　広い庭も家も，掃除する身になったら嫌よね。それに，農業の収入って言うけど，赤字でしょ。家族が何人もいるって，わずらわしいよね。そうそう，隣近所のつきあいだってうるさいよ。昔ほ

どじゃないんじゃない？　大姑，姑，小姑，大変だよ。やってけないよー。

若い適齢期の娘たちは，農家のお父さんたちよりずっと現実主義者ではないか。

農業委員を務める50代，60代の父親の目には，若い息子たちの働きがどのように映るか。

「今の若い者は，朝，早起きをしないな。まるで朝寝の競争だ。朝はゆっくり，夕方は夕方で早目に切り上げて。こんなことでは農家はだめだ。農業っていうのは，天候相手のとこもあっぺし。夏暑くたって，働かねならねぇときは働く。いつまでだって働く。時間から時間まで決めてやるっていうのとはわけが違うんだ」

父は，勤めに出ている息子には言いたいことが山ほどある。彼の老いた妻も，嫁に言いたいことを胸にしまっている。その妻も，本当は口に出したいこともあろう。自分だって息子に正面切って言いたいのだ。

息子たちは，収入が少ない割には人並み以上の生活をしたがる。車，食べ物，身のまわりの物，すべてに金をかけたがる。勤め先の友人の方を近所の友人より大切にしているし，その数も多い。勤務先の人たちとグループ活動をして，何だかんだと出歩いている。本当に農業のことを考えているのか，疑問でしかたがない。

親たちは，息子によかれと思って面倒をみる。見合いもさせる。見合いの後で，「実は，俺，恋人がいる」と言い出して，親を仰天させる。一緒に住むつもりで家も改築していたら，若夫婦に同居を断られる。この期に及んで別居とは情けない。第一，あんな狭いアパートに住んで何がおもしろいのだろう。

「俺がやり残したことを長男にやらせたいと思っていたのに，息子は今の職は辞めないって言うの。嫁も農家からもらいたいと思って。嫁と２人で農家する気があればなぁって，かあちゃん（妻）と語ってだの。んだのに，子どもっつうは，親の思いどおりにはいかねぇもんだ。就職だって，結婚だって，息子の言う通りさせんのがよいとは思うけんど。こっちの考えどおりにゃいかねぇ」

父親は嘆く。この楽なご時世に，何の不満があろうか。自分たち夫婦は，体力の要る仕事をずっとやってきた。本当に能率が悪かった。旅行なんて，若いころ１回行ったきり。考えてみれば，もう銀婚式も過ぎた。これからは２人でゆっくり旅行でもしたいものだ。これまでの苦労を顧みれば，ささやかすぎるほどの，夫婦の願望である。

４．お嫁においで
――嫁不足の解消――

農業委員さんの集まりで，志波姫町の抱える問題をうかがった。「後継者問題，工場誘致，嫁不足の解消」――だれもがこの三つを取り上げる。農業委員さんは，三つとも，問題の根っこは同じとみている。若い男性に働く場が与えられれば，彼らは町にとどまる。それなら跡取りに逃げられはしない。夫が勤め人で収入が安定していると言えば，若い娘も嫁に来る気になるに違いない。

専業農家にだって魅力はある。

「今の若い娘は，なんで専業農家ば嫌うんだべか。いっこう辛くねぇのによ。田んぼったって機械がやるべし。忙しい時なんて限ら

れてんの。嫁さん，自由にできべぇに。勤めよりか，ずっとも自由きくのに。自分の裁量で何でもできる。昔みてぇに汚なくねぇ。だいたい，農家の親が，自分の娘ば農家には嫁にやらねぇって，本当に良ぐねぇ。親が悪い」と腹立たしげに言う。

農業の活性化，複合経営のすすめを書いたパンフレットを，手に握りしめる。

農業委員さんたちは，地区の親父さん代表のように，嫁不足を論議する。真面目な農業青年ほど嫁の来手がない。遊び人は若い娘とサッサと結ばれる。りっぱな青年が40歳近くにもなって，ひとりもんでは困るのだ。山形県のようにフィリピンに嫁探しに行くか。

まあ，結婚相談所と仲人報償金が先か。相談所には相談員さんを置いて，「農業後継者結婚仲人報償金交付要領」というむずかしい名前の条例で，仲人さんに結婚話をまとめてもらうか。この制度は，町内で縁談を首尾よくまとめた仲人さんには，１組につき３万円を，町外縁組みには１組５万円をお礼として出すものだ。

嫁不足は日本中の農村で問題となっている。全国各地の農村との交流も盛んだ。先ごろ，北海道へ視察に行った委員さんは，農村だけの問題ではないことを強調する。

「ここ10年くらいすか。町の商家でも，どこの町村へ行っても同じような状況だね。では，どうして嫁不足になるのかっていうと，農家の娘はまずだめ。嫁になる見込みはないの。いつも状況を見て知ってるから，農家の娘ほど嫌がるの。財産なんかもらったって仕方ないんだな。――対策ねぇ。結婚つうは，自分が相手を見つけてくるのが本来なんだ。だけっと，農家で働いてても女性との交際は少ないし，交流会やったって，真面目な息子さんほどだめなの。ほ

んとに，今はむずかしいね」

30歳代の若いお嫁さんは，結婚するとき，実家の母親に反対された経験を持つ。理由は，自分が農家で味わった苦労を娘にはさせたくないというものであった。そして，今，小学生の女の子が将来結婚するときには，農家には行かせないと断言する。自分が，農業や嫁姑問題で苦労しているからだ。母と娘は2世代にわたって，農家に娘が嫁ぐことに反対の立場をとっている。

村の中のどんな青年なら，娘は結婚してもよいと考えるのか。安定した職業に就いている人，すなわち，教員，町役場や農協の職員が結婚の対象となるのだ。しかし，このような若き男性，自宅通勤，農繁期だけの農業従事，イエと土地有り，高学歴，といったエリートは，ほんのひと握りにしかすぎない。多くの青年は，村から都会へと出ていってしまった。若い男性を，日中，町の中や田んぼで見かけることがほとんどないのも道理なのだ。

若い息子たちに，故郷にとどまってほしい。父親たちは必死だ。新幹線に新駅を，そして工場の誘致を，総合病院の建設をと，理想は掲げる。しかし，どれも思うようにならないまま，月日だけがいたずらに流れていく。

インタビューにうかがった女子大生たちも，話しているうちに，逆に身上調査のようにあれこれ尋ねられて，あげくの果てには，「あんたら，ここさ嫁に来る気ねぇすか？」と問われる。

学生たちは，合宿所で本音を語る。

農家には広い家屋敷があるね。そう，仙台市内のアパートと比べ物にならないくらいだわ。食べるには困らないって皆言ってたよ。

そりゃ，自分の家で何でも作れるんだもの。もう農業も機械化されてて大変じゃないって。だけど，だんだん家の手伝いしたり，大変なんじゃない？　うーん，そんなことより，嫁姑の人間関係が嫌だよね。そう，きのう行った家のお嫁さん，涙流してたもん。おばあさんだって，ゲートボールやってるときは楽しそうだったけど，家にいると邪魔者扱いされるって。それとさ，近所づきあいも大変なんだって。私たち，うまくやってけないんじゃない？

彼女たちの結論は一言，「私たちには農家の嫁はつとまりません」であった。

かつて農家の仕事は手作業中心だった。だから，それだけ多くの労働力を必要とした。嫁も，もちろん大切な労働力だった。嫁取りも婿取りも，そのイエの労働力の必要度に応じて決定された。今，その重労働は機械が人間に取って代わり，日常の生活にも自由とゆとりがあるかのように見えるのに，若い女性にとって，農家は魅力ある存在とは言いがたいのである。

5．旦那殿（だなどの）譲り
——後継者——

「“ムゴ三代つづけば蔵建つ”って言うども，ほんによぐ働いだものす。それであそごの家（エ）っコもくらしはよぐなったのす。んだどもムゴだがらって何時まで経っても旦那殿（ダナドノ）（戸主権）ゆずられねぇで，ムゴを通りこして孫に旦那殿ゆずったものす」

（大牟羅　良　『ものいわぬ農民』P.62）

旦那殿は家長であった。かつて，その力は絶大であった。食事時の席順さえ，上座に決まっていて，常に権威の象徴であった。

「旦那殿，まぁ主人公だな，その人が一番上座さ座ってな。今のように飯台に皆で並んで食べるってことは，まずなかったね」

今の旦那殿は，昔の父や祖父の時代をよく覚えている。

彼らの頭の中では，旦那殿の地位は，父から息子へ，代々引き継がれていくものであった。だれもがそれを当然の風習だと考えていたのに，今や時代が変わって，後継者が都会へ出ていったまま故郷の地に帰ってこないなどという事態も起こらないとは言えない。家を継ぐ者を確保するために，親たちは気を使って，一時も心休まることがない。

初めてササニシキの村を訪問した日，不思議な音に出会った。50代の婦人が「ダナドノユズリ」という言葉を口にした瞬間，それは「ダダダ」という音の連なりにしか聞こえなかった。何のことか。どんな字を書くのか。

「さあ，字は知らないけっと。昔っから，ダナドノユズリって言ってんの」

何軒も聞いて歩いているうちに，意味がのみこめてきた。ダナドノとは一家の主人，権力を握る人のことを言う。そして，ダナドノユズリとは，その地位や権力を跡取りに譲ることなのだ。

しかし，ダナドノの意味は，行く先々で少しずつ異なって語られる。

「ダナドノすか。家の中のこと，一切合財とりしきる人のことば言うの」

「サイフ持ちのことだな」

「サイフ持ちってだけでなくて，農作業のことから，つきあいから，全部のことに先頭に立つ人のことでねすか」

当のダナドノに聞いても，あまりにも当たり前すぎるのか，説明に困るといった表情をする。ともあれ，その家のことをすべて牛耳る人を指すのだと納得した。

それから2年後の夏，志波姫調査から帰ってきた直後，『ものいわぬ農民たち』という，岩手県の農民生活記録を読んでいたときであった。大きな辞書にも見つけられなかったダナドノユズリの活字を，その小さな本の中に見出したのだ。「旦那殿譲り」という活字に目が吸い寄せられる。私自身のインタビューの記録同様，旦那殿であることの意味と，親から子へ譲り渡していく様子が述べられていた。

譲る時期は家によって違う。農業者年金に加入する現代では，60歳が目安になることも多い。中年の女性は，譲られたときは遅いのに譲るのは早い，と嘆く。今のダナドノは就任期間が短くて，我が世の春を謳歌できるのもほんの束の間である。

ダナドノユズリを身上持ち（しんしょう）と言うおじいさんに出会った。そのときには，サイフ持ちに力点がかかる。最近はダナドノを早く譲る傾向にある。農業経営移譲年金を60歳で受給するせいか，兼業化が進んでサイフがいくつにもなったせいか，機械化が借金財政を当然のことのようにしてしまったからなのか。

――なぜ，早くなってきているんでしょう？

「なんでって，息子たちに身上持ち渡さねぇとね，どこかへ逃げられてしまうから，それならちゃんと渡して。そうすれば，ここで

安心して稼ぐ（働く）っていうような気分が息子にもあるんでねがなって，そう思うんでがす」

――おじいさん自身は，どれくらいダナドノしていたんですか？

「俺は身上持ちの期間つうの，うんと短かった。俺が親父からダナドノ受け取ったのは48歳の時。兵隊から帰ってきたとき，親父はトシだった。ほで，死ぬまでダナドノやるのかと思ったら，“お前がやれ”って。“んだ，やっから”って受け取った。

俺は身上持ちってヤンダァ。今はどこも若いうち渡すから，息子に聞いたらば，“やります”って言うがら，“ほだ，やれ”って任せたの。今，身上持ちしてたような気持ちで，息子をす（助）けるから，おれは気楽でいいの」

昔は死に譲りが多かった。今でも，80歳を超えてもおじいさんがサイフをだれにも渡さない例がある。しかし，死ぬまでダナドノでいる時代はもう終わった。

息子の厄年，42歳を節目にする家もある。孫が中学や高校に入学したときを境とする家もある。教育費の出し入れの時に，孫の親，すなわち長男とその妻がサイフ持ちでなければ不便でしかたがないからだ。

一方では，ダナドノになりたがらない若夫婦も出てきている。農家のやりくりが大変なのを知っていて，「今の方が気楽でいい」と言って，譲ると言われたダナドノへの就任を断る例も珍しくはないのである。

最近のお年寄りは，孫が後を継ぐかどうか心配でならない。だれもが，これからのアトトリについて話をしたがる。

大正３年生まれのおじいさんは，最初の子が男と知ったとき，こ

れで安心だ，後継ぎができた，と喜んだ。

「あの当時は，男の子ならば家督にするって頭があるからね。やっぱり，家督できた，安心だって，喜んでおったです」

今，その長男が旦那殿になっている。しかし，現代では，あまり長男にこだわらなくなってきている。だれが跡を継いでもいいのではないかと思う。長男には娘が3人，ということは，孫には男子がいないことを意味する。

「孫3人，全部おなごだからしゃ。1番目が嫁に行ってしまったもの。ほして，2番目は仙台で勤めすか，3番目は高校生でね。これも家にいねぇって言うしね」

今は時代が違うのだからしかたがない。そう思うのに，最後にポツリと本音をもらす。

「本当はね，やっぱり1番目を家に置きたかったの，俺としてはね」

子だくさんの時代には，いつかは，だれかが跡を継ぐという安心感があった。いざとなったら，養子ももらえた。家が絶えるなどということは，ご先祖様に申しわけのたたないことであった。後継者はなんとしても地元に引きとめておきたいのが親心だ。その親心は今も変わってはいない。

6．経済力と勢力関係

農家の長男，家督さんは責任が重い。昭和の初めに生まれた家督さんは，キュウリにまつわる思い出を語る。

――景気がよくて，おもしろいほど儲かった時代っていつ頃ですか？

「ハウスでキュウリ栽培したころな。昭和45年ごろすか。朝4時頃，キュウリもいで，夜も12時頃まで，一家総出で働いた。出荷すんのに，箱に並べて入れるから。忙しかったァ。おもしれぇくらい，現金入ってきてよ。ウン，4年くらい続けたかな。体はエラかった」

――お米よりキュウリですか？

「うん，あのころ，キュウリで当てた。俺は家督だから，弟たちの面倒みなくてなんねがったの。分家に出したり，養子に出したり，弟たちに家ば建ててやったの」

――何軒ですか？

「3軒。弟たち全員に建ててやった」

カカカッと笑うと，「キュウリで家建てたの」と2度も繰り返して，キョトンとした私たちを目の前にしたまま，もう一度“カカカッ”と笑い声をあげた。

その後，景気は悪くなった。昭和51年から54年にかけての冷害も痛かった。その時，農協から借金した分を補うのは大変だ。農家の旦那殿も顔色が冴えない。若い家督夫婦に旦那殿を譲ってしまえば気楽だとは思うが，若いモンに任せることには不安があって，自分の方から譲るとはとても口に出せない。

昭和ヒトケタの旦那殿は，最近，世間では，旦那殿譲りが早くなってきていることに気づいている。若夫婦が結婚して10年もたてば，親の方から気を使って，旦那殿譲りを言い出すことが多い。けれども，今のところ経済が思わしくない。このままでは，とてもではないがサイフを渡すとは言えない。自分の責任で，ある程度まで

黒字に転換しておきたいのだ。

農業収入より農外収入の方が多い時代だ。第2種兼業農家が増えている。一家の中にサイフがいくつもある。旦那殿だ，サイフ持ちだと言っても，昔日のおもかげはない。かつて，旦那殿と息子夫婦の関係は明確な上下関係にあった。サイフは旦那殿が握っていた。ただ，畑で作った野菜の売り上げは，息子夫婦の「ほまづ」になった。「だから，おもしろくて一生懸命稼いだの」。中年の妻は楽しそうに笑う。ほまづって何のことか？　ホマヅ――ホマチ――穂待ち。稲刈りが済んで，1年に1回の米代が入る前にお小遣いを手にすることを，ホマチと言う。町の人は「おほまち」と丁寧に言う。

今，多くの家庭では，勤めている若夫婦の給料のうち，息子の分は家計費に入れさせる。しかし，妻の分は若い人たちのほまちにする。かつては，妻の給料も残らず，サイフ持ちの夫の両親の手元に渡した。召し上げられた。当然すぎる金の受け渡しであり，それが家のキマリであった。

それが今では，嫁は嫁のサイフを握る。姑も“給料を家に入れろ”とは言えない風潮なのだ。女の仕事も，農業中心から常雇い中心に移り変わってきて，それが家族の勢力関係にも影響を与えてきているのではないか。

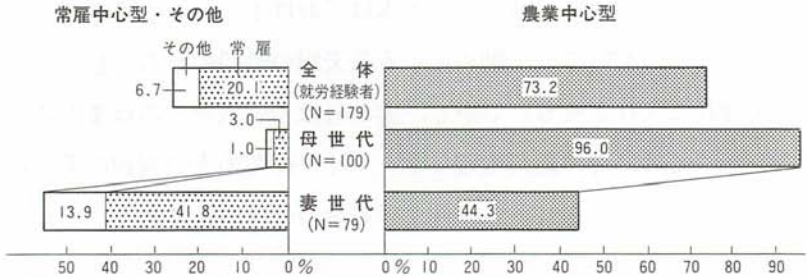
7．女の仕事の変化

親世代の母たち（明治37年から昭和9年出生，昭和59年12月31日時点で79歳から50歳）は，同居している息子の妻たちと，職業の面においてどのような違いを示しているであろうか。同居3世代家族

の中から抽出した母世代（102人）と妻世代（81人）を比較した昭和59年調査の結果を要約してみよう。

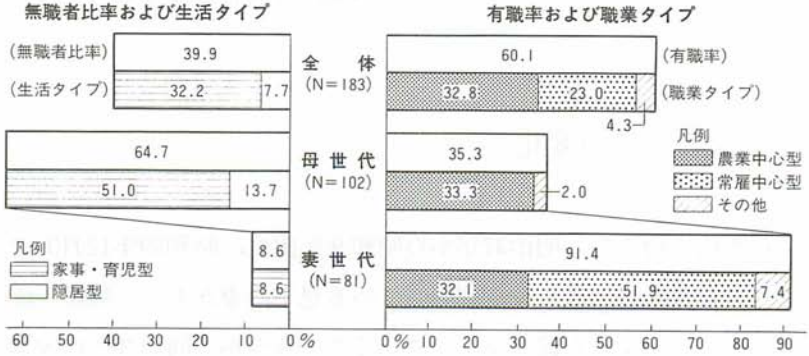
独身時代に仕事に就いていたか否か。母世代では72.5%が仕事をしていた経験を持ち，その仕事の内容は，ほとんどが「農業の手伝い」であった。40代の妻たちは，「仕事をしない」が66.7%にも達しており，習いものなどの花嫁修業をする例が大半である点に特徴が見られた。他方，30代，20代の若い妻たちは，大半が常勤（事務職，専門職など）の仕事に就いた経験を持つ。

図Ⅱ－1　結婚から現在までの最長職



（注）結婚から現在まで「全く就職したことがない」ケースが4例存在する。
該当数はM世代，W世代ともに2例である。

図Ⅱ－2　現在の就労状況



結婚後はどうか。何らかの仕事に就いたことのある母や妻たちは97.8%である。だれもが，嫁入り後に初めて農業に従事したり，パート勤務に出たりしている。そして，現在に至るまで最も長く従事した仕事は何か，については，〈図Ⅱ－1〉に示した通り，母世代では，ほとんど全員が農業中心であったのに対して，妻世代では，農業中心型と常勤中心型とに二分される。そして，このような世代的変化は，40歳代の妻たちを境目にして生じている。

現在の仕事については，母世代に高齢者が多いことから，無職を「家事・育児型」と「隠居型」の二つに分けて考えてみた。その結果，母世代の60歳以上は無職，50歳代は農業中心型，妻世代は常勤中心型の3カテゴリーに明確に分かれた。

さらに，母が家事・育児を担当して，妻が勤めるという組み合わせの家族は，母の年齢が60歳代に多く，経営面積が小さい。母が農業に従事して，妻が勤めている家族は，母親がまだ若い場合に限られる。また，母が家事・育児，妻が農業に従事している家族は，年長ペアが多く，しかも経営規模が町平均の2倍以上はある専業農家に多いことが明らかとなった。

〈図Ⅱ－3〉は，10歳間隔の出生コーホート分析から，独身時代・最長職・現在職の三つを総合した職業経歴パターンを四つに分類した結果を示している。

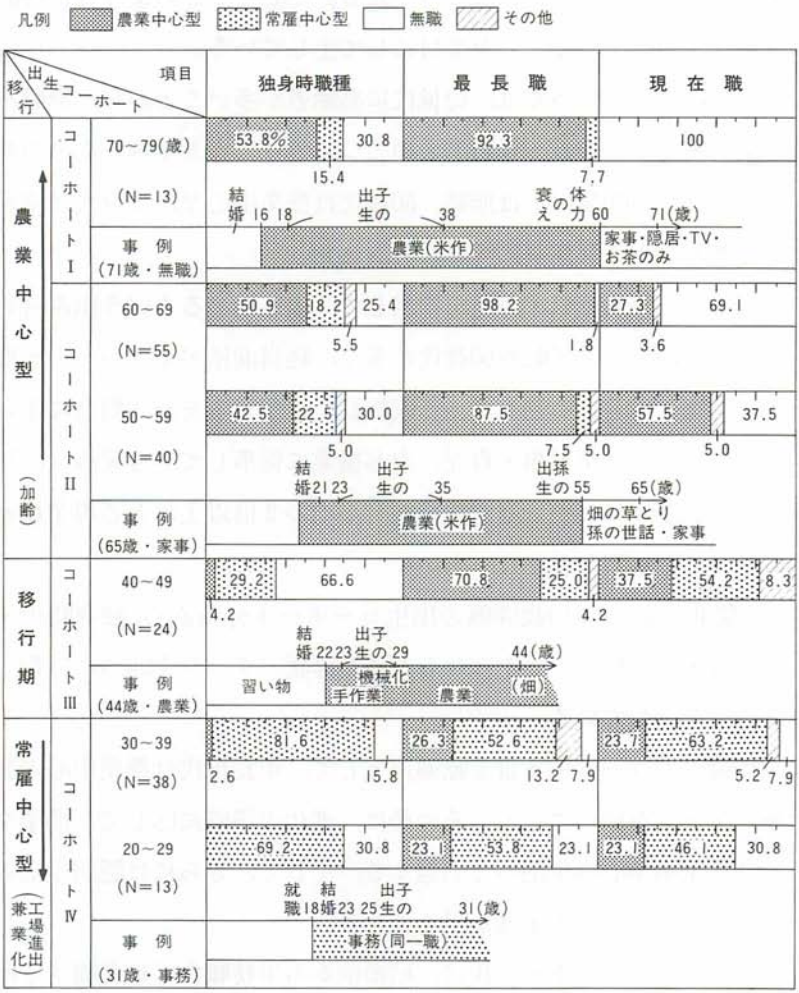
40歳代のコーホートⅢを転換点として，年長世代は農業中心の職歴パターンを描いている。その後は，老化の段階に応じて，農業をやめて家事中心の生活へと引退する，そして，さらには隠居生活に入る，といった女の生涯が見えてくる。

他方，若いコーホートⅣは，結婚前から事務職などに就職する例

が多く，一貫して同一の職業に従事している点に特徴がある。将来，後継者の妻として農業に従事する可能性もないとは言えない人々の生活である。

コーホートⅢは，両者の中間の形を示している。独身のときは習

図Ⅱ－3　コーホート別職業経歴



いものをして，結婚後初めて農業に従事する，しかし，子育て後は常雇い採用される，といったパターンが主なものだ。

女の仕事も，世代により，年齢によってずいぶんと変わってきたものだと改めて思わされる。

第Ⅲ部　女の暮らし

――結婚から老後まで――

お前お立ちか　お名残り惜しい
なごり情けの　くくみ酒
（宮城県大和町民謡『お立ち酒』より）

嫁入りの時に，花嫁の父が“これからの人生に幸多かれ”と祈って唄ったというはなむけの謡には哀愁が漂う。今も残る謡には，「お立ち酒」「宮城長持唄」がある。

嫁入りは，実家から婚家へ入る，いわば全く別の家の人となる，さらに言うなら，これまでの娘とは全く違う人間となる儀式であった。そう考えてもあながち間違いとは言えないほど，昔の嫁の生活は辛いものであった。3日も続く披露宴が終わると同時に，慣れぬ

農作業や家事をこなすべく，姑の言いつけどおりに体を動かし続けなければならない。

結婚は，女性の人生にとって最大の節目であった。そして，姑がどのような人間であるかは，嫁の運命を大きく左右する要素であった。田んぼの中で姑に髪をつかんで引きずりまわされた人もいた。18歳の嫁であった。やさしい姑がいたからこの家にいられた，という人もいた。多くの女たちの苦労と嘆きを私は受けとめかねて，今，思い返せば，ただ彼女たちの話に聴き入っただけであった。

1．嫁の姿　今昔

(1) 嫁の指定席

村のおばあさんが嫁入りしたころ，嫁の地位は想像もできないくらい低いものであった。若さに輝き，最も幸福であるべき嫁入りの後が，女の一生のうちで最も辛い思い出に満ちたときであったとは，一体なんという人生か。現代の華やかな結婚式とは全くかけ離れた暗い生活の幕開けが，嫁入りの日，その当日なのだ。

「あのころの披露宴はよ，２日も３日も続いだの。私の実家と，こっちとよ，両方で披露目ばして，最後が“おばんつぁんぶるまい”って，近くの女衆にお礼の宴ば開いて終わり」

「なんの，見合いなんてしねの。だんな様の顔すか？　１回も見だことねぇ。嫁に来た翌朝，起きて朝ご飯たべようとしたっけ。同じような年ごろの舎弟が３人もいで，どの人が自分のだんなさんかもわがんねぇで」

そんな時代，嫁は家族の中でどのように扱われていたのか。食事

のときは席順が決まっていたと聞いた。嫁の位置はキジリだとか。食事になると，上座にはダナドノ，次に家督が座って，嫁は同席を許されない。飯台やテーブルの時代がやってくるまで，嫁は別の場所に座った。キジリと呼ばれる一段低くなった控えの席が，嫁の指定席だ。その指定席に正座して，家族全員の顔を見ながらお給仕をするためだ。それが嫁入りの翌日から始まる嫁の姿なのだ。

「茶碗の中がカラになんねぇように気ば使って。いつでも皆の茶碗さ目ばこらしてた」

ところが，ある日，嫁の指定席が消えた。テレビが入ったからだと言う。どうして，キジリとテレビが結びつくのか。話を聞いて驚いた。

「だって，あんたァ。テレビば置いたらば，キジリから一番よく見えんだもの。おとうさんとこからは，うまぐ見えないのよ」

家長たる者，常に上座にあるべきであったのに，テレビの魅力に負けて，自分の座席をキジリに移したとは。この時から，嫁の指定席は消え去った。最も下座とされていた席が，テレビを見るに最適な場であったとは，家事の電力化にさきがけた，嫁の地位向上の象徴的なできごとと捉えられるのではないか。

今では，ダナドノである夫の父親も，嫁を大切にすることが多いようだ。

「今は，嫁だって，座る場所だの，風呂の順番だの，なんにもこだわることねぇの。家ではよ，嫁が孫と一緒に一番風呂に入ってるだわ」

カラカラと屈託なく笑って，続ける。

「俺は旅行さ行ってもよ，おなごの物は嫁のみやげな。若向けの

方が目につくだもの。ばあさん（妻）にはむくれられるけっと。やっぱり，家の中で一番よく働くのは嫁だァ，嫁に機嫌よくされるのがイイダナ」

昭和ヒトケタのおとうさんであった。彼は，嫁が昔の風習を教え込まれて，昔の嫁風にふるまうと，かえって嫌だと言う。妻も，姑である自分がそうさせているかのように思われるのを嫌がる。もう昭和生まれの親は上座の人ではなくなっている。

(2) 昔の嫁――耐える女――

今のお嫁さんは強い。なぜ強いのか。嫁不足の農家に来てくれた貴重な人だから。毎月，給料を運んでくる人だから。

昔の嫁は，年に3回だけ小遣いを与えられた。いかに少額であったか。60歳をいくつか超えた人は，小遣いの使い道を細かに教えてくれる。

「昔ね，お薬師様に行くとき，2円か3円もらえたの。1円で皿っこ10枚，おみやげに買ってくるの。あとの2円でね，子どもにアメッコ買って食(か)せればね。自分のつける髪油を買ったり，石けん買ったりして，そうして小遣いに使ったの」

かつての姑は強かった。嫁は奴隷のようだった。牛馬並みだと言う人もいた。どんなに心優しい姑のもとに嫁いでも，昔のしきたりどおりに暮らす嫁は，苦しいことばかりに出遭い，耐え忍ぶこと自体が，生きることそのものであった。

35年も前に家で起こった卵事件――自分の胸にだけ包み込んである卵をめぐる嫁と姑の対立を，2度も繰り返して聞かせる人がいた。そこには，35年前の嫁がいた。涙をこらえる若き日の嫁の姿が

あった。

「お姑さんとはけんかをしたことねぇ。黙って，ハイハイ，全然逆らわねぇ。だけど，自分の子どもに卵食せられねのは忘れらんね。外孫が卵食べたいって泣くでしょ。内孫（自分の子）さ食せね。それが辛くてね。んじゃ，明日から稼がないって，おとうさん（夫）さ言ったこともある。お姑さんさ，そんなこと言えなかったね。何も言えなかったね」

夫は黙って何も言わなかった。嫁は何が楽しみで生きているのかもわからない毎日であった。自分の子どもさえ自由にできない。入学式にもPTAにも，姑が出ていった。母親の出る幕はない。それより，自分の時間がないのがたまらなかった。自分が自分の生活上の主人ではないのだ。主人公を見失った人生を演じているかのようであった。

「とにかく，自分の暇っていうのが全然なくて。朝から晩まで働いて。昔の嫁って，奴隷みたいでさ。自由な行動取れなかったしな。夜，針仕事しなきゃなんねがったす。なんでかんで，稼がねば（働かねば）ねぇすので。お正月とお盆にさ，里に泊まりに行くのがまず楽しみで。あと，別に楽しみなんてなかったもの」

嫁にきたとき，12人家族だった。実家は6人だったのに。急に人数が2倍に増えて，だれがダンナなのかも判然としない。何もかもわけがわからなかった。姑は厳しかった。それも当時は当たり前のことかと思えば，なんともなかった。今になって思い返すと，我ながらよく務めたって思う。

「こういうものかと思って務めた。何もわかんねがったからね」

嫁は若いうちにもらえ。何もわからないうちに嫁にして，姑が仕

込んでしまえるように。村では，そう言われ続けていた。だから，昔は17，18歳の嫁が普通だった。昔の嫁だった人の口から言葉が発せられるたび，他家で出会った同じ年頃の昔の嫁が語ったことを思い出していた。どの女の話も１本の筋道につなっがっていくのがみえる。

昔の嫁は，若い学生と私を目の前にすると，急に，昔の若かった時の自分や姑に腹が立つかのように見えた。

「朝起き，大変だったな。台所のお掃除も大変，庭も広くて，お掃除も大変，板の間ふくのも大変。だんだん年取ってくるとさ，大変だったな，本当によくやったようなもんだな，今になって思えば。

孫，叱ると，自分の子どもなのに，お姑さんに，“子ども置いて，あんたひとりで出て行け”って言われてさ。孫はここの家のもんだからね」

昔の嫁は，ひとりで今思う。自分の両親も独立（分家）だった。自分は長女だったから，兄嫁の存在を知らない。考えてみれば，嫁と姑がどういうものなのか，何のイメージも持っていなかった。こういうものだと思っていた若いころの無知を，今，腹を立てながら省みる。

その夜，公子は眠れなかった。世の中には，姑に家を委せて働きに出ている主婦はたくさんいる。ひとつの家におしゃもじは二本いらないというのは，今や世間の常識のようになって，姑や夫も割り切り，円満に自分の縄張りを分担し合って暮らしているはずなの

だ。それなのに，どうして，我が家だけがこんなにうまくいかないのだろうと，情けなかった。

（橋田寿賀子 『新となりの芝生』P. 111）

現代の農村では嫁不足が深刻な問題である。農家に嫁いでくれる女はダイヤモンドのような稀少価値をもつ存在だ。兼業農家が多いから，若夫婦は外に勤めに行き，姑が家事をあずかることになる。このような女どうしの役割分担は，都市の共働き家庭とどこが違うであろうか。

かつての姑は力ある存在であった。たった一言で，一瞬の厳しい視線で，嫁を射た。

しかし，今，姑は力を失い，嫁に服従する。姑，嫁という言葉さえ口にしない。姑は“おばあちゃん”，嫁は“おかあさん”である。姑が嫁を“おかあさん”と呼ぶ。時代は確かに変わっているのだ。私は“おかあさん”と言う姑の声を聞くたび，一瞬，だれをさして言っているのかと，とまどうのが常であった。

(3) 嫁姑の逆転劇

30歳代の若夫婦は2人そろって勤め人という家が多い。第2種兼業農家が増えている町の状況からすれば当然の成り行きだ。

嫁が田んぼに出ないで，外に勤めに行く。これは今の姑が嫁だった時には経験しなかったことである。自分が嫁のときは，姑が孫の守りをしてくれて，嫁は田んぼと家事の重労働に明け暮れた。今の嫁は違う。朝，車で出かけて，夕方，買い物袋をさげて車から降り

てくる。

嫁が変わった。つられて，姑も変わった。いや，変わらざるをえない。新しい状況の始まりだ。女どうしの役割分担が変化し，力関係が逆転する。嫁と姑の関係が，いつの間にかすっかり変わっている。

「嫁はいねぇからケンカなんかしねぇけっと。“行ってまいります”って，朝，出はっていくから，暇ないの。あと，夜帰ってきてから，朝出て行くまで，子どもたち3人いるから，その騒ぎで終わってしまうもの」(大正12年出生)

――家の中の仕事はどなたが？

「うん，家にいる人がやるのっしゃ」

孫も，やっと今，昼寝させたところだと指でさし示す。

――食事の支度はどなたがなさるの？

「私。ご飯，朝作ってから，子守りして，お昼食べて，あと夕方，ご飯の支度して。

おかあさん（嫁），帰ってくれば，やるから。どっちか一人は子守りしねばなんねの」

家事はおばあさんが一手に引き受けている。このトシで金取りはできない。だから，家のことは私がやる，そう決めている。家にばかりいるから，たまには外に行ってお店をのぞく。以前は，地区の集まりや行事にも参加した。今は孫守りで手一杯だ。どこにも出歩けない。

嫁とケンカをする暇もないのは，嫁と顔を合わせる時間が少ないからだ。ケンカをしないのは，息子にとって一番好ましいことに違いない。仲が悪くては，息子がかわいそうだもの。

農作業をしてきたおばあさんから見ると，今の嫁の暮らしには何の苦労もないように思えて仕方がない。

「今の嫁すか，んー。楽も楽（笑い）。朝も、私ら今4時半頃起きんのでがすと。そいづ，6時頃まで寝ているもの。日曜だって，洗濯すると午前中終わりだ。農家の仕事，たまにすっと，晩方サッサとあがってくるしね。精一杯稼ぐ（働く）ってことねんだねぇ。おら，暗くなるまであがってこねぇもの」（大正9年生まれ）

自分の一生は，ただ働いてばかりだった。もう少し若ければ旅行がしたい。出歩きたい。ダナドノにお金をもらって出歩くってことはできない。年金に頼ることにしている。

農作業の思い出話をすると，今の機械と勤め人の生活に話が移った。日中，若い人はだれもいない。車さえ通らない。若夫婦に農作業をさせようにも，若い者に仕事を覚える気がないのは，こんな世の中のせいかとも思う。

「今，必ず1人か2人は勤めさ出てます。農家は片手の技（わざ）なの」

農作業は，片手間仕事の遊び半分のものになってしまった。若いころ，自分があんなに真剣に取り組んだ仕事だったのに，そう思うと，ため息が出る。

おとなしい姑である妻を持つ夫は，嫁と姑の意見が異なる様を目のあたりにして，不愉快になる。若夫婦に早くダナドノを譲りすぎたか。女どうしの話に男がまさか口出しはできまいしな。

「俺はさ，遠慮してるけっと。ばあさん（妻）には，嫁が威張ってね。ダナドノだから。いじめるっていうか，話でね，うまぐねぇことあるのね，再三。俺は，何も語らねぇの。俺がこうして頑張っているから。ばあさんには，“いいから黙って聞き流してれ”って

語ってるんだけっともしゃ。聞こえねふりしてればいい。一生懸命稼いでる嫁だから，日に3度食せられでればいいからって言うの」

ダナドノが父から息子へ譲られれば，主婦の座も母から嫁へと移っていく。当然のことなのに，嫁が昔の姑のような権力者になり変わるとは事前に見通せなかった。小さくなっている姑に，いばる嫁，まるで歴史の逆転劇を見せられているかのようだ。

おしん　「(あわてて) おれ，家でも子守りしてだ。弟や妹の世話はおれがみんな……」

きん　「んでも……」

おしん　「帰さねぇでけろ。何でもするッ，出来るんだがら，おれが奉公しねぇど，父ちゃんも母ちゃんも困るんだ。みんな困るんだから」

(橋田寿賀子 『おしん』(一) 奉公編　P. 67)

志波姫町に私が初めて足を踏み入れたころ，日本中の女たちが，NHKテレビの連続ドラマ『おしん』に涙を流していた。涙を振りしぼっていた。そんな中で，テレビの映像に向かって，「そんな苦労，私だって経験してきた。何が珍しいもんか」とつぶやく女たちがいた。おしんと同じ東北の農村に生まれた志波姫の年とった女たちである。彼女たちは涙を流さなかった。若い頃，涙をこらえて働いてきたからであろうか。あんまり涙をこらえてきたから，今，泣くことすらも忘れてしまったのか。

志波姫には，大勢のおしんたちがいた。まるでドラマの主人公のような女の一生を，私は涙を流して記録して歩いた。

(4) 農村の『おしん』たち

ＮＨＫテレビで放映した『おしん』が日本全国の話題になった。昭和58年のことである。あれほどの苦労はしなかった。奉公には出されなかった。けれども，芋かで飯，大根かで飯，全部食べた。「働けばいいのだ」と親たちから追い立てられた。テレビの『おしん』なんて，よくある話じゃないか，そう思って見ていた。昭和２年生まれで，戦時中に嫁入りした人の感想である。そして，最後につけ加えた。

「おらたちの生活，そのまま，おしんさんみたいなものだ。ただ，おしんさんみたいに成功もしねぇけっども」

小作人としての生活も，食生活も，手作業の厳しさも，テレビが映し出した通りだった。

「やっぱり，家でも小作だったから。自作でねぇから。終戦で自作農になったけども，その前，皆，小作だったからねぇ。皆，地主様々だすぺ。農作業たって，全部手作業だしねぇ」

辛いっていえば辛い。みんな辛かった。何度もリフレインのように“辛い”という単語が目の前で踊る。初老の女は学生の顔を見て，ハッとする。「口さ出したって，今の人たちに本気にされないんでないの」，うふふ……，口をつぐむ。わかる？ぴんとこないんでねぇの？

自分の嫁にも昔の話をしたりはしない。昔の通りにしつけたりもしない。

「おらたち，親たちに，“お前たちはただ働けばいい”って言われたんだ。おらたちが語られてきたこと，今，そのまんま，嫁さんに語られないね。語ったら，家庭分裂するんでないの。夏時なんか

ねぇ，蚕の桑取ってきたりで，朝4時っていうと起こされたんだもの。おらぁ，“いつまで寝てる”って叫ばれた（怒鳴られた）んだもの。今の人たち，朝6時に起きるけど，だからって，今，叫ばれねぇものねぇ」

大変だった，辛かった，とは思うけれど，口に出して言ってみたって何にもならない。ただ愚痴に聞こえてしまうから何も言いたくはない。しかし，口に言えない苦労をしてきた農村の“おしん”たちは，嫁は嫁なりに大変なのだろうとは思うが，本当は，若い者は大した苦労なんてしていないとしか考えられないのだ。

2．結婚の世代的変化

結婚は何歳で経験すべきものであったか。戦前の志波姫での適齢期は17～18歳であった。

「おらのころは17か18で嫁にいくのが普通であったす」「そのころ，17から18でかたづいていたから，21というのは遅かったの。今は21くらいで普通しゃ」と語るのは，60歳代の母世代の人々である。

<図Ⅱ－4>には，結婚年齢が「早い」「ちょうど良い」「遅い」のいずれと考えたかを，結婚当時と，現在からみて，の2時点に分けて，母世代と妻世代とで比較した結果を示してある。

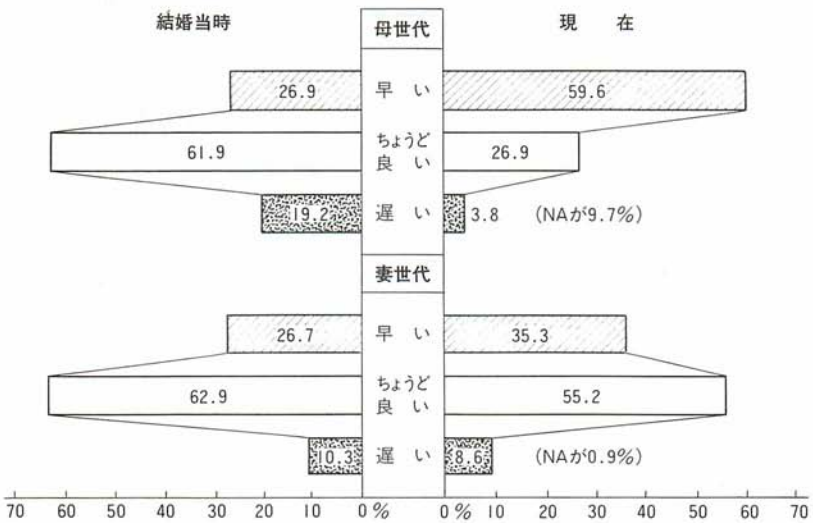
戦前，結婚はなぜ早かったか。当時は，イエへの適応，従順な嫁としての役割遂行，農家のよき働き手となることが重要視されていたために，自己の考えが確立する以前，すなわち10代の花嫁がよしとされた，それが早婚を促した。

当時としては遅い結婚をした人々の背景には，戦争という歴史があった。他方，早婚の場合には，イエの存続のために働き手が早く欲しかった，父や母の早死に，イエの没落といった状況が存在していた。

結婚当時は「ちょうど良い」と思った年齢を，母世代は，今から思うと「早すぎた」と考える例が多く，何もわからないままに嫁入りしたことに後悔している点が，母世代の大きな特徴であった。

結婚を，①結婚形態――見合い結婚か恋愛結婚か，②通婚圏――妻の実家の所在地，③生活領域――どこで知り合ったのか，④交際（デート）の有無，⑤結婚申し込み者，⑥結婚決定主体――最終的に結婚を決定したのはだれか，⑦交際期間――出会いから結婚までの期間，の７項目から分析したうえで，母世代と妻世代の比較を行い，その世代的変化の方向と，両世代間の差異の大小，そして，転

図Ⅱ―4　結婚の時機（timing）に関する認知



換点をなしたのはどの年齢層であったかをまとめたのが<表Ⅱ－1>である。

ここで，母世代（昭和59年12月31日時点で79歳から50歳）の103人が経験した結婚のパターンを要約して描けば，「仲人が介在する見合いだけを経て，当事者どうしは，なんら交際することなく，親の意向に従って，同一町内から20歳前に嫁入りする」ということになるであろう。

他方，妻世代（同居する息子の妻，82人）の主要パターンは二つに大別される。相対的に高年層においては，「仲人からもたらされた見合いを契機として，当事者間に半年間の儀礼的交際期間がもうけられる。そして，仲人から結婚申し込みがあった後，本人どうし

表Ⅱ－1　結婚の世代比較

分析項目＼世代変化の指標	母世代の主要パターン	妻世代の主要パターン	世代的変化の方向	世代差の程度	転換点を画す年齢層
① 結婚形態	見合結婚	見合>恋愛	見合から恋愛へ	最近10年間のみ大	30歳代前半
② 通婚圏	町内>郡内	郡内	町内から郡内への拡大	小	50歳代
③ 生活領域	第一次生活領域	第一次領域>第二次領域	第一次領域から第二次へ	最近10年間のみ大	30歳代前半
④ 交際	無し	有り	「交際無し」から「儀礼的交際」をへて「自由交際」へ	大	40歳代
⑤ 結婚申し込み者	仲人	仲人＝夫	仲人から夫へ	中	30歳代
⑥ 結婚決定主体	親	本人	親から本人へ	大	40歳代
⑦ 交際期間	全く無い，あるいは5か月	7か月	長期化	最近10年間のみ大	30歳代
⑧ 結婚年齢	19歳	23歳	20歳前から23歳へと上昇	中	50歳代

が納得すれば，隣接する町から23歳くらいで嫁にくる」といった像が描ける。

一方，若年層においては，「ごく身近な人の紹介や，学校や職場での交際を契機として恋愛関係が成立した後，２年間ほどデートを重ねる。そして男性から申し込まれた後，本人がそれに応ずれば，結婚は成立する。その時，女性の年齢は23歳である」といったパターンへと大きく変化する。

女性の結婚と末子出生が，高齢者と若い女性とではどのように異なるかを，より詳細に検討するためには，10歳間隔のコーホート比較を試みるのが適当であろう。女性が一生のうちで経験する事柄のうち，とくに大きな出来事を取り上げて比較したのが<表Ⅱ－２>ある。

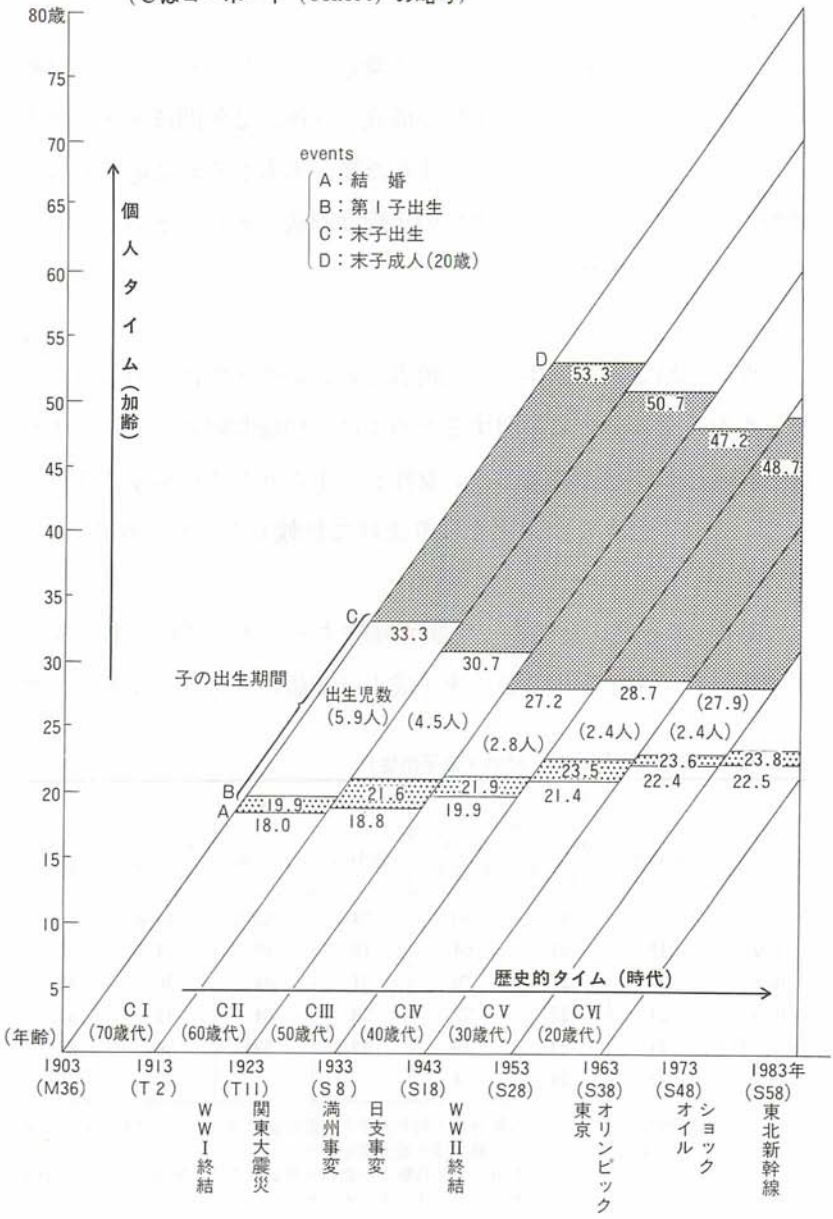
<図Ⅱ－５>は，女性の一生涯で経験する，Ａ：結婚，Ｂ：第１子出生，Ｃ：末子出生，Ｄ：末子成人（20歳）のときの年齢を，歴

表Ⅱ－2　コーホート間比較（結婚・末子出生）

イベント／指標／コーホート	A 結婚			C 末子出生			
	最頻値	80％通過	20歳時経験率	最小値	最大値	80％通過	30歳時経験率
70歳代	18歳	19歳	90％	24歳	42歳	40歳	29％
60歳代	18	21	64	19	40	34	50
50歳代	20	21	70	21	34	30	89
40歳代	21	23	27	23	34	31	67
30歳代	21	24	19	(22)	(33)	(30)	(85)
20歳代	23	24	8				

（注）１．Ｃ末子出生については，年齢分布の幅が大きく，最頻値はコーホート比較を行うための指標とはなりにくいので，最小値と最大値を示す。
２．Ｃ末子出生については，ＣⅥは，未経験率が高いと思われるので除外した。また30歳代に関してもカッコ内の数値は参考値にとどめておく。

図Ⅱ—5　出生コーホート別イベント経験時の平均年齢
（Cはコーホート（Cohort）の略号）



史的背景のもとに図示したものである。

ここからは，高年齢層では，出生児数が多いために出生期間も長いのに対して，若年層では出生児数が少なくなるとともに，出生期間が短縮されていることが理解されよう。

女性の生涯は，結婚へのプロセスから，何歳でどのような出来事を経験するかまでを，世代比較，あるいは年齢コーホート比較することによっても，母と妻，高年層と若年層とでは，大きな差異が生じていることが明示されたのである。

3．人生の順調度

「なんのはや，世の中というものは，そんなに人の思うほど善くもなし悪くもなしですわい」

（モーパッサン 『女の一生』 最後の1行 P. 338）

人は，時に，自分の歩んできた道を振り返る。浮き沈みのある人生と思えた道のりも，老年に達して顧みれば，坦々たる生涯であったと思えることもあろう。平凡な人生を歩んだ人にも，考えてみれば，山も谷もあったことに思い至るであろう。

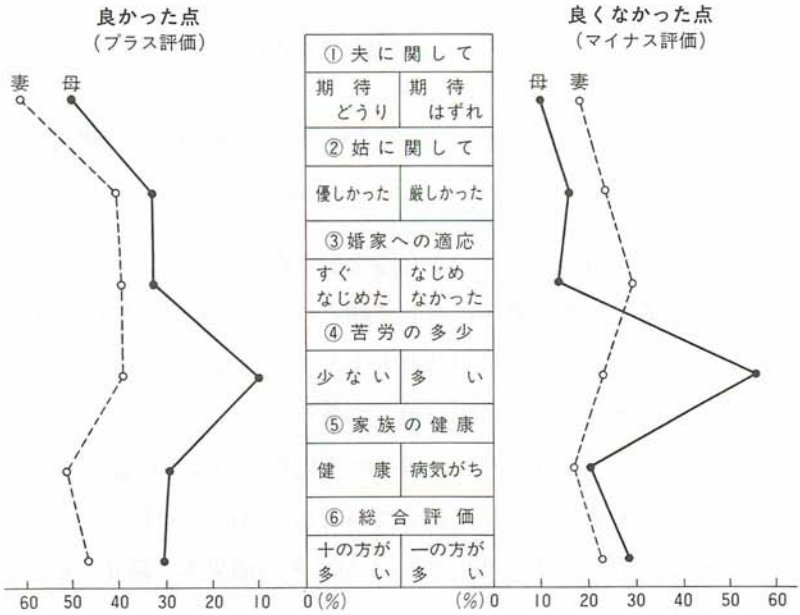
志波姫に生きた女性たちは，自分の人生をどのように捉えているであろうか。家族生活には満足していたか。母世代と妻世代では，どちらがよりよい評価を下しているか。その結果が<図Ⅱ－**6**>に示してある。

さらに，母世代と妻世代は，どのような苦労をしてきたのか。ど

ちらが順調な人生を歩んできたのか。人は，どのような生活領域において苦労を感じるのか，また，順調と感じるのか。そして，また何歳代で，あるいは家族のどのライフ・ステージにおいて，最も順調な人生を送り，また，最も苦しい時期をすごしてきたのか。人生の浮き沈みを，①暮らし向き，②家族関係，③職業生活の3側面について，「上昇」「下降」「山あり谷あり」「不変」の四つの曲線のうち，いずれか一つを選んで，二つ以上の側面が同一のパターンを描くとき，そのパターンを整合性と呼ぶ。

そして，それらを，①上昇型，②下降型，③不変型，④山あり谷あり型の四つに分類した。3側面とも異なる曲線を示す場合には，

図Ⅱ—6　家族生活満足度（世代比較）



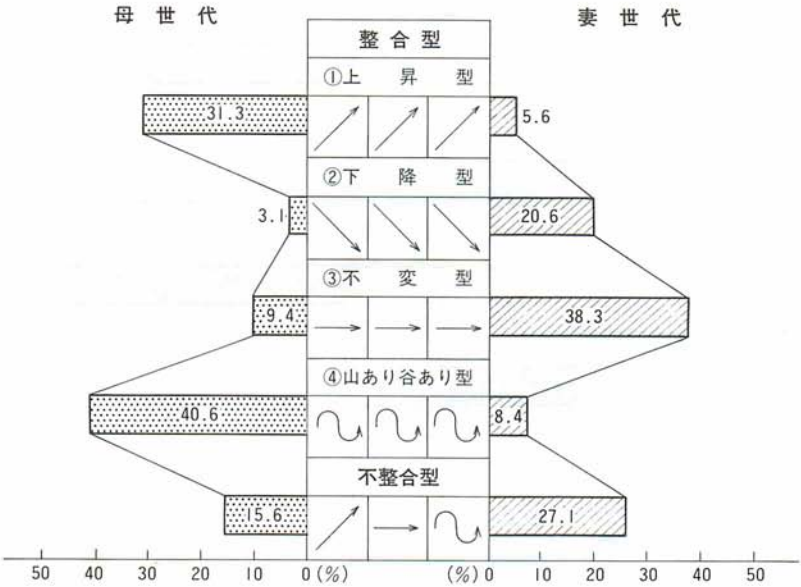
（注）「どちらとも言えない」など，プラス評価であるのか，マイナス評価であるのかが明確でないものは除いてあるので，合計が100%にはならない。

「不整合型」として，合計五つのパターンに分けて世代比較を行った。その結果が<図Ⅱ－7>に示してある。

さらに<図Ⅱ－8>には，①同世代の人々と比べて，自分の人生は順調な方であるか，②上世代（夫の母，実家の母）と比較した場合にはどうか，③下世代（妻）と比べてはどうか，といったさまざまの世代比較の結果を描いてある。

これらの世代比較についての考えを尋ねていたときに，はからずも，戦争と時代の転換点を共有経験としてもつ「サンドイッチ世代」の存在と，世代の違いをどう受け止めて，一つの家族の中でいかに調和をはかろうとするかに苦慮する，現代の姑世代の姿が浮き

図Ⅱ－7　人生順調度のパターン分類



(注)1.「整合型」は3側面のパターンのうち，少なくとも2側面以上が同一のパターンを示したものである。
2.「不整合型」は，3側面すべてが異なるパターンを示したものである。

彫りにされてきたのであった。

図Ⅱ—8　人生順調度の世代比較

（注）1.「大変順調」「やや順調」は「順調」のカテゴリーに，そして「やや順調でない」「順調とはいえない」は「順調ではない」のカテゴリーにまとめた。
2.　他調査は，幸福度調査であるが，カテゴリーは，注1.と同様なまとめ方をしている。
青井和夫編『高学歴女性の生き方』5章（5-24）より作製。

4．サンドイッチ世代
――ひどい生まれの人々――

「何があっても嫁には何も語らねぇの」

「おら，何も語らねぇことにしてるのよ」

訪問先で，あるときは，あきらめたように，またあるときは，吐き捨てるように，若いおばあさんたちによって語られた言葉である。

「何も語らない」とは，口出しをしない，とやかく言わない，いや，もっと強い意味――「見ざる　聞かざる　言わざる」――をもつ，姑の心得というには，あまりにも哀切な響きをもつ言葉だった。もう自分の代は終わった，時代も変わったのだと，自分自身に言い聞かせているかのように聞こえてくる。

婦人会や農協婦人部の方々と話した時のことを思い出す。50歳代と見える方々が，訴えるかのようにして，時には涙を浮かべて語ったのが，この村に生きてきた女の悲劇，昔の姑と今の嫁とにはさまれた若ばあちゃんたちの世代の辛さ，いわば「サンドイッチ世代」の苦悩する毎日であった。

嫁が来たら，自分はいい姑になるのだ。老いてきた体も楽になる。そう考えていたのに，現実は違う。嫁が来るまでがかえって華だった。嫁が来てもいっこうに楽にはならない。なぜか。外に働きに出る嫁の代わりに，家事のほとんどをこなすからだ。多忙のあまり，腰痛で医者通いの身になった人，隣近所にお茶飲みに行けなくなった人，年に１度の花見にさえ，孫の子守りのために出かけられない人，そんな話が，行く先々で出てくる。

サンドイッチ世代は，若い頃，昔気質の厳しい姑に仕え抜いてきた。やっと自分の代になったかと思うと，「外に出はって金取りする嫁」にこき使われて小さくなっている。嫁に来た当時も，働いてばかりいて，お金は持たされなかった。今だって変わらない。姑には年金があり，嫁には月給がある。それなのに，「おらたち，働いたって1文にもなんねぇの」。

苦労した後には楽な生活がくる，そう信じていたのに，農村の生活が変化して，女の力関係も変わった。時代の流れの中で転換点にいる人々は，「うんとひどい生まれだ」と自分たちの世代の不運を嘆きたくもなる。

このような世代の人々の生活はどのようなものであろうか。

昭和ヒトケタの妻たちには，家督の嫁がいる。そして，上を見れば，80歳になんなんとするおばあさんが健在だ。大姑が厳しくて，孫嫁を追い出したなどという例も聞くけれど，多くの場合，おっぴさん（大姑）と孫嫁の仲はいたって良好だ。車を運転する孫嫁に病院まで送ってもらっては，年金から小遣いを握らせるおっぴさんの例は，あちこちで耳にする。

おっぴさんは，嫁と孫嫁に対して，異なる態度をとる。少なくとも，若ばあちゃんにはそう思える。昭和5年生まれの，旧家の嫁である若ばあちゃんの話を聞く。

「おっぴさんも，やっぱり孫嫁はかわいいのか，なんにも言わないね。時代がそうだと思って，案外，理解あるみたいね。私に対しては，“嫁”だって頭があるのか，厳しいったら，もう」

若い嫁も心得たものらしい。

「嫁も給料から何でも買ってくるしね。嫁も，おばあさんが私には厳しいってこと見てるからね。わかってるんでない？」

家族の要である妻も，もう若くはない。体のあちこちに老いが忍び寄る。

「この家，広くてね，古いの。もう100年のうえ（以上）なるのね。掃除もうんと大変。私も神経痛だし，歯は悪くなるし，夜は早く休むのハ。朝早いからね」

もう，夜なべ仕事をする時代ではない。おっぴさんに気を使って，夜遅くまで立ち働いていたりしたら，自分の体がもたない。自分のことも大事にしなければならない。口には出さないが，顔にはそう書いてある。

昭和6年生まれのおばあさんは，嫁と姑は順送りだと考える。自分が嫁に来て，大姑と姑に仕えて，今度は長男に嫁が来て，自分が姑になる。姑になれば，嫁は頼りなくて情けなく思えるものだし，嫁には嫁の苦労がある。かつて，自分は農業に励み，そして昔の姑に仕えた。今の嫁は，柔軟な考え方の持ち主である自分たち姑世代に仕えて，勤めに出る。家事ももっぱら姑任せにしている。今も，姑の姑，おっぴさんは健在だ。彼女も上と下にはさまれたサンドイッチ世代だ。世代について，時代の移り変わりについて，考えればきりがない。

嫁という立場を，自分たちの頃と今の若い嫁の両方から考えれば，だれもが「今は楽だ」と言う。しかし，このサンドイッチ姑はそうは思わない。

「私たちの世代の人は，自分たちが嫁に来た当時は“大変だったなあ”って思って，“今の嫁はいいな”と思ってるね。ところが，

いざ若い人たちから考えると，やっぱり嫁の務めをやっているんで，“大変だ”と思っているべよ。私はそう思うの。私たちから見れば，今の嫁は楽だと思うけども，嫁の方から見れば，勤めも大変だと思っているんでないべか。やっぱり皆同じでないべか？」

嫁という立場にある辛さは，時代が変わって，仕事の内容が変わっても，皆同じなのだと強調する。

姑から見た場合，嫁と姑の関係はどのように映るのであろうか。

「昔は，大姑と姑，2度務めたの。私の世代は，もっと年取った世代さ務めているんだもんね。私の姑から見たらば，“なんだって，情けない嫁だ”と思ったかもしれないね。私たちから考えると，今の人たちは，また，“情けないな”と思うしね。今のおばあさんたちね，“節来てね（世代が替わって），仕方ないけど，やっぱり見てられねぇ”って言うんだね。でも，今の人は皆こうなってきてんだからね。順送りでね」

「今の嫁たちが姑になるようになったらば，次の嫁さんたち，どうなるべって思うの。今の嫁も，私たちが思うように，やっぱり思うだろうね」

今の姑は理解がある。少なくとも理解を示そうとする態度をとる。それぞれの世代には世代独自のものの考え方がある。今の人に，昔のことを言ってもわからないのだ。サンドイッチ世代は辛い。我慢強くなければ生きられないのだ。そういう世の中になったのだ。

サンドイッチの姑は，昔だったら，お茶飲みをしていられる年頃になっても，家事を一手に引き受けている。だから，少しも気を抜けない。あるおばあさんは，勤めに出る息子夫婦が出かけた後，すべての家事を引き受けている。

「今の人たちは外で働いているから，私たちは家の中のことをしなくちゃなんなくて大変だァ。いつまでも楽になんないね」

生活に現金が必要となった。若い世代は会社に勤務している。就職したからには，休暇ばかり取ってもいられない。そこで，無理して働くのは，家にいる若ばあちゃんだ。サンドイッチ世代は，自分のことをそう言う。けれども，それを口にはできない。恩着せがましく聞こえるからだ。言いたいことも黙っているから，すべては丸く収まっていく。外に働きにいく嫁が現金収入を得て，姑が年寄りの面倒と孫の世話をしながら家事を担う。そのような分担状況は，接触時間が少なくなるから，かえって嫁姑関係にはいいのかもしれない，そう考える母親たちは，昭和ヒトケタ生まれの悲哀を常にひきずって歩く一群の人々であった。

5．世代間の差異と調和

――こういう世の中だもの――

生きてきた時代が違えば，ものの考え方も，仕事や家事のやり方も異なるのが当然である。今，姑と呼ばれる人々は，実家と婚家との生活がどんなに違っていようと，婚家になじむことを自らに強いた世代だ。婚家の姑を中心に，新しく迎え入れた嫁を，自分の家にふさわしい嫁に作りあげるために，農作業のやり方から漬物の味にいたるまで，若い嫁のなすこと，人格のすべてを鍛えあげた。そうされる嫁の側も，嫁とは仕込まれるために存在するのだ，鍛えられるのも当然だと思っていた。だからこそ，一日も早く一人前の嫁になろうとして努力したのである。

しかし，今は違う。姑として嫁に教えることなど何もない。農作業は嫁の仕事ではなくなりつつあるうえ，機械化された現代に，手作業の方法を教える必要はないのだ。料理も変わった。ましてや，親との同居を当然のことだと思って受け入れてきた姑世代と，現代の家族制度になじんだ子世代とは，いつでも対立する危機を内に秘めている。考え方が互いに違うと知っているがゆえに，そしてその違いにもかかわらず，家族の調和をはからなければならない。そう思う姑たちの話に耳を傾けてみよう。

専業農家の姑は，自分が嫁にきた当時と今の時代とを比べては，考え考え語る。

「一般のお姑さんは厳しかった。私のお姑さんはそんなに厳しくなかった。しつけは厳しかったけれども，意地悪ではなかったね。嫁にきたとき，お姑さんに全部教えてもらったの。こっちのしきたり，家風を教えられたの。慣れるまでは大変だったぁ。鍬も使ったことねぇし，料理も，タバコ（休憩）の用意も大変だった。まだ20歳ね，学校終わってすぐ来たんだもの。何もわかんない方がいいって，その方が早く慣れるからって言われて。来て，全部，驚いたの。まるっきり他人（よそ）の家だもの。お姑さんには，外のことだって，内のことだって教えられたのね。私も覚えなきゃねぇって精一杯だったし，お姑さんには何でも相談したね」

ゆっくり家族で話などする暇はない。買い物にも出歩かない。そんな生活を送った思い出のひとコマに灯ろうが揺れて見える。遠い夏の七夕の日，近くの町に一迫川の灯ろう流しの行事があって，家族皆で見に行った。それが楽しみといえば楽しみと言えた。だから，今も忘れられない場面となって記憶に残っている。

同居している若夫婦も農業に従事している。田，畑，豚と忙しい。かつて，姑がしていた家事が今，「私の番になって」，ふだん，姑である自分は，食事の支度や外のハウスの仕事をする。それでも，農業に両世代が従事しているから，兼業農家と違って接触回数は多い。午前と午後，おやつどきに家族全員が集まってお茶飲みをする。

「うん，若い人に相談されるの。考えはズレてるのっしゃ。そこを通すんでなく，抑えると，おかあさん（長男の嫁）も私に何でも聞くからねぇ」

考え方は違う。それを知ったうえで，話もするし，相談にものる。それが専業農家では円滑にいっている様子が，ここには示されている。

兼業農家で留守番をしていた姑は，自分と息子夫婦と中学生の孫の3世代の違いを明示する。仕方ないな，時代だもの，とため息をついては，ゆっくり考えながら話す。彼女は大正12年生まれだ。

息子夫婦が町まで働きに行って日中留守にするので，しぜん孫との交流が多くなる。とくに，夏休みは孫たちも家にいるから，ご飯だ，おやつだと，孫の言葉に振りまわされて，1日が過ぎていく。自分の子ども時代とは雲泥の違いだとは思うが，孫相手に昔の苦労話をしようとは思わない。本当に，今の子どもは幸せだと思う。

「昔は，学校さも入れられねぇ。小学校終わるとそれで終わりだし。10人兄弟だったの。他家さ，子守りっこさやらせられたんだもの。学校出た4月には，子守りっことかご飯炊きにやらされたのさハァ。今，孫は13や14（歳）にもなっては，“ばあちゃんが育った

ときは，こんなだった”って言ったってわかんねぇの。孫は気まま語って，寝てて，怒るのっしゃ。私らの頃は，親の言うこと，なんだって聞いて……。嫁入りだって，親に決められてきたのっしゃ」

そして，近くに住んでいた義姉が，老後ひとり暮らしの生活を送ったのを見たり，自分の姑が20年以上も寝たきりだったのを看病したりしたので，老後ひとりきりになることはひどく寂しいことだというのがよくわかっている。わかるから，何を言われても耐える。遠慮しながら生きている。いつでも，だれにでも気を使っている。息子たちには，自分の遠慮や配慮がわかっていない。現に，孫の世話もしているではないか。毎日遊んでいるわけではないのに，しかし，それを口には出せない。口に出したら終わりだと思うのだ。

「家督たちは，“ただ居ろ”って言うけどもねぇ。働いている人から見れば，ただ居てって思うだろうけど，違うんだねぇ。そいつを言っては，けんかばりしてしまうし。言うときはちゃんと言うのっしゃ。まず，世の中，逆さまだって言われるけど，年とった人は引っ込んでなきゃあ。これでも，言うに言われないで気使ってんのっしゃ。そいつ，若い者も汲んでくれれば。皆に出はっていかれたって（出ていかれたら）ひとりになっぺし。十のうち七つくらいはおばあさんの方が引っ込んでいれば，うまくいくのっしゃ。孫と子どもと一緒に暮らしてるのが，のんきだからねぇ。寂しくねぇばかりもいいもんだねぇ」

今は穏やかで，自由な生活だ。孫も手を離れたし，お茶飲みにも出歩ける。今までが「いっそ，ひどいことばかり」だったから，旅行に行ったり，踊りを習うのが楽しくてしかたがない。そして，孫を見ては隔世の感ありと思うばかりだ。

「今の子どもたちは気ままでないべか。時代が別だって言えば終わりだけっども。大正の人と昭和の人だからねぇ。比べられねぇもんね。うまくやるには，抑えねばねぇ」

つい最近，おっぴさん（夫の母）が亡くなったばかりだという専業農家の姑は，大正13年生まれで，上と下世代からはさまれた，サンドイッチの上側が突然取れたような状況にある。息子夫婦と一緒に農業に従事しているといっても，かつて経験した手作業の辛さと，息子夫婦の従事しているハウス栽培などの農業形態とは比べものにならない。お茶飲みは，家族全員で１日２回，決まった時にする。そのとき，あれこれ話はするものの，同居しているのだから，お互いに気分を害さないようにはしている。何しろ，世の中が逆転しているのだもの。

「やっぱり，昔の人と今の人の頭は違うから，ある程度はねぇ，違うのね。こういう世の中になってるから，不平不満を言ってもしかたないから。たまには，息子さ，いきなり言うこともあるけっども，そんでも，加減して，一緒にいるから，気まずい思いしないようにして暮らしてんだねぇ」

別居しているわけではない。嫁いだ娘をとうてい当てにはできない。同居している長男夫婦と仲よくするのがいいのだ。しかし，自分の一生を振り返ってみれば，戦争だ，仕事だと懸命に生き抜いてきて夢中だった。ふと，顔をあげてまわりを見渡してみれば，世の中が変わっている。なぜだか，その時代の変化に乗り切れない。心にわだかまりが見え隠れする。

「昔，親っていうのは，おっかねぇもんだったけど，今はきょう

だいみていに言ってるんだもんねぇ。息子さ負けないよう，私も男になりたいね。自分たち，戦争当時，カボチャおかゆ食べて，子どもができたって構ってられなくて，投げっぱなしで。今こそこうしていられるけっと。一生懸命やってきて，収穫出たときね，天地が替わったんだね」

自分たちの実りのときとも言える老後を迎えたとき，天と地が入れ替わっていた。家族の中の勢力関係が逆転してしまったのだ。

どの姑も，若い人には若い人なりのやり方がある，苦労もあるのだろうと思う。それでも，自分の若い頃の苦労とは比べものにはならない。孫ときたら，自由な世の中で，豊かさを満喫している。若い人には働いてもらって，一緒に住んでもらっている。これ以上，何かを望んでは申しわけないのだ。とやかく口に出すのはご時世に合わないのだ，そう思う大正期から昭和の初めに生まれた女たちがこれほど大勢いようとは，私には想像もできないことであった。

6．家族意識と同居生活

志波姫町には伝統的なイエ意識，世代的継承が残っているといわれる。東北型家族の特徴をより顕著に示すと考えられる同居3世代家族のうち，母（G_1）と妻（G_2）を選び出して，家族意識が世代間で変化しているか否かを検討しよう。

第1の尺度は，小山隆らによって考案された「TM尺度」である。この尺度は，家族意識の新旧度，すなわち，伝統型（T＝Traditionalism）と近代型（M＝Modernism）を示す質問項目への賛成と反対の程度から，伝統的家族意識と近代的家族意識のうち，いずれ

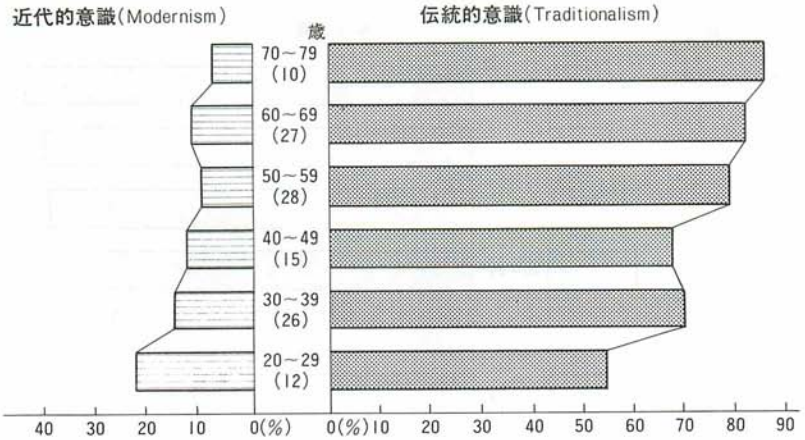
の傾向が強いかを測定する基準である。

この尺度を使って世代比較を行った結果，妻世代では多少「近代型」を支持する傾向が出たものの，母・妻世代ともに，かなり強い伝統的家族意識を保持していることが示された。

<図Ⅱ－9>は10歳間隔の出生コーホート分析の結果を示す。この結果からは，年齢が若くなるにつれて，伝統的意識が漸次減少して近代的意識へと移行していること，及び30歳代と20歳代との間の格差が最も著しいことが指摘される。

第2の尺度は，アメリカのベングッソンによって開発されたものである。このベングッソン尺度では，家族内における親子間の交流に対する考え方や，ものごとを決定する際に重視する立場が，個人か家族全体のいずれであるか，を問うている。そして，家族を中心とした態度を取る「家族主義」と，個人主義の立場をとる「個人主

図Ⅱ－9　TM尺度のコーホート比較（総合）



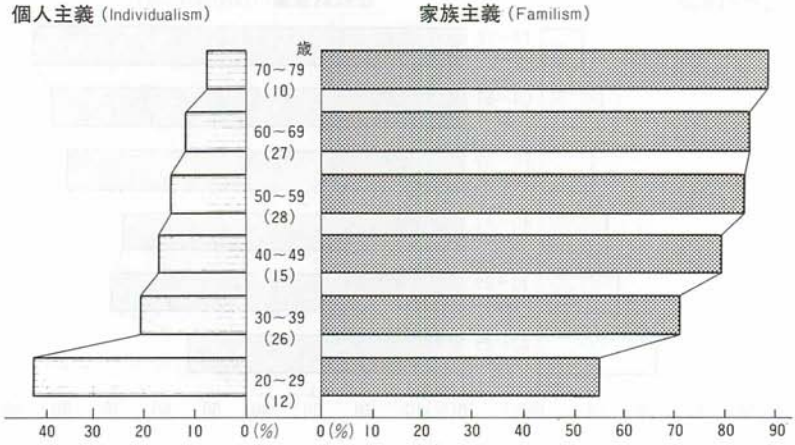
(注)1.（　）内は該当するサンプル数（合計は118人）。
2.「その他」（事情による，DK，NAなど）があるために，両者を合算しても100%にはならない。

義」とを両極とする尺度を構成するものである。

この尺度を使って世代比較した結果，TM 尺度よりも顕著な世代差が示された。すなわち，妻世代において，家族主義から個人主義へと移行しつつある傾向が見られたのである。

<図Ⅱ－10>のコーホート分析の結果は，①若年層になるにしたがって，家族主義から個人主義へと移行する，②コーホート間格差は，30歳代と20歳代との間で最大である，③40歳以上では家族主義の傾向が強いが，30歳代で変化の兆しが見られ，20歳代に至って初めて，個人主義志向への転換が示される，以上の3点を示している。

図Ⅱ－10　ベングッソン尺度のコーホート比較（総合）

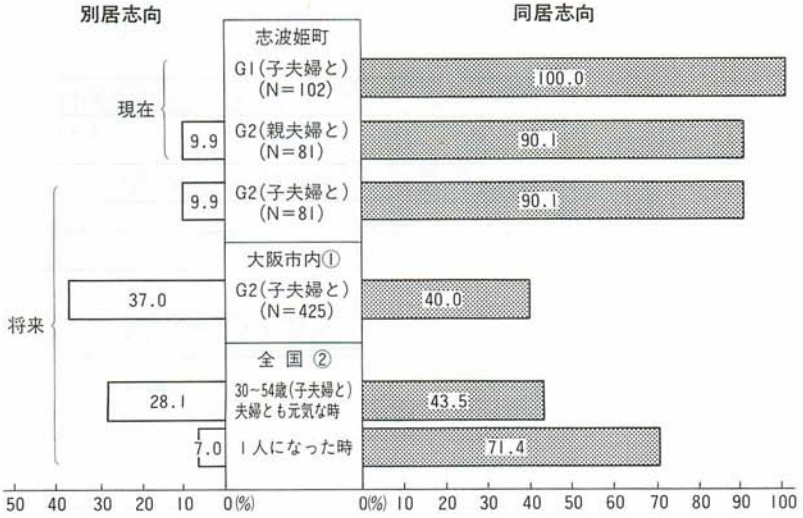


（注）1．（ ）内は該当するサンプル数（合計は118人）。
（注）2．「その他」（DK, NA など）が少数あるために，両者を合算しても100%にはならない

このように，伝統型および家族主義の家族意識を強く保持しており，若年層において個人主義への転換が見られる場合，東北型家族の特徴の一つである同居規範の強さや，べったり同居の生活も，若年層において変化し始めているのであろうか。同居生活の変化について考えてみよう。

第1に，同居志向パターンについては，伝統的慣習に基づく，長男との結婚当初からの一貫した同居形態から，将来，途中同居や近居型扶養へと移行する兆しがみられるか。<図Ⅱ－11>は，志波姫町では，妻も次世代（G_3）と同居を望んでいることを示しており，このような一貫同居を志向する点に，世代的連続性が強く存在すると言えよう。

図Ⅱ－11　同居・別居志向

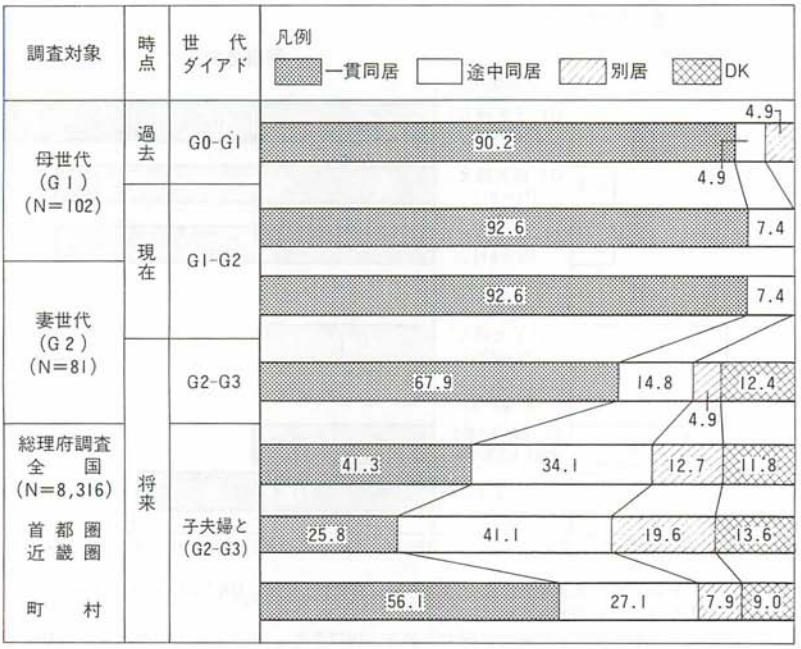


（注）1.上子武次・増田光吉編著『三世代家族』p.192より作製。DKが23.0%あるために，両者を合計しても100%にはならない。
2.総理府「老後生活への展望に関する調査」(1977年度)。「どちらともいえない」，DKがあるために，両者を合計しても100%にはならない。

しかも，<図Ⅱ－12>によれば，過去，現在ともに一貫同居が大多数を占めている。しかし，将来の妻世代と次世代との同居志向パターンには変化が生じている点に注意しなければならない。当地域においてさえも，将来の一貫同居の比率は低下する。「一緒に住むのは，私たちの体が弱ってからで十分だわ」(昭和15年生まれ)，「昔と違うから，家の名とかは絶えてもしかたないけど，同居するときも，子どもの希望によってね，自由に決めたいね」(昭和26年生まれ）というように，一貫同居よりも途中同居を望む声が強くなっている。

第２に，同居するといっても，生活そのものがどの程度，世代間

図Ⅱ－12　同別居（志向）パターン



出典：「総理府調査」は，総理府編『高齢者問題の現状』p.84より作製。

で統合されているのか，あるいは分離されているのか，その生活内容が問われなければならない。住居，家計，食事の3側面に関する調査結果は<表Ⅱ－3>に示した。

親世代の同居生活は，「部屋はな，茶の間が皆一緒に使うところで，姑様は中間，嫁は納戸にいだの。夕飯ったって，冬場だけは嫁が作っだども，何も自由にできねぇの」（昭和10年結婚の母）と表現されている。当時は専業農家であったがゆえに，家族全員が農業に従事するのは当然とされ，家計・食事の面での世代的分離は生ずるはずもなかった。

その後，時代の変化につれて，現在の子夫婦と親夫婦との間に，

表Ⅱ－3　同居生活の三側面

側面 / カテゴリー / 調査名	住居			家計			食事		
	同棟	別棟	その他（一部分離）	一緒	一部一緒	別々	一緒	時々一緒	別々
	%	%	%	%	%	%	%	%	%
G_0-G_1（過去）（N＝102）	86.0	0.0	14.0	100.0	0.0	0.0	98.0	0.0	2.0
G_1-G_2（現在）	80.0	1.3	18.7	75.3	0.0	24.7	82.7	0.0	17.3
G_2-G_3（将来）（N＝81）	59.4	8.7	31.9	55.0	20.0	20.0	96.3	1.2	2.5
厚生省調査（現在）志波姫町	98.6	1.1	0.2	92.3	6.3	1.4	99.6	0.2	0.2
	（N＝442）			（N＝443）			（N＝448）		
総理府調査（将来）全国（N＝8,316）	55.2	43.7	1.1	49.6	26.0	24.0	68.2	20.5	11.0

出典：「厚生省調査志波姫町」は，厚生省人口問題研究所『人口の高齢化に伴う生活構造の変化に関する調査』（昭和54年実施）の対象地域となった全国10地区の中から引用したものである。この調査にもとづいた地域比較研究は清水浩昭（1980）によってなされている。「総理府調査」は，内閣総理大臣官房老人対策室『老後生活への展望に関する調査』（昭和52年）から引用した。

（注）「G_2-G_3（将来）」および「総理府調査」には，「不明」「DK」があるために，合計100%とはならない。

勤務中心世帯と農業従事世代といった職業分離が生ずるに至って，家計や住居にも世代的分離の傾向が現れ始めた。最も統合の強い食事面においてさえも，生活時間の差異が食事時間のズレをいやおうなく引き起こしている。

将来，子夫婦は次世代と同居するに際しては，よりプライバシーが尊重される「生活分離型同居」を望む事例さえも現れている。「団欒くらいは一緒の方がいいけど，一つ屋根の下でかまどは二つ持った方がトラブルは少ないと思うね。台所を二つにして，献立もサイフも別々にしたいわぁ」（昭和45年結婚の妻）のような例である。

実際の老後はどのような同居生活なのか，記録をたどっていこう。

7．家娘（いむすめ）さん
——娘同居——

村の婦人の集まりがあると，いくつになっても，「ミッチャン」「イクチャン」と子どもの頃のままの愛称が飛びかう。その愛称で呼ばれるおばさんたちに，集会のリーダーが多いことに気づいた。

「私は，イムスメだから，自由に出歩けんのよ」

イムスメ，どんな漢字なのか。家娘とは家つき娘のことであった。娘がイエの跡を継ぐ場合，娘家督と呼んで，長男の家督とは区別するのである。東北の農村では，長男が跡取りになる，そんな思い込みが打ちくだかれる。

家娘さんは，女きょうだいだけの家や，一人娘の家だけに見られ

るのか。話を聞くと，そうでもないので，あちこちで尋ねてみた。農業委員さんの一人が，自分の住む地区には家娘が多い，現に自分は3代続く家娘家系のムコ養子だと言う。風習なのか。

3女で跡を継いだ80代のおばあさんは，もともと6人きょうだいだった。3人は幼少時に死亡して，姉たちも病気で死んだ。長男である末っ子は南方で戦死した。そして，3女の跡取りの家に養子に来た夫も隣町の長男である。長男とはいっても，末の方に生まれれば，家督は姉が継ぎ，弟である長男は養子に出された。これが，姉家督と呼ばれている相続，いわゆる初生子相続なのか。

「見合いったって，皆，親たちが決めたものだから。子どもは親の言いなりになってたわけね。うちのじんちゃん（夫）も，長男だけれども養子さくれだの。やっぱり姉がいたから，なんぼ長男だって，出されたんだものね」

おばあさんは，長男である弟が戦争に征く前に養子をもらっている。解せない顔をしていると，かたわらの息子さんが助け舟を出してくれた。

「農家は人手が欲しいから，女だろうが何だろうが，一番年長の者が家督を継いだの。家のばあちゃんもそういうことなの」

60代のおばあさんも，話しているうちに家娘だとわかってきた。

――女きょうだいばかりだったのですか？

「いいや，弟もいるの。私は一番上で，20歳になったばりの頃，おふくろ様に死なれで，早くイエば継がねくてならなっかったの」

――弟さんは，その時，何歳だったんですか？

「小学校5年生だったの」

そんな小さな長男の成長を待つわけにはいかなかった。イエは絶やしてはならない。そして，何よりも早く人手を確保したかった。そのためにムコ殿が必要であった。

そのうち，何人もの家娘さんに出会った。

「私は家娘だからに。嫁姑の苦労はせんできた」

アトトリ娘は，家の中でも力を持っていた。

そのうえ，自分に男の子が生まれれば，嫁をもらって，自分は姑となる。嫁の経験もなく，姑にしつけられたことのない女が，突然姑になれるのか。どの姑も，かつての家娘さんは，人の良さそうな，苦労を知らぬ顔のままで，孫の守りをしていた。

現代では，子どもの数が１人，２人に減ったために出現した，そんな家娘さんが多いようだ。若い家娘は，ひとり娘か，２人姉妹の姉のいずれかである。

家娘夫婦と，妻方両親との同居は，まさしく，今，都市でお年寄りが望む「娘同居」ではないか。家娘さんのご両親に，嫁より娘の方がやっぱりよいかと尋ねたら，とんでもない，と目の前で手を振られた。

「家娘たって，口ごたえばかりして。私の自由にはなんないの。今の若い人には，たとえ自分の娘であっても口出しできねぇの」

父親の方はもっとはっきりしている。

「イヤァ，家娘は失敗だァ。気ままで手がつけられねぇもの。これが嫁だったら，そうはいくまいね。隣の嫁さんは，よく言う事聞くしな。嫁の方がなんぼかエエ」

同居している娘の方は自由を満喫しているが，親は喜んでいる風情もない。かえって，嫁をもらった家をうらやむとは，しょせん

「隣の芝生」，よその家はよく見えることの証明のような話ではある。

8．安心な老後の生活

――オラ，今は幸福だぁ――

しわがよる　ほ黒が出ける　腰曲がる
頭(あた)まがはげる　ひげ白くなる……
くどくなる　身短になる　愚ちになる
出しゃばりたがる　世話やきたがる
又しても　同じ咄しに　子を誉(ほめ)る
達者自まんに　人はいやがる
古人の哥
「仙厓『老人の六歌仙』より」

人はだれでも老いる。当然のことが，若い時には見通せない。高齢化社会になって，老後の生活をいかに幸福に暮らすかが，あちこちで論じられている。農村は，他の地域よりも一足早く，高齢化社会を迎えた。

志波姫で出会ったお年寄りは健康だ。80歳を過ぎても野菜を作る。料理もする。そして，何よりも愚痴を言わない。昔は辛かった。それなのに，昔の話は今の人に話しても通じない。嫌われるだけだ。それでも，昔語りを終えたお年寄りは，皆，笑顔を見せた。そしてだれもが昔よりも豊かな暮らしになって，「オラ，今が一番幸福だぁ」と必ず言うのであった。たぶん，誰よりも自分自身に聞

かせたくて口にするのであろう。

ダナドノユズリを済ませると，安心な老後を迎える。今は幸福なのだ，とお年寄りはだれもが言う。かつての辛い農作業や貧しい暮らしに比べれば，現在は幸福な日々以外の何ものでもない。

夫が亡くなって10年たつ。亡くなった時，息子夫婦にダナドノを譲った。

「今では，息子と嫁の給料日に2人から小遣いもらうの。で，(私)もこうして働いて助けてるわけ。だからねぇ，今では幸せなの。今まで苦労してきたからねぇ。これからも，まず楽して暮らしていきたいなぁって，これから何百年も生きるわけではないから，ねぇ。今では幸せでがす，オラはね」(大正4年出生)

昭和の初めに生まれた人も，今は孫の守りだけが仕事である。結婚当時は何もかも慣れない仕事をして，本当に一番辛かった。それに比べると，今は最高に幸せだと思う。

「結婚当時は辛かった。40歳でダナドノ譲られて，また張りが出て一生懸命働いた……。

今はね，体弱くなってね。今はうんと楽だからね，太って太って。大して太って，今うんと幸せでがす。今は最高の幸せね」(昭和2年出生)

明るい丸顔はまだ若い。その人が，80歳の女，70歳の女と同じ言葉を口にする。今が一番幸せでがす。姑と呼ばれる女は，だれもがそう言った。まだおっぴさん（大姑）がいて，大姑に対しては嫁の立場であり続ける姑は，その一言を決して口にしなかった。年齢が同じであっても，立場を異にすれば，同じ言葉は出てこない。

お年寄りは老人のクラブに加入する。朝早くからゲートボールに夢中だ。家の中にいる時よりずっと若返って，ゲームを楽しんでいる。

「ゲートボールはここでも流行だな。お寺にわずかな土地借料ば払って，練習に使わせていただいてるんでがす。いいやァ，なかなか優勝はできねぇす」

老人クラブの会長さん宅でも，ゲートボールと菊作りに話が咲いた。庭にはご自慢の菊の植木鉢がズラッと並んでいる。これは懸崖，こっちが福助，指さしては説明を加える。他の家でも，同じような菊の棚があった。聞けば，「会長さんの菊作りの弟子たちです」と答える。

おばあさんたちは，民謡や踊り，花作り，そういった趣味にあまり興味を示さない。庭の草取り，留守番，ちょっとした買い物などの家事があるからかもしれない。

「近所の茶飲み友だちと，まんず，あれやこれや，何つうことねぇ話ばしてるんだ」

毎日の生活に満足した表情だ。昔語りを終えたおばあさんたちは，別れ際に必ずこう言った。

「本当に，今はいい時代でがんす。長生きさせてもらったきに。毎日が天皇陛下様みていな暮らしさせでもらって。ありがたくて」

白いご飯を食べられるなんて，毎日，田んぼに出ないでテレビを見ていられるなんて，天皇様の生活のようだ。夢以上の生活——今しがた自分が語った農家の辛かった生活と比べれば，隔世の感がするのだ。

役場の福祉担当者も，「ここには老人問題ってないんす」と言う。

本当なのだろうか。中年のお嫁さんの中には，老人介護の経験を持つ方も何人か存在した。90歳以上のおばあさんが何人かいる地域のこと，これからは，介護経験者はもっと増えよう。

「今，おばあさんが15年も寝たきりなの」

「義父が高血圧で30年も寝ででよ，看病しながら農家してた頃は辛かったわな」

長寿社会のもと，農家の嫁は，姑，夫，本人の老後ばかりか，もっと上の世代であるおっぴさん（曽祖父母）の老後までも経験する。女は老後を３度経験するどころか，４度も５度も経験することになるのである。

それでも，農村のおばあさんは安心した顔をしている。同居生活だからか。近所の人も皆，実家のことまで互いに知っている。お茶飲みもボケ防止だ。老人を取り巻く環境が安心感をもたらすのであろうか。

第Ⅳ部　インタビューの記録から

「私は，今までの人生を，微力ながら，みずから選んで生きて来たつもりです。出来るなら，生き方同様，死に方も選びたい…。
贅沢かもしれんが，いいじいさんのままでこの世を去りたいという願いを消すことが出来ません。これは私の我儘であります」
（山田太一　『冬構え』PP. 33～34）

明治生まれの，耳は少し遠いが，口は達者だったおばあさん，「もう金婚式も済んだ」とニッコリしたおじいさん，そして，娘の立場から姑の立場へと，家族の中での地位が変わったばかりの中年婦人，その息子さんの若いお嫁さん，3年間に志波姫町でインタビューした方々は，それぞれの立場から，いろいろなお話を聞かせてくださった。だれもが，これまでの人生を，自分の手で選びとって生きてきていた。残念ながら，すべての方のお話を書き記すことは不可能であるため，第1話から第4話までにまとめざるをえなかった。東北弁には，最初，とまどった。しかし，今，この記録を読み返すと，東北弁はなつかしい，私にもそう思える言葉になっていた。

第1話　おっぴさんの昔語り

明治38年，近くの村に生まれる。尋常小学校卒業後1年間和裁を習う。大正9年，16歳で結婚。大正13年第1子出生後，昭和14年までに7人の子を産む。明治33年生まれの夫も健在で，現在4世代が一緒に住む。農業に生きた女の典型であり，現在は隠居生活を送る。朝6時起床から夜9時の就寝まで，曽孫の守り，草取り，昼寝，テレビ視聴をする毎日である。

――子どもの頃，実家でも農業なさっていたんですか？

んだね。私たちのあたり，田，畑，ほれ大豆だとか麦ね。養蚕が盛んだったから養蚕ねぇ。昔は，小麦でも大麦でも出荷するくらい，作ってたの。野菜は家で食べるくらい。あと畳……。こいつも織ったのね。いぐさば織って，やっぱり売ったってわけね。

――学校を出て，すぐお見合いなさったのですか？

尋常小学校出て，あと，ほら，裁縫1年稽古して，そして嫁に来たからね。お見合いなんてないのね。親が決めて，昔，明治生まれの人たちは皆そうなのね。

――結婚式はどんな様子でしたか？

この家に呼んでね，自分の家と，こっちの家と，両方でご馳走するの。あと，最後はおばんつぁん振る舞いだのねぇ。やっぱり3日はしたったかね。

隣の町から，ちゃぐちゃぐ馬っこに乗って来たの，あの時分ね。

黒の模様のついた着物着て，帯締めて，打ち掛け着たわけ。打ち掛けも着たんだねぇ，馬だから。家で，紋付きの黒，裾模様のついたの着せられて来たんだね。

――それから，ずっと農業だけなさったのですか？

んだね。嫁に来れば，ほれ，いっそ働く一方さ。麦だ，豆だ，養蚕だ。あと，田のことも忙しいから。昔は，朝お天道様出るか出ねぇうちから起きて，夜は暗くなんねぇうち家さ入らなきゃないからねぇ。ほんとに昔は苦労したの。

昔は，農家やるったって，機械でねぇからねぇ。一から十まで，朝から晩まで，何の仕事も手でばりしたからね。忙しかったのねぇ。いっそ，ただ働くことばり。朝から晩まで働くことばり。学校しているうちはいいのであって，学校卒業すると，働く一方なの。

――お嫁に来たとき，お姑さんたちも一緒だったのですね。

おとうさんは亡くなってて，お姑かあさん，おじんつぁん（上の代の父），大きいおっぴおばあさん（上の代の母）と３人いたったの。嫁にきて，おじんつぁんも，おっぴおばあさんも亡くなって，88歳だった。そのうち，10年ちょっとでお姑おかあさんも亡くなって，農家の方は，近くの人，２人くらいにすけてもらって。手仕事は働く人要るからね。

――これまでで，苦労なさったのはどんなことですか？

うーん。何から何までみんな苦労なんだもの。代かけって，馬でしたんだから。馬引っ張って歩いて，それがひどかったねぇ。田植

えだって手で植えんのださね。田植え済むと，今度は養蚕の方忙しくなるから。

夜12時に寝たって，朝は4時に起きなきゃないからね。畑さ麦植えたって，手で刈って，杭に掛けて，干してね，歩踏みでこいだの。みんな手仕事だし，今のようでねぇんだもの。

——家督さんにお嫁さんが来た頃，お姑さんとしては，いろいろ気を使ったんですか。

嫁ごつうものは，だれにしても遠慮してんだから。お互いに遠慮しあわなきゃ，一緒にいられねぇのしゃね。気に合わなくても，話せばお互いに気持ち悪いから，黙ってかまわねぇでたの，私は。

——今は孫嫁さんもいらっしゃいますね？

私はおっぴ（曽祖母）だからハ……，何もかまわねぇけっと。今のかっちゃん（嫁）と孫嫁とは違うのね。今は，何だかんだって言われねぇんだもの，嫁不足だから。今，なかなか嫁さんもらえないし，来る人も少ないからねぇ。農家イヤダって，だれも嫁さんに来る人ないから。今の嫁さんは，気まま言ってんだね。姑の方は，まず自由にさせておくようなもんだ。結局，ことわざの通り，今は，“嫁が姑で，姑が嫁”で，姑が従っているような格好なの。

戦争もくぐり抜けた。農地改革で土地も取られた。子どもにも死なれた。今でもサイフは夫が握ったままだ。

それでも，今は，曽孫と遊べる毎日だし，年金もいただいて幸福に暮らしてはいるものの，かつて，手作業で苦労した農業の手順は

忘れられない。記憶の中に克明に刻み込まれたままだ。土に生きたひとりの女の記録である。

第2話　明治生まれのおじいさん

明治41年，志波姫に生まれる。小学校卒業後，奉公に出る。帰村後，24歳で結婚する。大正，昭和にまたがる動乱の時代を農業一筋に生きる。戦時中から農業関係の役員を務め，50歳からは，農業委員や町議会議員を長く務めた。結婚当初，7反歩の水田にすぎなかった稲作も，現在では2町歩に増えている。しかし専業農家ではない。長男の嫁，孫が勤めに出ている典型的な第2種兼業農家である。日常生活は，朝5時起床，朝仕事，役員の仕事，老人クラブの仕事やゲートボール，そして夜8時の就寝と，規則正しく，かつのどかに営まれている。

――子どもの頃のことを聞かせてください。

俺の親父は独立（分家）したから，財産がなくて，私がちょうど八つになる時，3年ばり出稼ぎ行ったんだね。母は1人だから，（私が）子どもたち5人のうち，小さい子の子守りして，留守番したり，子どもしょって学校さ行ったんだ。学校さ行かねでしまったこともあって，学校の先生に「いつ，子どもおぶわねぇで学校さ来んのや」と言われたことあんのや。「忙しいから，子守りする人いないから，おぶってくるんだ」と語った。そして，歩ったもんだす。

学校終わるとすぐ，よその部落の親類の家さ，奉公に行ったの。大正12年だからな，ちょうど関東大震災あったんでないかな。その

とき，奉公にやられたんだ。で，16歳まで奉公して，家に戻って，近所に作男（さくおとこ）に出されていたわけさ。

――それから，結婚のいきさつは？

24歳で，今の家内もらったの。媒酌人があって，見合い結婚たって，顔など見せられないしゃねぇ。結婚式って，家でしたの。嫁も歩って，歩ったんですよ。下駄はいで，足駄はいで歩ったの，我々のような貧乏な家はみんな。

――農家の仕事は，どんなふうに移り変わってきたのですか。

私ら農家に入ったあたりは，田打ちするったって，水張って鍬打ったんだな。代かきって馬でかくの。稲刈りだって，昔の草刈り鎌のうんと減ったやつ，砥石で研いで刈った。１人前って，８ａから10ａくらい，１日で刈るの。だんだん機械化なってきたなぁ。

――辛かったですか？

何もかも辛かった。農家の場合，１人前稼がないと（働かないと）給料もらえないんだから。１日働いて１升，米なんぼするかというと，１升20銭か。１人前稼いで30銭か40銭。そのあたりの農家の賃金は皆，米でもらったのね。今のように１日何千円だの……時間でないの。12時間くらい稼がねげなかったの。だから，辛いことは辛かった。

夜も働かせられたの。夜，麦の脱穀させられるの。あと，夜通し，寝ねぇで，田んぼさ水引きしたもんです，させられたもんだ。

――女の人はどうだったんですか？

いや，女の人はことにひどかったんだね。子どもは育てなけないし，日中は田んぼさ出はって稼がなきゃないし。家も，炊事ね，必ずしねげねぇんだぉん。女の人は，ほんと辛かったのっしゃ，男よりも。夜の水引きだのはしなかったけど，あとは全部，男と同じに働かせられたんだな。お産して21日，早い人で10日で働いたんだ。ちょっとひどい姑持ったとこのお嫁さんはひどかった。お産して3日目から働いて，姑に「働け」って怒られるから。言うこと聞かねば，「出はれ（出ていけ）」って言われたもんだ。家風に合わないと「出はれ」って言われて，嫁は泣き泣き出はったもんだ。

――その頃，旦那殿（だなどの）が家のサイフから何から，すべてのことを握っていて，若い夫婦はお金ももらえなかったって話ですが？

旦那殿，主人公ね，旦那殿死ななければ，跡取りだって，自由にできないの。戦争前は家督は長男で，いばっていた。だけど財産は旦那殿のもの，親父すね。跡取りが子ども育てるったって，金は親父からもらわなきゃなんねぇ。「けろ（くれ）」って言ったって，くれないし，何か手仕事して，そいづ使えって。

手仕事って，縄ないだね。それ小遣い，ほまづにしたんだよ。夜，寝られないで，100mくらいのやつで30銭か40銭。若いときは眠たいし，上手に縄なえないの。

女の人は俵編むの。一晩に3枚か4枚。1枚が3銭5厘，だから10銭くらいしか稼がれない。

――今の人と比べて，おじいさんの生きてきた時代をどう思います

か？

おらと中年世代とは，あまり変わりないけど，孫になると変わってるな。若い人たちは，昔から比べると楽で楽でしゃねぇんだ。だいいち，職場に勤めたら，給料なんて案外もらうから。

おらの時代は，物が豊富でないし，日露戦争の後だから，ここら辺もうんとひどかった。私たちは，苦しい時代に生まれてきたわけだな。大正は第1次大戦，あのあたりは景気よかったんだな。欧州戦争終わったれば，また景気悪くなったんだな。昭和12，13年，日支事変くらいまで，ずっと生活もひどかった。その間，凶作だ何だってあったね。

――戦争中は，戦地に召集されたんですか？

私は，兵隊要らない時代だったから，兵隊に行かねでしまったからね。昭和20年8月の仙台空襲の時は，警防団で幹部してたから，一晩中，鐘をたたいた。

悲しかったのは，きょうだいが満州さ行ったりしてね。満州開拓団さ入った弟たち家族みんな死んで……。満州で死んだり，戦死したり，そいづが一番悲しいね。

あと，私は配給の係してて，各戸さ砂糖だとかお魚のようなもの，順序よく渡してやるの。ひどいんだなぁ。戦後は，食糧危機になって，今度は食糧徴収員になって。あと，農業委員やったり，議員に当選したりしてね，今になったわけだ。

――今は，どういう生活ですか。

今，老人クラブさ入って役員してるんだけどね。年金もらってる

し，そいなの当てにして，旅行とか，あるいは好きなゲートボールとかすることが一番楽しいんだ。あとは，何もしないで，孫たちの成長するのを見ているだけでさ。

家も，時代の流れで，みんな勤めだから。俺の嫁も勤めだし，息子だけ勤めてないの。だた，喜んでいるのは，私の家でおふくろも生きていて，4世代になってる。こいつは喜んでいるの。同居しているからね。

農地改革を推進して，白米もろくに食べられなかった農業生活から，より豊かな農村を夢に描いた，農村の明治男の一生である。

第3話　サンドイッチ世代の嘆き

大正9年，志波姫に生まれる。昭和12年，18歳で，大姑，姑のいる家に嫁いだ。4人の子どもを産んだ。そのうち長男が跡取りとして現在同居している。田は2町歩あるが，子世代も孫世代も，勤めたり自営業を営む兼業農家である。姑は今も健在で，4世代家族の中ばあちゃんである。まだ老人クラブには入っていないが，毎年行われる同級会で歌ったり踊ったりするのを楽しみにしている。

――昭和12年頃の結婚の様子はどのようなものだったんですか？

私は18歳で町内から来たの。おらの頃は17か18（歳）くらいで普通だった。何もわかんねぇんだものねぇ。中学1年くらい終わって，裁縫2年くらいやって，裁縫って，小学校の裁縫補習科な，16

ぐらいかや。お見合いもしなかった。親が決めて，ここの家の墓守りとしてよこされたの。もともと，親も本人も顔見知りだったの（遠縁に当たる）。

結婚式は，里とこっちの両方でやって，最後がおばんちゃん振る舞い，２日も３日もしたの。ずっと飲むの。私，酒っこつぎしたりして手伝っていたね。

――お嫁に来て，どんなことが苦労でしたか？

うん，人が多くてにぎやかでよかったけど，苦労ばりした。私来たときは，家だってトタン屋根だったし，子ども多くて，病気したりね。年若いおばんちゃん（姑）だったから，まだ子どもが小さくて，私の子どもと一緒に育ててもらった。上のおっぴさん（大姑）が，それ，子守りぐらいはできた。私は外さばり出はって（田で），いっそ稼いでた。子守りなんてしてらんねの。

――お姑さんには気がねしたんですか？

何もたいして。私たち，木炊いて釜っこすすけるから，釜と鍋と，昼休みに磨いて，黒いのこするの。どこの家でもやったぁ。板の間は，朝ふいて，昼間ふいて，また夕方ふいた。そう，３回も。だっけ，火炊くから，ゴミがあがってすすけんのよ。冬は木づり。これは，大きな炉ば作ったの。そこで火を炊いた。あと，洗濯。いっそ稼いでばりいたから。ご飯の時くらいなもんだね，話したってのは。

おっぴさん（大姑）とは仲よかったの。お姑さんはいばってた。私たちの時代は，戦争さ征った人のとこさ来て，お姑さんはいて，

また，今の嫁さんもいるし，ほんと，サンドイッチだわ。私たちの時代，お姑さんからは，やかましく言われて。

――うれしかったことは？

おじいさん（夫）が，戦地さ征って，帰ってこられたとき，一番うれしかった。それと，子どもが成長して，結婚してね。“こんで，かたづいてよかんべ”と思って，涙こぼれるの，うん，式のときね。うれしくて，哀しくて。

――もう，若い人に譲られたんですね？

うん，今は，なに，若い人たちさ譲ったから，のんびりしてす，まずね。たまにけんかすることもあるけど，今の人さは言わないの，おじいさん（夫）には，たまに話すけっと。

買い物も出はんないの。おかあさん（嫁）が旦那殿だから買ってくる。今は勤めだもの。農家なんぼかして，あと，だんだん勤めるようになったね。まだ会社がなくて，土方だの日雇いしてたの。前はお蚕さん，養蚕もやってて，昭和41年くらいまでやってたの。くず繭で着物作って……。どこの家でも皆やってたの。それから酪農に切りかえて，もう去年やめたのす。今は，残飯捨てるのも、もっていねぇような感じするねぇ。

今は，たまに畑へ出るの。若い人が勤めさ出はってから，洗濯，後片づけして，それから畑へ出るの。おじいさん（夫）ばりでは大変だから。もう腰曲がってるんだもの。

――若い人やお年寄りと一緒に住んでいて，うまくやっていくコツ

ってありますか？

黙っているにこしたことはない。返答すればイザコザが起きるの。おかあさん（嫁）も言わないの。皆で我慢してるから，うまくいくのっしゃ。

おっぴさん（姑）に言い返したりしない。若いときから言われた通りしてきたの。古いせいかもしんねけっと。おかあさん（嫁）に，“なんで，おっぴさんに言わないの”って言われるけど，私は黙っているの。

――今は楽しいですか？

歌っこ好きだから，お風呂で歌ってんの。同級会で歌ったり，踊りをやったりねぇ。楽しみだね。

たまに，家族で旅行だの，買い物だのって出かけるけど，私は留守番してんの。若い人と何かするより，同級会で，小学校の気持ちになって，皆と話す方がいいねぇ。

戦争から帰ってきた夫を迎えた時が，何より一番うれしかったという。何しろ，戦時中の農業労働は厳しかったうえ，疎開者もいて，生活すること自体が大変だったから，戦争が終わって安心したのだ。

今は家庭内の役割分担が，本人は家事，若夫婦は勤務と，兼業農家の役割分担と同様である。上の姑が現在入院中で，老人介護も大きな問題となって，老夫婦の肩に大きくのしかかってくる。

苦労した中高年世代は，嫁として姑に仕え，従う生活を強いられてきた。その習性は抜けない。一方，若い世代は，農業にも従事せ

ず，自由に振る舞う。それに対しても何も言わないのが同居の知恵だと考えている。上世代にも下世代にも黙っている世代，思うことも胸にしまっている世代，そんなサンドイッチ世代の嘆きであった。

第4話　若い嫁たちの言い分――アンケートの回答から――

＜第1事例＞

昭和22年生まれ。専業農家に23歳で嫁いで，現在も，夫婦ともに農業に従事している。姑，大姑がおり，仕事の疲れと人間関係の疲れとの双方に苦しんではいるが，作物を育てることに喜びを見出している。しかし，本音としては，パートのような仕事に出たいと思っている。家事は姑の分担である。

問　嫁いできて一番違いを感じたことについて。

農作業です。実家は小さな農家ですが，こちらは大きな農家なので，「仕事，仕事」と，一日も休まず働かなければなりません。これは，今も昔も変わりません。

問　どのようにして解決したのですか。

嫁ぎ先のやり方に従って覚えようとしました。嫁にきた当時から現在まで，3代，つまりおっぴさん（大姑）と姑，私たちの3夫婦が一緒です。おっぴさんは，とても口うるさくてやかましい人ですので，姑は，いくら寒くとも，こたつに入ったことがありません。それで，私も姑のように寒いところにいたのですが，我慢できませ

ん。おっぴさんさえいなければ，私も姑に遠慮せず，いくらかでも楽な方に進んでいったかもしれません。

おっぴさんは，体は動きませんが，口だけはまだまだ達者です。いまだにこづかれながら働いています。

問　お姑さんに手伝ってもらっていることは何ですか？

朝食の後片づけ，掃除，洗濯，夕食作り。子どもの教育については，姑と意見が全く違うので，子どもの世話をするのが一番辛い。

専業農家ですが，家族が多いため，農家一本では生活が成り立ちません。しかし，外へ働きに出ることもできず，いくらかでもと野菜も作ってみました。でも，働き手が2人だけでは，体がつとまりません。年寄りが多いため，農家の方はあまり手伝ってもらえないからです。

＜第2事例＞

昭和26年生まれ。専業農家という全く未知の世界に23歳で嫁ぐ。農家である以上，結婚と同時に同居するのは当然だと思い，「嫁」として嫁ぐという気持ちが強かった。しかし，姑が厳しく，家風になじめなくて苦労している。ただ，夫が期待通りのまじめな人だったので満足している。できたら，将来はもっと農業を手広くやりたいと考えている。

問　嫁いできて一番違いを感じたことについて。

家事，家計です。主人の父親（旦那殿）が家計をやりくりしていて，たとえば魚や肉を買うのも父親であった。「しかたがない」と

は思ったが，私たちの代になったら，女の私が家計，主人が家の経済の大まかなことをする大黒柱となるよう，２人の位置づけを話し合ってきました。

問　ご自分の方が同世代の人たちと比べて，人生は順調な方だと思われますか。

はい。姑は想像していた通り，厳しい人ですし，掃除くらいしか頼めません。買い物も別々です。

でも，家事や農作業は，結婚当初から全部任されましたし，近所づきあいなども，結婚して10年で譲られました（旦那殿譲りが済んでいる）。他の人たちよりずっと早くサイフを持たせられ，自分たちの計画通り，仕事に打ち込めています。３年前から，夫婦で，野菜も計画的に仕事に取り入れています。こういう喜びや，時間にゆとりがあること，新しい分野でやっていけると夫婦で自信が持てたこと，それが順調だと思う理由です。

＜第３事例＞

昭和24年生まれ。24歳で農家に嫁ぐ。実家も農家であったが，独身時代は勤めていた。結婚後はパートと農業が半々の生活をしている。姑の気持ちがあまり理解できないし，一緒に出かけることもしない。現在，家事の中で一番辛いのは，老人の面倒をみることである。

問　嫁いできて一番違いを感じたことについて。

家事です。嫁に来てから，家事，農作業，育児，一切していま

す。姑は家の中の掃除も庭掃除も全然しないので，全部自分がしなければなりません。それに，姑のやることは何も気に入らなかった。例として，洗濯物を干すにも，伸ばして干さずに，そのまま干していた。

どう乗り越えたかって？

自分のやり方を通しました。何をするにも，「どのようにするんですか？」と聞いても，はっきり答えないので迷ってしまいました。「なじょなりしてけらえん（どのようにでもしてください）」と言うだけですので，相談も何もかけられません。

問　お姑さんは，どのような存在ですか？

娘時代考えていた通り恐かった。頑固で気難しい人です。姑は家娘（跡取り娘）なので，嫁の立場とか，あまり世間的なことがわかりません。

とくに姑と食い違うのは，趣味や人生に対する考え方です。何かあると，主人に言いますが，主人は姑の味方をします。本当は夫から姑に言い聞かせてほしいと思っています。でも，うまくやるには姑の意見に従うのがよいと思って，そうしようと心がけてはいます。

＜第4事例＞

昭和28年生まれ。恋愛結婚で，親との同居には気乗りがしなかった。結婚して子どもが生まれるまでは勤めていたが，子どもが生まれてからは勤めをやめて家事に専念している。家事の中で一番嫌なのは食事作りである。

問　結婚について，実家ではどう考えていらっしゃいましたか？

母は，相手が農家の長男ということで気乗りしていませんでした。自分もやはり農家の嫁となって苦労をしてきたので，娘には農家へは嫁いでもらいたくなかったようです。私も，夫の両親と同居するのは，長男でも当然とは思いませんでした。両親はまだ若かったので，働けるうちは別居した方がいいのでは，と思いました。でも，農家の「嫁」として嫁いだ気持ちは強く持っていました。

問　嫁いできて，一番違いを感じたことについて。

農作業と近所づきあいです。結婚した時，姑からは，「近所の人とうまくやってほしい」とだけ言われました。本当に，近所づきあいはいろいろと大変なことばかりでした。

結婚前は，「農家の仕事はせずともよい」「勤めは続けてよい」との約束だったが，それも1，2年で，子どもができると，勤めはやめさせられた。そして，農家の仕事を，嫌でもしなければいけなくなりました。でも，しかたがないので，こちらのやり方になじもうとはしてきました。

問　お姑さんと意見が対立した時どうしますか？

姑の意見に従います。姑には洗濯ぐらいしか手伝ってもらっていませんが，考え方が合いません。夫には，「姑に言ってほしい」と思うのですが，知らん顔をしています。嫁と姑がうまくやるには，私も，干渉しない，我慢する，他家と比較しない，そんなことが大事だと思っています。

問　同世代の人と比べて，自分の人生は順調な方だと思いますか？

同じぐらいです。いろいろ話をしてみると，皆それぞれに苦労もし，また，いろいろ適当に楽しみも見つけているようです。

いずれも当時30歳代の嫁たちの意見である。専業農家，兼業農家，嫁ぎ先はさまざまではあるが，皆，家庭内のやり方に初めはとまどい，そして克服していく様が目に見えるようである。

現在も，農作業に従事している程度は，農業の規模や子どもの年齢によって異なってはいるものの，農家に嫁いだ以上は，農作業に全く無関心というわけにはいかない。

彼女たちは，いずれも嫁と姑の世代ギャップに悩み，それぞれの解決方法を見出している。しかし，アンケートの回答からは，姑と同居しているとはいえ，接触回数は少なく，人間どうしの理解や情緒的結びつきといった側面への自己評価が低いことが浮き彫りにされた。姑世代が嫁として家風に従う努力を強いられたのに比べて，現在の嫁世代は，世代間の差異を明確に認知したうえで，自分なりの生活を築いている。感情的な世代間のへだたりの大きさ，日常の交流の少なさには驚かされるほどである。

あとがき ── 3年間の思い出 ──

> インタビューには自分のすべてが投影されると考えてよい。いや，できるだけ自分を投影させるべきなのだ。そのためには，投影させるものが自分になくてはならないということである。……
>
> ある時には，相手さえも気づいていないことを，導き出してくるのである。それは許されるというよりも，インタビューのなかの大事な要素であり，なにもしないで釣り糸を垂れているだけではいい魚は釣れない。
>
> （黒田　清　　『体験的取材学』　P. 89，P. 93）

ひとつひとつ，まるで謎解きのような農村調査の日々であった。ダナドノユズリ，イムスメ，キジリ……，どれもこれも生まれて初めて耳にする言葉であった。どんな字を書くのか。どんな意味なのか。広い緑色の田んぼのまん中で，日本語なのに，日本人なのに，人の話がわからなくて足がすくんだ。ことに，お年寄りの話はむずかしい。濁音の連なり，起伏のない発声，そして，見知らぬ道具や農作業の手順，それらのすべてが私にとっては解きがたいパズルとしか言いようがなかった。

1983年6月，すでに初夏であった。初めて予備調査のために志波姫町を訪問した。田んぼのやわらかな緑と広い空の青が，ツートン・カラーの新幹線の車体を包む込む。それから1984年，1985年の夏休

みは毎年，志波姫町で，若いお嫁さんや中年の姑さん，そしておっぴさん，農業委員さんや青年会の若い男性たち，たくさんの人々に会って，ただ話を聞くことだけに専念した。

毎年，私と一緒にスクール・バスに乗り，公民館で合宿をする学生たちのメンバーは変わっていく。変わることなく，ササニシキの田んぼと源氏蛍の里に通い続けたのは私一人であった。学生たちは，農家の庭先の大きな豚に驚き，連日の猛暑の中であえぎ，自転車で道に迷う。そんな毎日の中で，学生たちは，人に会ってインタビューすることのむずかしさと楽しさを知るようになる。調査票にも，卒業論文にも書けない，人生の重みに，人が生きるということの美しさに心動かされる。

縁側で語るおばあさんの一生を聞きながら，私はうなずき，学生はテープを回す。ノートをとる学生の手が涙をぬぐう。私の頬に涙が流れて，言葉を失う。インタビューとは，問いを発することでもなく，学問の手段でもなかった。そこには，対話と感動する心だけが存在した。

学生は，畦道でポツリと言う。「私，社会調査をやってよかった。家族論を選んで，本当によかったと思っています，先生」

人の人生に出会って，だれもが考え深くなる。そして，秋，カード転記や集計に追われた後，卒業論文の提出日がお正月明けにやってくる。家族論ゼミに所属した学生は，ひとりの例外もなく，農村調査のデータやテープ起こしをもとにした卒業論文を書いて，社会に巣立っていった。

卒業の日，山形県出身の学生が，「私，10年したら，子どもの手を引いて，もう一度志波姫へ行きます」と言った。作業に明け暮れ

たなつかしいゼミ室で，私は「おめでとう」を口にしようとして，ためらう。私が彼女たちを育てあげたわけではない。私も学生たちも共に，志波姫の方々によって成長させられたのだ。

その感謝の気持ちを志波姫のすべての方々に伝えたい，その想いに支えられて本文をまとめました。ありがとうございます。

私とともに，志波姫の思い出を大切にしている，かつての学生の名を記します。東京から仙台に初めて赴任してきた私を，「先生」と呼んで，同じ釜の飯を食べた若い仲間であり，私に研究を強いた学徒たちです。私の筆を一緒に握って書いた人々です。

1983年度家族論ゼミ『農村三世代家族の研究Ⅰ』

（1983年7月28日～8月5日の本調査を中心に4回の調査を実施した）

英羽英理子　荒井久美　長谷部裕子　加藤玲子　森塚裕美　永山智子　西野早苗

1984年度家族論ゼミ『農村三世代家族の研究Ⅱ』

（本調査は8月1日～8月10日）

伊藤いぶき　中山恵子　野田恵美　大槻典子　大内芳江　津田佳代子　八巻祥子

1985年度家族論ゼミ『農村家族の歴史的変化』

（本調査は1985年7月30日～8月11日）

4年　木村真紀　東海林紀子

3年　片桐明美　松田恵子　及川礼子　斉藤優子　七戸恵利子　鈴木真紀　鈴木佳子

1985年度社会調査法『おとしよりの一生 ―老夫婦の生活史 ―』

2年　青木由佳　芳賀千恵　加藤裕美　佐藤由子　鈴木春恵

豊島由紀

＜付　記＞

この3年間の研究は，筆者，菅谷よし子によって，次のような学術論文として発表されている。

「世代間関係とライフコース分析」1983年,「ライフコースの世代・コーホート比較」「家族意識の世代・コーホート分析」1984年,「配偶者選択における世代的変化」「同居生活における世代的変化」1985年,「農村婦人のライフコース順調度」1986年。以上,（『宮城学院女子大学研究論文集　59号～64号』）

「農村婦人の就労における世代的変化」（『老年社会科学』Vol. 7, 1985年。）

「農村婦人の生活史」（『家庭科教育』4月　60巻5号，1986年。）

'A study of the Female Life Course'（『生活科学研究所研究報告』第18巻，1985年。）

最後に，宮城県栗原郡志波姫町の皆様に厚く御礼申し上げます。とりわけ，調査研究に種々の便宜をはかってくださった，鈴木源次郎町長さん，町役場，公民館，農協，農業委員会の方々，そして，志波姫町の婦人会，農協婦人部，みずほ会，老人クラブの皆様のご協力に深く感謝いたします。

1987年11月

菅谷よし子

（左から並木，菅谷，湯沢の各氏）

座　談　会

村人のくらしとつながり

出席者　　（敬称略・発言順）

菅　谷　よ　し　子（宮城学院女子大学助教授）

並　木　　正　　吉（㈶食料・農業政策研究センター理事長・当研究所理事）

司　会　湯　沢　　雍　　彦（お茶の水女子大学教授・当研究所理事）

湯沢　お忙しいところをわざわざお集まりいただきましてありがとうございます。

きょうは，菅谷よし子先生がまとめられた「ササニシキの村に生きて」というリポートを読ませていただいて，当研究所の理事をなさっていらっしゃいます並木先生と私とで，質問かたがた感想を述べさせていただく，そういう座談会をさせていただこうと思うわけです。

いろいろなことをお伺いしたいのですが，最初に，菅谷先生，宮城県の中にもたくさん農村がありますが，どういう理由でこの町を選ばれたのか。そのいきさつをお話しいただけませんか。

なぜ志波姫を選んだか

菅谷　私は5年前に初めて仙台に赴任したものですから，それまで宮城県のことは全然知らなかったのです。宮城県内でも何カ所か，ササニシキで有名な個所がありまして，どこの町にしようかとあれこれ悩んでみたのですが，この志波姫町というのが仙北のササニシキ米の本場で最もいいお米がとれるのですね。もともとササニシキという品種は，もう少し南に古川市というところがありますが，この古川でできたのです。そこからだんだん，北の方の岩手とか山形あたりまで周辺に広がっていったのです。一番の問題として，私は家族生活を研究のテーマにしたかったので，最も伝統的な家族形態が残っている町はどこなのだろうかと考えまして，ほかにもお米の産地としては，南郷町とか遠田郡の桃生町あたりが有名なのですけれども，もっと北の方に行ってみたのです。ここはどなたもフィールドになさっていなかったということも一つの理由になっ

ています。

もう一つの理由は，厚生省の人口問題研究所が，フィールド――といっても単にデータをとったのですが，老人の生活について，どんなふうに子夫婦と同居をしているかとか，健康状態とか，この町について基本的なデータはとってあったのです。それで数字を見ることができるというメリットもありましたので，志波姫町に決めたわけです。

菅谷よし子氏

湯沢　それは清水浩昭さんのチームですかね。

菅谷　そうです。ただ，彼はそこには直接行ったのではなくて，役場の方とか，公的なルートで全部調査をしたものです。

東北型同居家族の典型

湯沢　並木先生，宮城県は，米づくりということから言いますと，全国的に見てどういう位置を占めるところでしょうか。

並木　日本の米どころとしては東北と北陸が非常に大きいのですが，ササニシキについては，米の出回り量全部のうちの11％を占め，宮城県は，そのササニシキの4割弱を生産しています。

湯沢　生活の因習といいますか，暮らし方ということについても，東北型農村の代表地でしょうか。

並木　その一つと考えていいのじゃないでしょうか。とくに，いま菅谷先生おっしゃったように，岩手の方に近いわけです。そういう意味では，やや伝統的な色彩の強いところです。ここでお書きに

なったものを読んでみて，やっぱりそういう印象を受けますね。

菅谷　仙台市内などとはずいぶん違います。言葉から風習から，どちらかというと岩手県に近いですね。町の変遷のところにも書いたのですが，明治の初めのころは，岩手県磐井郡の名前を取って，磐井県の中の志波姫村という時もあったのです。ですから，どちらかというと，文化圏は岩手寄りになると思います。

湯沢　私ども，30年前に大学の学生だった時には，「日本の家族，とくに同族と親族を背景にした家族関係を知るには，ぜひ東北に行かなければいけない」「東北といっても広いけれども，どこですか」「まず何よりも岩手県だ，岩手にこそ，日本の家族，家の源流があるのだ」ということを言われました。私，学生の頃はついに行かずじまいでしたけれども，その名残といいますか，伝統を引いた姿の一部がこれにもあらわれているのじゃないかと思いましたですね。

並木　昔は，西南型と東北型というふうに，福武直先生などはよく分けられましたけれども，ここは東北型の一つの典型じゃないでしょうか。

湯沢　菅谷先生のリポートには，東北型の直系同居家族の人間関係のいろいろなプラス・マイナス，表・裏が，大変いきいきと語られていると思いました。並木先生いかがでしょうか。

並木　全く同感です。30年ほど前になるのですが，私，『農村は変わる』という本を岩波新書で書いたことがありまして，その頃にあちこちの農村，とくに西の方の農村を回った時に，そこでいろいろ聞かされたこととか経験したことがここにそっくり出てくるのです。

菅谷　西というとどのあたりですか。

並木　神奈川県から，近畿，岡山，福岡，それから出稼ぎ関係では九州の天草です。そういったようなところでいろいろ経験したことが，このリポートでは，少し年代の古いところもあるということもあるのですが，現状が，当時見たこととか，今こういうことが問題になっているのかなというふうなところがあって，あのときには，「お天気と農業は西から変わる」といったことがいわれたのですけれども，そんな感じを受けて，非常に懐かしい思いと，それから，これを読んで，これはいったいだれに読んでもらったらいいのかなということを，もうひとつ考えました。

その点で思いましたのは，最後の学生の感想の中で，「ここへ来てよかった，家族関係の勉強をしてよかった」というのと，「もう10年たったら子どもを連れて来てみたい」というのがありましたが，そういう印象を受けるような，そういう気持ちで読めるような人に読んでもらいたい。そういう意味で，今の若い人たちにこれを読んでもらって，あの女子学生が言ったような印象を持ってもらったらすばらしいことだというのが，私の第一の感想でした。

湯沢　並木先生が『農村は変わる』をお書きになったのは何年前でしたか。

並木　出版されたのが昭和35年ですから，28年前ですね。

湯沢　実際にいろいろお調べになったのは？

並木　その５年とか10年前くらい。データをいろいろ整理したり，村へ行ったりして経験したようなことがありました。その当時に，たとえばお姑さんは，自分が嫁に来た時には姑に気を使った，今は嫁に気を使わなければならない，一生気がねのしどおしだと言っていました。昭和30年代に，神奈川県の富士フイルムの近くに

行きまして，そこで主婦からそういう話を聞いたのを最近のことのように覚えています。それがこのリポートのサンドイッチ世代の話とだぶってきましてね。

私が生まれたのは富山市で，20歳の時に東京へ出てきて，そのまま東京で育っているものですから，東北はその意味では関係ないのですが，終戦直後，縁があって，山形によく行ったのです。農家にも泊まったりしました。その時にいろいろ聞いた話が，ここにもたくさん出てくるのです。たとえば家つきの娘さんの話とか，いろりで嫁さんの座る場所，「キジリ」ですね。そういう話とか，それから「旦那殿譲り」というのが出てきましたが，私は「鍬がしら」という言葉も聞きました。いつから鍬がしらになるか。これは財布じゃなくて，農作業なんです。

菅谷　田んぼ親父ですね。

並木　そう。それを譲られたら，その日から，鍬がしらになった息子から，あれをやってくれ，こうやってくれと，親父が指揮を受けるというのです。その辺はじつにはっきりしたものだという印象を受けたのです。しかし土地の所有権はなかなか譲らない。譲るということには段階があって，何が一番早い，何が最後かということをいろいろ聞いたのですが，それがここに出てきて，本当に懐かしく拝見しました。

つらいサンドイッチ世代

湯沢　私どもの家内も含めまして，東京などの今の50代の奥さんというのは，かなりノウノウとしていまして，最も人生を謳歌しているのじゃないかと思うくらいに勝手なことができるのですね。子

育ては終わってしまったし，うちの責任はないし，適当にお金はあるし……ということで。ところが，ここでのサンドイッチの世代というのは50代のことでしょう？　今でも非常に苦しそうですね。それはどうしてなんでしょうね。

湯沢　雍彦氏

菅谷　やっぱり“おっぴさん”と呼ばれる上の年代がまだいる。長生きになったということ，長寿化が一つですね。おばあちゃんがいなければ自分は一番上の世代になるのですが，まだ年長者はいるから，そっちには気を使うわけです。自分はそちらに対してはあくまでも嫁で，新しい世代にお嫁さんが来る。こちらに対してはお姑さんなのですが，今のお姑さんは力がなくて，気を使うという立場になっている。上と下とに挟まれて苦しい立場になっているということで，都会の奥さんたちが，50代になるといろいろな面で自由を謳歌できるというのとは全く違います。ただ，家娘さんといったような立場にあれば，逆に50代は本当に自由に外に出られますし，婦人会とかいろいろなことの役員さんもできるというように，いろいろな面で余裕があるのです。

湯沢　親から言えば，それは娘夫婦同居でしょう。本人にはいいかもしれないけれども，ちっともいうことを聞かないから，親としてはよくないということを，親父さんが言ってますね。

菅谷　とくにおじいちゃんは，お嫁さんだったら，ハイハイ言うことを聞いてくれるけれども，自分の娘は全然聞かないのだという

ことを言いますね。

湯沢　やっぱり，言うことを聞かせたい。

村から出なかったお年寄り

並木　レポートを拝見していると，養蚕の話がたくさん出てきますが，上蔟（じょうぞく）の時はじつにつらかったはずで，２日とか３日は寝ずにやらなければいけない。その話が出ていなかったと思いますが，これはどういうことなのかという感じを持ったのです。僕は山形に行ったときに聞いたのですが，いろいろそういう話が残っているのです。というのは，「あそこの嫁は上蔟の手伝いに来て，腰巻きが落ちたのも知らずに帰ってしまった」と。２晩も徹夜でやっているものだから疲れ切ってしまったわけです。そういうことが一つ話みたいに残っているのですね。また小作の話では，小作人が小作米を持っていった日は，地主の家では，食べたいだけ食べさせてくれたという。あの人は「○○一生（いっしょう）」という名前だけれども，本当は３升食べたというわけです。３升食べると，腹が前にふくれただけではおさまらないで，横にふくれる。その後は何日か寝ていたという話を聞きました。小作をやった人は，そのときの印象はかなり鮮明にあるのじゃないかという気がしました。

もう一つは，男の人が奉公に行った話が出ていました。あの奉公というのは作男ですか。

菅谷　ええ。それから別の奉公もあるのです。高等小学校を出てすぐの奉公で，働きというより口減らしです。（**注**　養蚕は山形県では盛んだが，当地は平地で稲作中心のため養蚕にまつわる苦労話は少ない）

湯沢　遠くに行くのですか。

菅谷　いえ，この人はわりに近くです。女の人の方が遠くまで行きます。東京などに子守りに行くのです。

並木　“おしん”で言いますと，製糸工場か紡績工場へ行っているわけですね。その奉公の話がここには出てこなかったような気がしましたが。

菅谷　ここは，移動を経験したおばあさんというのはほとんどいない。非常に定着的というか，動かない人ばかりです。

湯沢　行った人は，行ったきりになっているのでしょうか。

並木　居つきの娘さんはそういうことをしないし……。

菅谷　お嫁に来るのもごくごく近くからです。同じ町内からとか。

並木　早くに来ているから，そういう経験なしに来ているんですね。

菅谷　奉公に出たというおばあさんが70代にいらっしゃいましたけれども，ごく近くで飯炊き女をやるのですね。何十人も働いている人のご飯を炊く。そうすると，婚期が遅れて，27～8になりますね。紡績やなにかに行った人はそちらで結婚するらしくて，出てきません。ここのおばあさんもおじいさんも，移動者というのは全くといっていいほどいない閉じた社会なので，1人だけ大阪の方から引っ越してきたおばあちゃんがいらして，どの人も話が同じでおもしろくない，ということを言っていましたが，この農村の人々と，あちこち移転した人とはちょっと違いますね。

ダナドノとカドク

並木　もう一つは，これは私は実際にはそんなに多くはなかったと思っているのですが，東北というと，娘さんの身売りの話が必ず出てきます。自分の妹だとか親戚だとかでそういうふうにされたという話も，この中には出てきませんが，実際になかったのか，言わなかったのか，どちらでしょうかね。

湯沢　厚生省が昭和33年くらいまで公的に発表しているのですね。東北地方から何千人身売りがあった，というようなことをですね。さすがに34～5年になるとやみますが……。そういうことをしなくてもいい土地柄だったのか，それとも言わないのか。

菅谷　農村の中ではここは非常に豊かですね。仙台の方の小さい農家出身の人が，「こんな広い農家は見たことがない」と言っていました。建物も，仙台市内で言えば2～3軒分の敷地がありましたし，田んぼが見晴らすほど広くて，大きいところはいまだに5町歩ですから。ということは，規模が全然違うんですね。農村といっても，ササニシキの誕生の地の古川よりも大きい農家が多いというふうに私は見ました。豊かですね。

湯沢　平均何町何反くらいですか。

菅谷　町の平均が1.5haです。市街地は0.2とか0.3haとかと少ないですから，専業農家というのは本当に大きいわけです。

湯沢　そうすると，身売りはしないで済んだかもしれないですね。富山の砺波平野の農家は，家屋が80～90坪もあるんですが，そのくらい大きいですかね。

菅谷　200平米はもちろんあります。人間が多いから部屋数も多くなりますし，作業場みたいな建物もあって，広いですね。

湯沢　苦しい，大変だといったのは，一つは広いからでしょうが，全体から言えば，戦前の日本農家としては豊かな方なのでしょうね。

ちょっとわからなかったのは，旦那殿と家督というのは，別なのですか，イコールなのですか。

菅谷　旦那殿というのは，結局その家の主ですね。いろいろなものを司る人で，田んぼ親父から財布持ちから全部ひっくるめている。家督さんというと，その人の長男で，家督を譲るべき人という意味です。

湯沢　そうなんですか。私はまた，家督というのはその家のおじいさんのことかと思っていました。下のことなんですか。それじゃ，推定家督相続人ということなんですね。

菅谷　昔の家督相続の家督が残っているのだと思います。向こうの人は「カドク」と言って，ちょっと濁りますが……。だから，女の人でも家督になれるわけです。家娘さんの場合は「女家督」と言っています。

湯沢　学問的な言い方では，最初に生まれた女の子に相続させた場合，「姉家督」って言うでしょう。ここは姉家督がずいぶん行われたような感じの発言がありますね。

菅谷　そうなんです。何代にもわたってそうだというふうな人がいて，前田先生のお書きになった『姉家督』を読んでいったのですが，志波姫町あたりははいっていないのですね。地域的にここは17区あるのですが，そのうちの二つ三つは，私としては，女家督が残っているところだと思いました。向こうの人は，単に風習だというだけで，言葉としては定義しきれないのですが，全町にわたってではないにしろ，ある地域に限っては，最初に生まれたお姉さんが跡

をとるというふうになっていたようです。

湯沢　女家督は宮城県が最も多かったですか。

菅谷　いえ，宮城はないと言われていたのです。あとは栃木の方からずっとあるのですが，宮城県にはないと言われていたのがあったので，そのとき驚いたのです。でも，ないというのはむずかしいですね。もしかしたらどこかにあるかもわからないから，全部探さなければ「ない」とは言いきれない。「ある」というのは，一つでもあればそういえるのですが。

並木　天草に行きましたときに，あそこは出稼ぎといっても，“からゆきさん”みたいなところに行った人たちが多いので，そこで稼いで“からゆきさん地主”というのもいるくらいなんです。そのときに，「娘３人あれば蔵が建つ」ということを聞きましたね。

菅谷　逆ですね。

並木　「娘３人あれば身上がつぶれる」というのが普通だったでしょう。逆なんですよ。それは本当に奇妙というか，耳新しく聞きました。“おしん”のときには，いくらかそれに似たような場面がありましたね。稼ぎのいい娘が紡績工場に行って仕送りをするものですから。そういう意味では，働きのいい娘を持った場合には，親父が非常に楽になるんですね。“おしん”の例ですと，蔵までいかなくても，親父がおしんからの仕送りで家を一つつくりましたが，３人あれば蔵までいくんですね。

菅谷　岩手に近い方では逆なんですね。レポートにもありますが，「婿３代続けば蔵が建つ」というんです。お婿さんというのは，言うことを聞いて，黙々と働くから，という意味なんでしょうね。

並木　それを読んで思い出したんです。

娘と嫁の呼び名

湯沢　年をとっても，「ミッちゃん」「イクちゃん」というように，子どもの頃の呼び名で呼び合うというのですが，それは家娘の人だけがそうするわけですか。ほかの人は，よその村から嫁に来たから，幼いときの名前を知らないということなのかな。

菅谷　言わないですね。名前で呼んでも，「○○さん」になります。また，どこどこのかあちゃんとか，どこどこのばあちゃんといわれます。「○○ちゃん」というのは，幼児期から一緒に遊んだ名残なんです。ですからすぐに見分けがつくのです。「○○ちゃん」と呼んでいれば，それは小さい時からその村にいたということなんですね。

湯沢　しかし，呼び方からしてもちょっと珍しいと思いますけれども。

菅谷　異様ですね，いい年をした人が。

湯沢　三重県の安乗は全体に言葉遣いの荒いところですけれども，全部呼びつけです。ですから，「イクヨ」とか「ミッ」とかいうことになるでしょうね。

菅谷　あそこは全部「○○ちゃん」と愛称です。

並木　富山も，どっちかといえば，ちゃん，ちゃんで呼びます。そういう呼び方は西の方で，東の方に行くと，もっとぞんざいになるというか，つっけんどんになるようですが。

菅谷　お嫁さんの呼び方でいうと，山形の米沢の方では，お嫁に行くと，名前そのものが変わるそうですね。今までカズコだったのがマサコになるとか，全く違ってしまうのです。ただ，呼び名ですから，ふだん呼ぶ場合に使われるので，保険証とか，いわゆる公的

なものはもちろん変わらないのですが。

並木　お手伝いさんは名前を変えるというのはきわめて普通だったんじゃないでしょうか。私は町の中で育ったのですが，親父は分家で，私のきょうだいが8人いたということもありまして，お手伝いさんは2人いました。これは「花」と「千代」という名前に決まっていました。だれが来ても，そのどっちかになるのです。私を育ててくれたのは「千代」ですが，「千代マ」というんです。自分よりも上ではなくて，お手伝いさんのような人を呼ぶ場合の呼び方のような気がします。親父が私のおふくろを呼ぶ場合でも「マ」をつけましたね。だけれども，上の人を呼ぶときには絶対に「マ」をつけないです。同等または下の場合です。

湯沢　愛称でもあるのかもしれませんね。ドイツ語の「ヒェン」と同じで，○○ちゃんと……。

並木　それは普通だったような気がします。嫁さんまで名前が変わるというのは聞きませんけれども。

菅谷　今でも，40代のお嫁さんも変わるそうです。

湯沢　新しい名前をだれがつけるんでしょうね。

菅谷　お嫁入り先の人が決めるんでしょうね。おまえはきょうから新しい人間だという意味だと思います。生まれかわりなさいということでしょうか。

並木　今の20代とか30代のお嫁さんの場合はどうでしょうかね。

菅谷　それを若い人たちが受け入れるかどうかが問題です。

知らん顔する夫

並木　これを読んでいて，男の方がだらしがないと思ったのは，

嫁さんが姑に何か言いたいときに，夫に言ってくれといいますね。ところが夫のほうは全然知らん顔をしている。夫は逃げていますね。

並木　正吉氏

菅谷　アンケートですと，統計的に非常にはっきりそれが出ましてね。結局「何事かもめ事があったときに，あなたのご主人はどうしていますか」と若いお嫁さんに聞いたら，全部「知らん顔をしている」という答えです。「お姑さんに意見をしてほしい」というのがお嫁さんの意向なんですが，意見するなんてとんでもない，女は女同士でうまくやってくれればいいという。自分は知らん顔でずっといたいから。

並木　あれは，3世代住んでいる場合の一つのパターンでしょうか。

湯沢　都会でも，息子，夫というのは逃げ腰ですけれども，どうしてそれほど母親に弱いかということですね。それが親孝行精神なのかどうか。めんどうくさいから逃げちゃうこともあるのでしょうが，そんなことを言ったら親不孝になるという，無言の思いがすごくあるんですね。

並木　おふくろに言った場合，多少気まずいような思いが残るんですかね。

湯沢　年とった親にそんなことを言ったらかわいそうだとか，そういうことはあるでししょうけど。

嫁と婿と姑

並木　ちょっと話が違うのですが，昨年の暮れから，ネパールの留学生夫婦がうちへ来ることになりまして，一緒に住んでいるんですけれども，いろいろ話を聞きますと，日本の戦前の時代を思い出すような家族関係です。若い人が給料をもらってくると，父親に全部渡すのです。父親が必要に応じて若い人に渡すのですが，その場合も，けっして嫁のところに直接行かず，息子に行く。嫁は息子からもらうといっていました。直接やると，あそこの嫁さんは非常に威張っている，というふうにみんなから言われて，とてもいられません，と言っていました。家族全体で住むのがあたりまえになっていますから，うちの家内なんかは，一緒に住んでいてとても気が楽だといっています。

菅谷　フィリピンなんかも大家族に慣れているから，山形の農村花嫁になれるんでしょうね。言葉がわからなくても，人間関係の基本は同じですから。

並木　嫁に来るときに，同居を条件にしたと言いますね。日本では考えられないことです。

湯沢　志波姫でも，嫁ききんがひどいとありますね。将来どうなるかと思うのですが，フィリピンあたりから入れようという声も上がっていますか。

菅谷　そこまではいっていないようですね。

湯沢　それじゃあ，縁談がまとまる可能性が強いというわけですね。

菅谷　というよりも，若い人はお勤めをしているから，共働きという形態で，職場などでお嫁さんを探すのです。問題なのは専業農

家の青年，といっても30代後半から40くらいになっている。その人たちにお嫁さんが来ないのです。

湯沢　共働きをやっているのは，うちは農地はあるけれども，農家のことなんか忘れて暮らせるから，とかなんとかいって結婚しちゃうんでしょうね。

菅谷　年をとったら多少は耕さないとだめでしょうが，今のうちは両親とかみんながやってくれるから，勤めのことだけ考えていればいい。食べさせてもらって，住まわせてもらって，気楽ですね。

湯沢　一方，娘さんだけの家族というのもふえてきたと思うのですが，婿ききんというのはないんですか。

菅谷　娘同居があるということは，けっこうどこからかお婿さんが来ているということなんですね。

湯沢　それはあまり心配ないということですか。

並木　子どもの教育について，嫁さんと姑さんと意見が合わないのがつらいというのがありましたが，もっと具体的に言うと，どの辺が合わないのでしょうか。

菅谷　お姑さんが甘やかすわけです。昔からのしつけの仕方はルーズなんです。若い人には不潔に感じられる。若い人にしてみれば，たとえば，何時間おきに何をあげるとかいうことをしたいのに，そういうことを全く無視して，ともかく可愛がる。自分がしつけたにもかかわらず，おばあちゃんがだめにしちゃうということです。それは非常に若い年代のお嫁さんの意見です。40歳近い奥さんの育児に対する反省というのはおもしろかったですね。自分が嫁に来た時には，おばあちゃんが子育てをするのがあたりまえだった。だから任せておいたわけです。おばあちゃんが年をとって，話し相

手にもならなくて，娘に結婚話が出るようになると，実のお母さんにしつけのことが移ってくる。改めて自分の娘を見ると，非常にわがままだし，何もできてない。やっぱり自分が手間暇かけて育てるべきだった，おばあちゃんに任せたのは間違いだったと，そこでハタと気がつくというようなことを，だいぶ反省していました。

世代による意識の違い

湯沢　近代的意識と伝統的意識のテストがあるでしょう。この結果を見ますと，若い人はかなりモダンになったといっても，それでも20％ちょっとですね。20代の人でも半分以上は伝統的意識だ，と。細かいことを言えば違いますが，大きな目で見れば，年とった人も若い人も，この限りではあまり違わないなと思うのですが，これがどうしてなのかということが，お伺いしたかったことの一つです。

次に，ベングッソンの尺度で計ってみると，これも20代だけはさすがに個人主義が多くなってくるのですが，それでもけっこう家族主義の方が多い。30歳以上になると，ずっと家族主義になってしまう。そうすると，ここで20代と30代には一線を画して，違うのだという見方ももちろんできますが，これも20代だからこうなので，この人たちも，年をとると結局は家族主義になってしまうのじゃないかという気がするのです。その辺どうでしょう。

菅谷　統計でやるとこんなふうな形になるのですが，将来同居生活をどうするかというようなインタビューをしてみると，若い人たちも，「一緒に住みたい」とか，「台所とかお金は分けるけれども，老後はやっぱり一緒に住みたい」と言いだします。3世代，4世代

同居のところのお嫁さんというのは，もともとそういうことを受け入れている人々が来ているのだというふうにも考えられますし，どちらかというと，そういうところで結婚しているお嫁さんは，小さい時から，嫁・姑，つまり自分の母親とおばあちゃんの関係を見ているんですね。そういう大家族制度に慣れているというのが一つあって，あまり不思議に思わない。抵抗がないから結婚をＯＫしたんでしょうし，自分たちも年をとったら，今までの人たちと同じように同居すると考えているのだと思います。確かに20代だけ近代化されたような意識が出ていますが，そうではなくて，これはたぶん，恋愛結婚が多くなったこともありますし，この町の中の人というわけではなくて，銀行だとか，看護婦さんだとか，外で農業以外の職業に就いていた人々が来ているので，そういうことも影響しているかもしれません。

並木　これは小山隆先生とベングッソンの尺度をお使いになっているわけですね。具体的にどんな項目ですか。

湯沢　「子どもがいない場合には養子をとっても継がせようと思いますか」とか，「郷里の家屋敷を売り払ってもいいと思いますか」とか……。

菅谷　「老後は長男が必ずめんどうをみるべきだと思うか」とか。

湯沢　つまり，伝統的同居家族制度を肯定するか，否定するか，と。

並木　物差しが六つくらいあるのですか。

菅谷　５項目ですが，聞くのはもっとあるのです。（**注**　５項目とは，「結婚後の親子の同居」「長男の扶養の責任」「均分相続」「養

子の必要」「郷里の不動産の処分」である）

湯沢　それを5点尺度で計って，何点が多いかとかいうことになるわけです。

並木　ベングッソンの方もやはり似たようなことかと思うのですが……。

菅谷　いえ，ベングッソンは，アメリカの家族連帯性（ファミリー・ソルダリティー）の尺度をつくったのですが，家族主義・個人主義というのは，何かを決めたり，レクリエーションをしたりする場合に，家族一緒にやるか，それとも自分だけの個人主義かというので，基準の尺度が違うのです。つまり買い物に行くのでも遊びに行くのでも，家族全体としてやるのか，それとも自分の都合を優先するのかといったような考え方とか，子どもに対しては，どんなに苦労しても大学の学費は出してやろうと思うか，そんなことはしないと考えるか，親に対しては，老後の医療費を，親が払えない場合は子どもが肩がわりすべきだと思うかどうか――というようなことを言っているわけです。

並木　ほかのところでやったような調査結果もありますでしょうね。

菅谷　たくさんあります。小山先生のは，昭和30年代から，あちこちでいろいろな人が使っていますね。

湯沢　ええ。私も三重県の安乗とか，長野県の諏訪市や東京都の檜原村で調査したときにも使いまして，『コミュニティ』（52号，71号）と『高年齢を生きる』（14号）に発表してあります。

並木　それと比較されて，ここは，伝統的とか家族主義というものがかなり多いというふうになりますか。

湯沢　かなり多いのじゃないでしょうか。伝統的な姿，家族主義の姿がよく残っているところだと思いますね。

家族大事の中の個人的生活

並木　同じ家にいながら，嫁さんと姑さんの会話や交流が非常に少ないという記述がありましたね。

菅谷　最後の方で若いお嫁さんの事例を挙げたところに私の感想を書いたのですが，本当に少ないんですね。なぜかというと，中年のお姑さんとその上のおばあちゃんは何十年も生活を共にしていますから，遠慮しながらも，いろいろなことを話しているんですね。心の交流があって，お互いに優しいんです。それは苦労を乗り越えた上での話ですけど。ところが，若いお嫁さんとその上のお姑さんは，まず最初に学歴が違いますね。今のお嫁さんは，大体短大から大学を出て，専門職に就いて，サラリーをもらってきます。そういう育ちの違いが一つあるのと，日常生活が非常に分離されているんですね。生活時間帯も違えば，住んでいるのも，以前はいろり端でいろいろなことをやっていたのが，２階と１階に分かれるとか，離れと母屋に分かれるというふうになると，本当に顔を見ないでも暮らせるようになってしまうのです。ですから，嫁という意識を持っている人は30代にわりあい多いのですが，20代になると，嫁というよりも，自分はだれだれの妻であるから，姑だとかなんだとかに気を使う必要はないと思うわけです。

湯沢　そうすると，朝食とか夕食は基本的に別ですか。

菅谷　勤めている人は遅く帰ってくるので，おばあちゃんと孫は，５時半とか６時とか，早目に食べてしまうのです。

並木　場所は一緒ですか。

菅谷　居間というか，食べるところは一緒です。

湯沢　台所が二つということはないのですか。

菅谷　非常に珍しいです。かつてもめて一度別居したのですが，もう一回同居し直すに当たって台所を二つつけたという家がありますが，普通は一つです。ただ，テレビにしろ何にしろ全部違いますから。

湯沢　みんなが休みになる日曜日なんかはそろって食事していますか。

菅谷　そういうところもありますが，休日には，若い人は車で近くにショッピングに行ってしまうのですね。おばあちゃんは留守番で，その時に孫を預けられる。だから，おばあちゃんは日曜日でも休みなしで，「行ってらっしゃい」というのが理解あるお姑さんの姿だというので，我慢して待っているのです。だから，日曜日が団欒の日だと答えた人はいないですね。団欒というのは，どちらかというと，隣近所の同年代の人と行ったり来たりしてお茶飲み話に明け暮れる，と。

湯沢　東京でも，葛飾区の鎌倉町などを調べてみますと，友達がとても大事なんですね。家族は，日常の暮らしとか，いざ倒れたときの手にはなるけれども，心の相手にはならない。友達といる時がいちばんのんびりできるということがありますですね。

並木　たとえば若夫婦のところに友達が来るとしますね。昔だったら，お姑さんも共に，家族が全部でもてなしたものですが，今は自分の部屋に連れていってしまって，年寄りだけがポツンと離されてしまう。あっちの方で賑やかな笑い声が聞こえるわけですね。だ

から，同居の中の孤独を，ことのほか強く感じるということを聞くのですが，そういうことはありますか。

菅谷　ええ。たとえば80代のおばあちゃんでも，行くと，ひとりでポツンとしているのです。居間にテレビがあっても，自分ひとりでチャカチャカ回して見ているので，みんなが帰ってくる夜になると，もうご飯もお風呂も済んでいるから，自分の部屋に行く。テレビは一家に5台も6台もあるというのは普通で，「あまり一緒に見ないんですか」って聞くと，「見る番組が違う」と言います。若いお父さんは，プロ野球とかスポーツ番組だし，おばあちゃんはそういうものを見ない。それに早寝ですから，全く違ってしまうんです。「たまには一緒に見るんじゃないですか」と言うと，「いや，わたしはひとりなんだ」と言いますね。日中行くと，見る見ないにかかわらず，テレビは大きな音でガンガンかかっています。

並木　個人主義・家族主義，近代的・伝統的といった分け方をすると，伝統的で家族主義的という結果が出ていますが，具体的なすごし方を見ると，そうとも言えないような気もするのです。意識と実際やっていることとは少し違うと理解した方がいいのでしょうか。

菅谷　というよりも，尺度そのものが，家規範を問うような質問項目ばかりなので，聞かれれば，家大事，家族大事というふうに答えるのですが，日常の生活の中では，そんなふうに運営されていないということです。尺度自体を考え直す時なんですね。

並木　実際の状態がつかめないかもしれませんね。

湯沢　内容的にはかなり生活分離というのは起こっていますね。私の母親が一つ屋根の下で暮らしていて，そういう感じなのです

が，孫は，親が許さないような番組は，おばあちゃんのところに行って，こっそりおばあちゃんを抱き込んで見てたりして適当にやっているのです。食事以外は顔も合わさないでいるのだから，それじゃひとり暮らしがいいかというと，絶対そうは言わないのですね。たとえ2階と1階に離れていても，一緒の家にいる方がいいということになります。

ここのお年寄りたちも，嫁が言うことを聞かないとか，あるいは，非常につらいとか，おもしろくないとか，いろいろ言いますが，結論としては，今が一番幸福だと言っているんですよね。そこのところですよ，問題は。

並木　30年前の話ですが，私，さっき言いました神奈川でいろいろ聞いたときは，お年寄りは，今が一番幸せだというのです。若い人たちは文句ばっかりいう。結局，尺度が違うんですね。お年寄りは昔と比べるし，若い人は都会と比べている。尺度が違うので，そういう答えが出るのは，ある意味ではあたりまえなのですね。

菅谷　お年寄りは，昔のつらい時代と比べると，いまは非常にいい時代だと言います。

湯沢　昔は，生活の中身も意識の違いもなくて，何でもかんでもべったり一緒くただったと思うのですが，今，振り返ってみると，それが必ずしもよくなかったというわけですね。

ありがたい時代の到来

並木　天皇陛下様のような毎日だ，という言葉がありましたね。

菅谷　白いご飯を毎日いただけるというのが，まずもってありがたいわけなのです。

湯沢　11年前に東京都の檜原村で聞いた時も同じような言葉でした。レポートにも書いておきましたが，おばあさんが「まるで大名になったような気がする」って言いましたよ。「その前はどうだったですか」と聞くと，「乞食みたいだった」と言うのです。檜原村は，ここよりはるかに貧しい生活です。耕地もほとんどありませんし，山村ですから。乞食みたいというのは実感としてわかると思いますが，大名なんていうのはどんなものなのか全然知らない。多分今みたいなのがそうだろう，ということなんでしょうね。

並木　天皇陛下様みたいな……というのは，二重の意味で感心したのです。昔だったら，おそれおおくてこういう言葉は出ないですよ。出しても「天子様」とかなんかという言葉です。ところが，今は気楽に出るでしょう。それだけ天皇という存在が身近なものになったんでしょうね。それと，暮らしがよくなったという表現に使っているわけですね。

菅谷　ただ，私がびっくりしたのは，80代の人にとっては天皇陛下というのは非常に遠い，ほんとにお上ですよね。その人の生活と自分とを引き比べて，今の生活は天皇陛下のようだと言うんですね。私は，お茶飲み話でそういうことを言っているのか，地区の人皆が同じなのかと考えましたが，そうじゃないのです。少し離れた地区にいるおばあさんまでも，「いまの生活は天皇陛下のようだ」と言うのですから。皆それぞれ，そう考えているのです。

もう一つは，年金制度があって，お小遣いを受け取れる。あれが非常にありがたいのです。働いてもいないのに，と。昔は，重労働したって稼げない。それが今は，何もしないで，こうやって家にいるだけでお金がはいってくるというのが信じられないと言うので

す。

湯沢　国際比較調査をやっても，日本の老人が，幸福感が一番高く出るのですね。それは，ほんとに都会のインテリにはわからないことなんですよ。

並木　お嫁さんと姑さんとでは，経済力の差で地位が逆転してきているでしょう。ところが，農家の中でだれが一番お金を持っているかと聞くと，お年寄りだと言います。年金をもらっている人たちですね。私の生まれた家の方の話を聞いても，息子が農機具の代金を滞納している時には，息子のところに行ってもだめだ，親父さんのところに行って，「あんたのところの息子は代金をまだ払ってくれない」と言うと，払ってくれるというのです。呉服屋は，孫が成人式の着物をつくる頃になると，母親のところではなく，おばあちゃんのところに行って，「そろそろじゃないですか」と勧めるのがいい，つくってくれるという。それだけお金を持っているのでしょうね。

菅谷　お年寄りは使い道を知らないというか，昔からの習慣で，お金を使わないのですね。何か欲しいというわけじゃない。おやつを食べるといっても，若い人は何か買いに行きますが，おばあちゃんたちは，畑でできたお野菜を煮たりして，大きなお皿にいっぱい盛りつけて，それがお茶受けになるのです。サンドイッチ世代はそれを見ているから，ぐちの一つなんですが，「おばあちゃんたちはいい，なぜかというと，年金を上からいただいているから，お金を持っている。私たちはいくら働いても，そして旦那殿だといっても，それは自分のお金じゃないから，勝手に使うわけにいかない。お嫁さんは勤めに出てサラリーをもらっている。上と下は持ってい

るのに，自分は自分のお金がない」と言うのですね。だから，おばあちゃんというのは，とっても気楽で，お金があっていい，というふうに言われていますね。

並木　相当の苦労を乗り越えてきているのと，全く苦しい思いもなしにきている世代とでは，将来どうなるのかなという気もしますね。

菅谷　若い人の方が思いやりがないというか，それはインタビューに行っても感じるのですが，時間にせかされていて余裕がないのですね。家計の実情を聞けば，農協にずいぶん借金があるということもあって，かなり大変なんでしょうが，若い人の方が，心の豊かさという点では劣っていますね。

並木　豊かさの中の貧乏，というところで，そのようなことを書いていらしたですが，全くそういう点があるんですね。

菅谷　おばあちゃんよりも，おじいさんたちが言うのです。豊かさとは何だ，というふうな哲学的な話は，おじいちゃんたちのほうがクリアーに出してくるんですね。批判力が強いんでしょうか，肯定できないんですね。借金，借金で，いろいろな車を買い，テレビを買い，応接間もつくり……とカタログ通りの生活をしている。だけれども，お金があってやっているわけじゃない。ローンで払っている。これは本当に豊かなのかどうなのか，あなた方若い人は考えてみなさい，というふうに言われるんですよね。

湯沢　いま，農家は借金のほうが多いですか。

並木　農家経済調査では，貯金が1,000万円以上，借金は200万円程度で，一般的には貯金のほうが多いでしょう。

湯沢　借金する場合，担保は何を入れているんでしょう。

並木　テレビとか農機具などでも担保取りますか？　それくらいの金額だったら，どうということはないですよ。

菅谷　農協の借金というのは，たとえば牛とか豚とかを始めるときの設備投資ですね。それはお金がかかるので貸しつけるのですが，失敗するとこわい。大変な勢いでこげつくんです。

並木　普通にテレビを買ったり農機具を買ったりするのは，農協にある貯金をおろしていきますから，なんということない。

湯沢　トラクターなどは各戸が持っているのですか。

菅谷　そうです。

湯沢　へーえ。

菅谷　共有の試みは1地域だけで成功しているのですが，あとはうまくいかないのです。自分の田んぼを他人に耕されるのもいやなんでしょうね。それから，自分の機具は自分で使いたい。仲間割れが起こってくるのか……。

並木　好きなときに使いたいんです。

菅谷　休みなどは集中しますから，かち合ってしまう。

並木　連休田植えとかいうことになるので，結局個人個人で持つようになる。

菅谷　しかしもったいないんですね。1年にほんの数日ですからね。

並木　グレゴリー・クラークさんという日本語の非常に上手な人が上智大学にいらっしゃるのですが，あの人が，ひと昔も前のことですが，ＮＨＫで「新日本日記」というのをやっていまして，日本の消費者運動の人は実におかしなことを言う，「買わされる」と言うけれども，英語には「買わされる」という表現はありません，と

言うのです。しいていえば，買うように強制される，という言い回しはありますが，受け身にしたら，それですぐに「買わされる」という表現はありませんね。「自分が買われてしまう」という表現になってしまうのです。「買わされる」というのはおかしい。いやなら買わなければいいだけの話で，それをひとごとのように「買わされる」という。「農機具貧乏」という言葉も，厳密な意味では英語にないんじゃないでしょうか。農家の場合は，農機具も，買わされるという考えでしょう。ひとごとのように言いますよ。自分が悪いんじゃない，世間が悪い。こう考えちゃう。

菅谷　昭和40年代の初めですか，ＮＨＫで昔，「新日本紀行」の番組でやったものを先日再放送したときに言っていましたが，農機具を売るのに，セールスマンの教育はものすごかったようですね。買えばこれだけ体が楽になるとか，こんなにいいものなんだと言って，３～４年に１度ずつ買いかえるように買いかえるように仕向けたということがあると思います。

並木　それはあると思います。そういうふうに仕向けられたときに，受けやすい体質を持っているんですね。

菅谷　そのころから“三ちゃん農業”になっていて，大黒柱が，お勤めとか出稼ぎとかで，うちにいないから，力仕事ができない。そうすると，機械がはいり込む余地があったというふうに考えたほうがいいと思います。

実習学生の感想

湯沢　リポートの最後の方に，さきほど並木先生も指摘されましたが，学生の印象があります。この学生は，ほとんどが宮城県内の

出身ですか。

菅谷　いいえ。仙台市内というのは，私が一緒に行った中でも2～3人で，東北6県，北海道にまでまたがっています。

湯沢　社会調査をやってよかった，家族論を選んで本当によかったというのは，調査の印象がきわめて強くて，しかもいい印象を得たためだと思うんですね。それはちょうど，私どもお茶の水女子大学の学生が，長野県の諏訪の調査に行っても，また，神奈川県大井町の調査に行って老人に会っても，結果として，非常によかったと言います。それだけ，いまの学生が農家のことを知らないし，かつお年寄りのことを知らない。しかし，調査をやって，よく聞いてみると，いい印象を受けるものを持っているということなんですね。こういうことを，今はどこの学校でもやらない，マスコミもさっぱり伝えていないのじゃないかと思うんです。これは非常に残念なことであって，もっと知られていい，いわばいい情報源の一つなんじゃないだろうかと思われました。

並木　さっきネパールの夫妻の話をしましたけれども，ネパールの人たちは大家族主義です。住まい方の知恵みたいなものがあるような印象を受けました。たとえば正月に私のところにいろいろなお客さんが来ると，そこに必ず来て，一緒にお客さんと話をするんです。お客さんのないときでも，彼らは2階にいるんですけれども，私が下の居間にゴロンとしていると，トントンとノックして，「はいっていいですか」といってはいってきて，一緒にテレビを見ている。ある時間になると，スッと上がっていってしまう。ああいう暮らし方が，大家族で暮らすときの知恵だと思います。それを今の日本の若い人たちが持っていないのだと思うんです。お客さんが来た

ときに，自分たちも一緒になってもてなすとか，父親がテレビを見ていたら一緒に見るとかということはやらないでしょう。そういう意味では，かえって教えられたような気がして，うちの家内は下町で育っているものだから，合理的で割り切られるよりも，そういうのがとっても気が楽なんです。これも一つのいい暮らし方だという気がしますね。

湯沢　菅谷先生，最後に全体的なご感想があったら，一言お願いします。

菅谷　まとめたといっても大したことはないのですけれども，今，ご指摘を受けましたが，欠けている部分もありますし，もっと感動的な人生を送ったご婦人もいらしたのです。でも，村の中ではあまりにも特殊だったのではずしました。昔，みんなの迫害に耐えながらも，たとえば職業にずっと就いていて辞めなかったとか，そういう方もいらしたのです。村の中で，当時専門職に就ける教育を受けるというだけでも大変なことでしたので，その後，子どもを産んでも，歩いて毎日学校に通ったりとか，いろいろな苦労があったのですね。そういう話を聞いていると，学生は本当に感動するのです。結局，学校で教えられることなどはごくごく小さな知識であって，おばあさんでも，おじいさんでも，いろいろな経験をしてきた人に，その人の人生を語ってもらうことの方が大きな教育効果があると，いつも思うのです。学校で教えられることというのは本当に小さいものです。

湯沢　1時間ちょっとでしたけれども，両先生から核心に触れたことをお話ししていただけました。どうもありがとうございました。

（昭和63．1．22開催）

編 集 委 員

青井　和夫　　天野　郁夫
加藤　恭子　　並木　正吉
日笠　　端　　前田　和甫
牧野カツコ　　松方　　健
宮坂　忠夫　　山口　喜一
湯沢　雍彦

頒　価 300円

地域社会研究所刊行物　No. 122
コミュニティ　82　ササニシキの村に生きて

昭和63年 4 月 1 日　　発　　行
発　　行　　財団法人　**地 域 社 会 研 究 所**
〒 100　東京都千代田区有楽町1－13－1
第一生命館
電　話　03 (216) 1 2 1 1 (大代表)
振　替　東京 4－137404
取　　扱　　株式会社　国　　勢　　社
〒 141　東京都品川区西五反田2－19－3
五反田第一生命ビル
電　話　03 (492) 5 8 7 8　振替　東京 2－376
印　　刷　　大 日 本 印 刷 株 式 会 社

落丁・乱丁があればおとりかえします

地域社会研究所について

この財団法人は，近代的かつ民主的な地域社会(コミュニティ)の発展に寄与する目的で，第一生命保険相互会社が剰余金の一部をさいて基金を提供して，昭和38年10月10日に設立されました。

その事業としては，

1．近代的市民意識で裏づけられた地域社会観念の確立についての調査研究

2．近代的地域社会観念の啓発と普及

3．近代的地域社会を形成する各分野の調査研究

4．前記の諸事業についての実験と指導

5．地域社会についての書籍，パンフレットの刊行

などを行います。

これらは，いずれも人間生活の全般にわたる大きな問題で，たいへんむずかしい問題でありますので，研究所の組織は，広く各分野にわたる権威者の方々をもって構成されております。

今後事業の成果により，わが国の地域社会における産業，文化，教育，福祉厚生，建設，自治などの面の諸問題がしだいに解明され，いささかなりとも，新しい日本の社会の実現と発展に役立つことを念願する次第であります。

なお，この研究所の役員は，つぎのとおりであります。

（五十音順・敬称略）

理事長

西尾　信一　　第一生命取締役会長

常務理事

松方　　健　　第一生命元部長

理　事

青井　和夫　流通経済大学教授
磯村　英一　文学博士・東京都立大学名誉教授
衛藤　洋吉　第一生命顧問
白石　　清　元常務理事
高山　英華　工学博士・東京大学名誉教授
並木　正吉　食糧・農業政策研究センター理事長
日笠　　端　工学博士・東京理科大学教授
福武　　直　文学博士・東京大学名誉教授
宮坂　忠夫　医学博士・女子栄養大学教授
矢田　恒久　第一生命相談役
湯沢　雍彦　お茶の水女子大学教授

監　事

山口　正義　医学博士・結核予防会理事長
山本　長弘　第一生命専務取締役

評議員

天野　郁夫　東京大学教授
加藤　恭子　上智大学講師
田辺　定義　前東京市政調査会顧問
塚本　亮一　第一生命取締役相談役
内藤寿七郎　医学博士・愛育病院名誉院長
中根　千枝　東京大学名誉教授
前田　和甫　医学博士・東京大学教授
牧野カツコ　お茶の水女子大学助教授
森村　道美　東京大学助教授
山口　喜一　東京家政学院大学教授

顧　問

矢野　一郎　第一生命相談役

出版案内

購読ご希望のかたは，誌代を直接郵便振替（東京4-137404番，財団法人地域社会研究所）でご送金ください。また，継続して購読されるかたは，1年分まとめてご送金されるとご便利です。　（送料実費）

コミュニティ

A5判　頒価 300円

既　刊

第1号　コミュニティのあり方
第2号　新しい農村生活
第3号　地域社会と婦人
第4号　都市生活とコミュニティ
第5号　家庭のしつけとコミュニティ
第6号　老人問題とコミュニティ
第7号　コミュニティと青少年
第8号　日本人のつきあい
第9号　家族と親族（品切れ）
第10号　健全な子どもの育成
第11号　今日の教育を考える
第12号　レクリエーションとスポーツ
第13号　健康なまち
第14号　交通安全とコミュニティ
第15号　日本人のことばと話し方
第16号　テレビと家庭生活
第17号　家庭婦人の学習
第18号　公共の場におけるマナー
第19号　精神衛生
第20号　ヨーロッパを考える
第21号　公衆衛生
第22号　千代田地区保健活動10年の総括
第23号　創造的農業者
第24号　団地生活を考える
第25号　食生活を考える
第26号　日本人の暮しと住まい
第27号　地方都市とコミュニティ
第28号　わがコミュニティ
第29号　家族はこれからどうなるか
第30号　自然と人間
第31号　子どもの遊び場
第32号　コミュニティと広場
第33号　乗物と人間
第34号　ことわざとコミュニティ
第35号　主婦の生活時間
第36号　おやじの座を語る
第37号　社会と健康
第38号　災害とコミュニティ
第39号　日本の青年
第40号　コミュニティ——10年

第41号　民話とコミュニティ
第42号　余暇とコミュニティ
第43号　CATVとコミュニティ
第44号　ゴミを語る
第45号　社会福祉の国際比較
第46号　親族問題の諸相
第47号　わがまち——その財政
第48号　保健・福祉とコミュニティ・オーガニゼイション
第49号　企業とコミュニティ
第50号　人間の居住環境とコミュニティ
第51号　身のまわりの安全
第52号　山村女性の生活変動
第53号　近所づきあいのコツ
第54号　手づくりの地域文化
第55号　各国家族の新しい動き
第56号　コミュニティと土地利用
第57号　川とコミュニティ
第58号　日本の高校生・アメリカの高校生
第59号　まちづくりの実験
第60号　主婦と職業
第61号　コミュニティ・センターの評価
第62号　食料問題と農業のゆくえ
第63号　コミュニティと生涯教育
第64号　コミュニティと生活道路
第65号　新しい地域保健をめざして
策66号　夫の役割・妻の役割
第67号　健康と食生活
第68号　子どもと教育
第69号　ことばと社会
第70号　商店街
第71号　ある漁村社会の移りかわり
第72号　集合住宅
第73号　住みよい暮らし
第74号　住区と施設
第75号　昔の主婦と今の主婦
第76号　東アジアの家族問題
第77号　少年非行
第78号　東アジアの地域社会
第79号　町内会
第80号　日米コミュニケーション考
第81号　三つ子の魂百まで
第82号　ササニシキの村に生きて(新刊)

高年齢を生きる

A５判　頒価 300円

既　刊

第１号　高年齢人口の問題点
第２号　高年齢者と家族
第３号　定　年（品切れ）
第４号　高齢者の生活記録より
第５号　オーストリアの高齢者と家族
第６号　高齢と体力
第７号　お茶の水出の50年
第８号　のぞまれる高齢者の学習
第９号　楽寿の哲学
別　冊　各国人口の高齢化
第10号　思い出は遠くまた近く
第11号　同居の知恵・別居の知恵
第12号　寿命世界一をめぐって
第13号　年　金
第14号　兼業農家のお年寄りたち
第15号　働く力――高齢者
第16号　高齢者問題にどう答えるか？
第17号　農村高齢者の移りかわり
第18号　高齢者のための住宅
第19号　高齢とレジャー
別冊２　世界の人口像
第20号　ぼけないための暮らしと工夫
第21号　高年齢者と食事
第22号　年　金―その新しい仕組み―
第23号　現代老親扶養論
第24号　続　現代老親扶養論
　　老人生活の国際比較
第25号　八十にして伝う
第26号　大井町のお年寄りたち（新刊）

コミュニティ叢書

No. 1　会社従業員の生活と意識

――第一生命従業員調査――

編著者・青井和夫(東京大学教授)／発行・地域社会研究所／取扱・国勢社／A 4 判・184頁・頒布価格 850円

○近郊農業地帯(神奈川県足柄上郡大井町)に社屋移転に際し第一生命の従業員全員と配偶者を対象に生活構造・態度・意識・希望等をまとめたもので，研究者はもちろん，地方進出を企図する企業および受け入れ側にとっての資料。調査集計表多数集録。

No. 2　大井町―地域社会の構造と展開

編著者・福武　直(東京大学教授)／発行・地域社会研究所／発売・東京大学出版会／B 5 判・720頁・頒布価格 2,500円

○第一生命の理想的なまちづくりの構想による移転とともに急速に都市化が進みつつある同地域における経済・社会・政治などの姿を把握分析したもので，今日各方面の関心事となっている農村の都市化地域開発計画などの参考資料。

No. 3　都市生活者の生活圏行動

――第一生命従業員調査――

編著者・高山英華(東京大学教授)／発行・地域社会研究所／取扱・国勢社／A 4 判・188頁・頒布価格 1,600円

○第一生命の従業員とその家族を対象に 4 回にわたる生活行動調査の結果をまとめた，いわゆる東京のホワイトカラー族世帯の行動パターンを示したもので，大都市や近郊地域における施策に対する参考資料。既刊 No. 1 の姉妹編として刊行。職員行動地図および調査集計表多数集録。

No. 4　大井町開発基本計画

編著者・日笠　端(東京大学教授)／発行・地域社会研究所／取扱・国勢社／A 4 判・128頁・頒布価格 2,000円

○最近とみに市街化が進んでいる神奈川県大井町を対象に，コミュニティ・プランニングの考え方をいかに都市計画のなかに織り込むかという課題を研究してまとめたもの。農村から都市へ脱皮しようとする地域における施策に対する参考資料。図・表多数集録。

No. 5　恒心会員の歩み

——岡山県の創造的農業者——

編著者・並木正吉(農林省農業総合研究所計画部長)／発行・地域社会研究所／取扱・国勢社／B 5 判・220頁・頒布価格 1,500円

○かつて表彰をうけた岡山県下の優秀な若き農業者たちのその後十数年にわたる経営の変化のかずかずや地域に対する活動を詳しく追跡し，その業績を広い視野にたって評価したもの。類書がまれなのみならず，困難な転機にたつわが国の農民・農村・農業の将来に対する資料として薦める。

No. 6　農漁村社会の展開構造

——秋田県由利郡金浦町——　（品切れ）

編著者・福武　直(東京大学教授)／発行・地域社会研究所／発売・東京大学出版会／B 5 判・380円・頒布価格 2,800円

○東北の日本海沿いの農漁村金浦町を対象に，産業経済・社会・政治の諸構造をはじめ生活改善・教育など広範にわたり，歴史的過程から現状の問題点にふれ，それらを明らかにし，学問研究の上で大きく寄与するのみならず，こんにち揺れうごく農漁村のありかたに対しても示唆となる参考資料。

No. 7　地域社会の形成と教育の問題

——神奈川県大井町——

編著者・松原治郎(東京大学助教授)／小野　浩(武蔵大学講師)／発行・地域社会研究所／発売・東京大学出版会／B 5 判・267頁・頒布価格 2,400円

○既刊No.2で調査分析した神奈川県大井町のその後の社会機構の変化，とくに新しいコミュニティの動向のなかで，教育の問題のもつ意味と展開過程を実態調査に基づいてまとめたもの。実践的な施設にとって大いに役立つのみならず地域社会の教育問題に関する学問研究上の意義も大きい。

No. 8　農山村社会と地域開発

――神奈川県大井町相和地区――

編者・福武　直(東京大学教授)／発行・地域社会研究所／発売・東京大学出版会／B 5判・410頁・頒布価格 4,500円

○第一生命の進出や東名高速道路の貫通などによって都市化していく神奈川県大井町において，農業地帯としての相和地区が，農業の将来への不安のなかで，どのように展開したかを述べたもので，高度成長過程における開発と農業の矛盾を示す事例を分析したものとしてその価値は高い。

No. 9　企業進出と地域社会

――第一生命本社移転後の大井町の展開――

編者・福武　直(東京大学教授)　蓮見音彦(東京学芸大学助教授)／発行・地域社会研究所／発売・東京大学出版会／B 5判・563頁・頒布価格 6,400円

○第一生命が大井町に移転してから10年，第一生命の進出と併せ，この間の社会，経済状勢が大井町の地域社会にどのような影響と変動をもたらしたか，また研究所が意図した理想的な田園業務都市の建設の構想はどのように具現されたか，専門学者による大井町調査研究の最終報告で叢書No.2の続編として地域社会発展考察上の参考資料。

No.10　健康農村活動と地域社会

――羽生市千代田地区――

編著者・青井和夫(津田塾大学教授)　宮坂忠夫(東京大学教授)／発行・地域社会研究所／発売・東京大学出版会／B 5判・353頁・頒布価格 7,000円

○昭和31年から10年間継続した埼玉県千代田地区健康農村活動について，対照地区をとるという実験計画をとりその影響を検出した。しかし，その後の農村の急速な変化に着目し，活動終了後の再調査を行った。その両地区は兼業化と都市化の影響の下に類似した性格をもっているが，地域活動や地域連帯性には差違がみられる。国際的にも評価された健康農村活動期間ならびにその後の10数年間の追跡調査についての報告である。

No.11　学習社会の成立と教育の再編

――長野県上田市――

編著者・松原治郎(東京大学教授)　久冨善之(埼玉大学助教授)／発行・地域社会研究所／発売・東京大学出版会／B 5判・510頁・頒布価格 8,000円

○生涯教育が叫ばれる日本の教育状況の中で，地域社会がもつ教育力を再発見するとともに，学校教育を始め各種の教育の社会化を深め教育の地域社会性を高めるにはどうすべきか，本書は上田市の教育総合調査をもとに教育を中心としたコミュニティ形成の可能性を探る。

CSF